山田風太郎傑作大全 5

売色使徒行伝

山田風太郎

廣済堂文庫

廣済堂文庫絶賛発売中！

妖異金瓶梅――山田風太郎傑作大全①
十三角関係――山田風太郎傑作大全②
修羅維新牢――山田風太郎傑作大全③
誰にもできる殺人―山田風太郎傑作大全④
売色使徒行伝――山田風太郎傑作大全⑤
天国荘奇譚――山田風太郎傑作大全⑥
叛旗兵――山田風太郎傑作大全⑦
夜よりほかに聴くものもなし―山田風太郎傑作大全⑧
剣鬼と遊女――山田風太郎傑作大全⑨
青春探偵団――山田風太郎傑作大全⑩
切腹禁止令――山田風太郎傑作大全⑪
赤い蠟人形――山田風太郎傑作大会⑫
いだ天百里――山田風太郎傑作大全⑬
長脇差枯野抄――山田風太郎傑作大全⑭
旅人 国定龍次㊤―山田風太郎傑作大全⑮
旅人 国定龍次㊦―山田風太郎傑作大全⑯
死なない剣豪――山田風太郎傑作大全⑰
魔群の通過――山田風太郎傑作大全⑱
ヤマトフの逃亡――山田風太郎傑作大全⑲
八犬傳㊤――山田風太郎傑作大全⑳
八犬傳㊦――山田風太郎傑作大全㉑
江戸にいる私――山田風太郎傑作大全㉒
神曲崩壊――山田風太郎傑作大全㉓
太陽黒点――山田風太郎傑作大全㉔

カバーイラスト＝山本タカト
カバーデザイン＝原田幸生

山田風太郎傑作大全⑤

売色使徒行伝

山田風太郎

廣済堂文庫

536
や7-5
524

山田風太郎　売色使徒行伝　山田風太郎傑作大全⑤

廣済堂文庫

特選時代小説

9784331605370

ISBN4-331-60537-X

C0193 ¥524E

1920193005240

定価 本体524円 ＋税

切支丹の教えに教化され切支丹信者を率いて江戸に潜伏し、密かに布教活動を続ける町奉行所同心近江源三郎と、時を同じくして、切支丹同心を辞め隠し売女の元締めとして女色に走り人生を謳歌する漆間春蔵。共に天国を目指した二人の人生を待ち受けていたのは処刑の二文字だった。表題作を始め、「姫君何処におらすか」「スピロヘータ氏来朝記」「邪宗門仏」「奇蹟屋」「山屋敷秘図」の切支丹時代小説６篇を収録。

特選時代小説

廣済堂文庫

山田風太郎

やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「達磨峠の事件」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第２回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

売色使徒行伝
定価 本体524円 ＋税
平成８年９月１日　初　版
平成10年10月30日　２　刷
著　者　山田風太郎
発行所　廣済堂出版

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 5

売色使徒行伝

山田風太郎

廣済堂文庫

特選
時代小説

山田風太郎　売色使徒行伝

廣済堂文庫

特選
時代小説

2230①

山田風太郎　売色使徒行伝

山田風太郎

切支丹信仰、女色へと走った町同心の
最後に、キリスト処刑が再現される。

ミステリー&ハードノベルス　**廣済堂文庫**

廣済堂文庫

特選時代小説

廣済堂文庫
ミステリー&ハードノベルス
好評発売中!!

峰 隆一郎　用心棒が斬る
どんな男も精力絶倫にさせる「姫」の用心棒になった刀根又四郎だが…。

赤松光夫　未亡人姉妹
熟れた身体が官能を刺激する。欲望処理のため男たちは美肉に群がる!!

山田風太郎　十三角関係
遊廓のマダムのバラバラ殺人事件の背後に人間の弱さ、哀しみがひそむ

山田風太郎　誰にもできる殺人
アパートの住人たちの間で起きた6件の殺人事件の裏に潜む真実とは?

山田風太郎　修羅維新牢
明治元年の江戸。罪なき旗本十人が薩摩兵によって運命を弄ばれた……

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 5

売色使徒行伝

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

姫君何処におらすか　5
スピロヘータ氏来朝記　39
邪宗門仏　71
奇蹟屋　93
山屋敷秘図　119
売色使徒行伝　167
解説・細谷正充

姫君何処におらすか

一

長崎に於て、一八六五年三月十八日

親愛なる教区長様。こころからおよろこび下さい。私たちは、すぐちかくに、むかしの切支丹の子孫をたくさん持っているのです。彼らは、聖教の記憶をずいぶん保っているらしく思われます。

しかし、まず私に、この感動すべき場面、私がみずからあずかって、こうした判断を下すにいたりました場面を、かんたんに物語らせて下さい。

きのうのひるすぎであります。男女小児をうちまぜた十四、五人の一団が、天主堂の門前にたたずんでおりました。一ヵ月まえ、この『二十六聖殉教堂』の献堂式があげられて以来、市民のひとりとしてちかづこうともしなかった門の前にであります。しかも彼らは、ただの好奇心で来たものとは、なにやら態度がちがっている様子であります。天主堂の門はしまっており

ましたから、私はいそいで門をひらき、聖所のほうへすすんでゆきますと、参観者たちも、あとからついてきました。

私は、愛の牢獄たる聖櫃内に奉安し申している御主様のおんまえにひざまずいて、心の底まで感動せしめるに適切なことばを私の唇にあたえて、私をとりかこんでいる人々のなかから、ひとりでも主のために礼拝者を得しめたまえ、と嘆願いたしました。

ほんの一瞬祈ったかと思うと、年のころ、四十歳か五十歳くらいの小さな婦人が、そっと私の傍にちかづき、胸に手をあててささやきました。

「ここにおります私どもは、みなあなたさまとおなじ心でございます」

私は愕然としてたちすくみました。

「ほんとう？　……どこのお方ですか、あなたたちは？」

「私たちは、みな浦上の者でございます。浦上では、たいていの人が、私たちとおなじ心をもっております」

こうこたえてから、彼女は眼をあげて、

「サンタ・マリアさまの御像は何処？」

と、たずねました。

サンタ・マリア！

このめでたい御名が、この婦人の口からもれたのを耳にして、私はまだ夢に夢みる心地であ

りました。

私たちは、三百年まえ、聖フランシスコ・ザヴィエル師が、この島国に第一歩を印せられて以来、いずれの地、いずれの時代に於ても、聖教がこの国以上に熱烈に受け入れられたことはなかった事実を知っております。けれど、その信仰の種は、世界宗教史上、空前絶後の兇暴な弾圧をうけて殲滅されました。琉球で、教区長さまと日本入国を待機していた数年間に読んだ、この国の人々の悲壮で偉大な殉教史は、私たちをあのように鼓舞いたしました。けれど、この国に上陸してみると、御存知のように、その信仰の種は完全に根だやしになり、人事のかぎりをつくしてよびかけても、ことごとく徒労に帰するというにがい発見と絶望を味わわなければならなかったのです。

それが——やっぱり、種は地の下にのこっていたのです！　もう私はすこしもうたがいません。いま、私のまえにいるひとたちは、三百年まえの、あの切支丹の後裔にちがいない。私はこの歓喜を、天帝に感謝しました。そして愛するひとびとにとりかこまれて、聖母の祭壇のまえに——私たちのために、あなたが仏蘭西から奉持してきて下さいましたあの聖像のまえに、彼らを案内しました。

彼らはみな、私にならってひざまずきました。祈禱をとなえようとする風でしたが、しかしよろこびにたえないで、おたがいに顔を見あわせ、息をきらせながら、

「そう、ほんとうに、サンタ・マリアさまよ、ごらんなさい、御腕には御子ゼズスさまを抱き

申しておいでなさいます」

というのでした。

やがて、そのなかのひとりが私に申しました。

「私たちは、霜月の二十五日、御主ゼズスさまの御誕生のお祝いをおこないます。御主さまは、この日の真夜中、厩のなかにお生まれになり、それから難儀苦労のなかに御成長になり、おん年三十三歳のとき、私たちの霊のたすかりのために、十字架にかかってお果てなさいました。ただいま、私たちは悲しみの節の中であります。あなたさまも、このお祝いをなさいますか？」

「そうです。私たちも守ります。きょうは悲しみの節の十七日めです」

と、私はこたえました。私は、彼らの悲しみの節とは、四旬節をさしているのだと悟ったのでありました。

この祝福すべき参観者たちが、聖母の御像をあおいで、感動したり、私に質問したりしているあいだに、他の日本人が聖堂に入ってくると、彼らはパッと八方に散って、そしらぬ顔をしました。彼らは異教徒の日本人を——なかんずく役人を、極度に恐れているのです。この国には、まだあのいまいましい禁教令が生きているのです。

私は、聖堂内を巡覧する各種の人々が、いったりきたりするのにさまたげられて、この参観者たちと思うように話をすることができませんでしたので、また出なおしてくるようにと、浦

上の切支丹――私はきょうから、彼らをこうよびたいのです――と、とりきめをしました。彼らが、三百年をこえるきびしい禁教令のもとに、何を保存しているか、すこしずつみましょう。彼らは十字架をうやまい、聖母マリアを愛し、祈禱様のことばをとなえております。しかし、それがどんな祈りのことばであるか、私にはわかりません。その他のくわしいことは、近日中に御報告いたします。

日本の宣教師ベルナルド・プティジャン

二

長崎に於て、一八六五年四月二十六日

親愛なる教区長様、こころからおよろこび下さい。その後信徒は続々と発見されております。最初、私に話しかけてきた婦人――イザベリナ百合がその後申しました。

「仏蘭西寺が出来るのを知っておりました。けれど、それが天帝さまのお寺とは存じませんでした。けれど、高い塔のうえに黄金色の十字架がたち、また、中にサンタ・マリアさまの御像があると人が話すのをきいて、もしや仏蘭西寺の異人さんは、私たちのながいあいだ待っていた神父さまではあるまいか、縛られるか、殺されるかわからないけれど、とにかくお会いしてみよう、と胸をドキドキさせてきたのです。……私たちの村には、むかしから、七代たてばローマから黒衣の神父さまがおいでになって善か世の中になる、といういいつたえがありますし、また、沖にくるのは法王の船よ、丸にヤの字の帆がみえる、という歌もうたわれてきました。……」

私が彼らを発見したときのよろこびの数倍も、彼らが私を知って狂喜したことはまちがいありません。

そして、村にかえった人々が、そのことをほかの信徒たちに告げたのでしょう。あれ以来、天主堂につめかける切支丹はひきもきりません。むろん、一般の参観者にまじってですが、私をみると、そっと胸に手をあててみせ、かなしげな、うれしげな、うったえるようなまなざしをみせますから、すぐにわかるのです。……

私はだんだんおそろしくなりました。役人に知られてはなりません。横浜でとうとう天主堂の参観禁止をうけた轍をふんではなりません。実際に、このごろようやく気がついたらしく、長崎奉行の手先が、密偵となって見張っているようすです。知られたら、参観禁止どころか、入牢、或いは打首の運命は覚悟のまえでなくてはなりますまい。事実、いまから六、七年前にも、多くの切支丹がとらわれて、生爪をはがされるやら、歯をぬかれるやら、恐ろしい責苦にあって殉教者が出たということです。これを浦上の「三番崩れ」と呼ぶそうですから、きっとそのまえにも、一番め、二番めの弾圧があったにちがいありません。……ですから、どうぞ、巴里の宣教会本部にも、この秘密を厳守するように御伝達下さい。実際、この「日本に切支丹

の後裔存す」という事実は、たしかに全世界を驚倒させる報道ではありますが、いま仏蘭西や伊太利などの新聞雑誌に発表され、日本政府がそれを知ったら、万事休す、すべては水泡に帰するのであります。

ああ、それほどの恐怖の網目をとおって、なお私をさがしもとめる切支丹の可憐さ。できれば私は、彼らをこの胸にヒシと抱きしめてやりたいくらいです。おお、ねがわくば主よ、われらにいま少しの自由をあたえて、主の事業を成さしめたまえ。——

切支丹が潜伏しているのは、浦上ばかりではありません。久留米附近、天草島の一部、長崎港外の島々、外海地方、平戸、五島の各部落に、幾万の信徒が、陰に聖教を奉じ、父はこれを子につたえ、子はこれを孫にゆずって、二百何十年かの恐ろしい教難の嵐の底に、じっと埋没していたのです。なんたる頑強な、英雄的国民でありましょうか。

けれど、彼らの信仰に、迷信の苔がついているのはやむを得ません。彼らはおなじ切支丹でありながら、ほとんどおたがいに連絡はないようです。いままで私が知ったところでも、その洗礼の様式、信仰の玄義の解釈、祈禱のことば、みなまちまちで、したがっておたがいに異教徒だと思っているようです。じぶんの部落だけが、真の切支丹だと思いこんでいるようです。

浦上の切支丹は、十字架の印を、まるで西班牙人、葡萄牙人のように、栂指でひたいに三たび十字のかたちをえがきます。久留米附近の切支丹が洗礼につかっている形相語は、誤謬だらけで、おそらく無効と思われます。天草の切支丹につたえられている教理書は、口伝のままなのを四十年ばかりまえに書きとったものらしく、天地の創造、人祖の堕落、救世主の約束などがかいてありますが、ずいぶん怪しげな小説的伝説がまじっております。彼らがふだん櫃のなかや井戸の底にしまっておき、「悲しみの節」になるとひそかにとり出して礼拝するという聖母の像は、たいていこの国の裲襠をきた女の姿か、あるいは仏教の観音と称する女神の顔にえがかれています。……しかも彼らの、じぶんたちのその信仰をまもることの頑なさはおどろくべきほどで、部落によっては、私どもですら疑いぶかげな眼でみるものもあります。

彼らは、きっと私に次のような質問をして、私をおどろかせます。

「あなたさまの国とロマの国とは、心が同一でございますか？」

「あなたさまは、ロマのお頭さまから派遣されなさったのですか？」

「聖母マリアを尊敬なさいますか？」

この三点をたしかめなければ、私たちが三百年まえ日本にきた『伴天連』の後継者であることを承知しないのです。

数年前に、プロテスタントの宣教師が、東山手にひとつの小さな会堂を設けたそうであります。屋根のうえに十字架のたっているのをみた浦上の切支丹は、もしやと思って、さぐりにやってきました。宣教師は大いによろこんで、基督のお話をしましたが、切支丹たちはいちはやくその教義がじぶんたちのものと異なることを見ぬいて、それっきりだれも二度とちかづかなかったと申します。

彼らの頑冥ともいうべき信仰は、私に讃嘆と憐愍と――そして恐怖すらもかんじさせます。その迷信の苔をはらうにはたいへんな努力が要ることでしょう。無数の土地に、無数の島々にひそむ『隠れ切支丹』をたずねて、彼らの祈禱や洗礼が無効であること、彼らがあやまっていることを、奉行所の密偵の眼をのがれつつ説教してあるくことは、実に容易ならぬ覚悟をもたなくてはなりますまい。しかし、私たちは断じてそれをやらなくてはなりません。一日もはやく可憐な彼らの魂をすくってやらなくてはなりません。……

そのためには、道案内が必要です。後日司祭ともなれそうな素質をそなえた日本人が必要です。一身を天帝にささげる意欲にもえ、しかもまだ迷信の苔のついていない清純な少年か、青年が――。

私は有望なその候補者をみつけ出しました。浦上の少年で、敬三郎、源太郎という兄弟であります。兄は十七歳、弟は十二歳で、どちらもきわめて利発であります。もしなんとかしてペナンの神学校へ入学させることができましたら、きっと優等生になることでしょう。いまふたりを、弥撒に奉事させ、羅甸語を学ばせるという名義でとどめております。

はじめ十二歳の源太郎が、司祭になりたいといい出したとき、私はわざとおどしてやりました。

「もしそのことが役人に知られたら、さっそく取っつかまって、殺されるよ――」

「かまいません。切支丹だからって殺されると、霊の救いがきて、天国へのぼれるというじゃ

ああありませんか」

「それあそうだけれどもね、役人はすぐに殺してはくれないよ。そのまえにひどい目にあわせるのだ。おまえはまだ子供で、とても辛抱ができないよ」

「子供ですから、私はそんな力をもちません。しかし、あたえていただきます。天帝さまから、その力をあたえていただきます」

兄の敬三郎も、眼をキラキラかがやかせて、微笑してうなずいておりました。――なんという感動すべき愛らしい少年たちでしょう！

実際、私はこの兄弟を、教区長さまにひと目みていただきたいくらいです。ほんとうにふたりとも、曙に匂うあの桜の花のように美しい児なのです。

私はこの兄弟にただちに公教要理をさずけ、初聖体の準備をさせるつもりでおります。それには、やはり役人の眼をのがれるため、隠匿所をつくらなくてはなりません。さいわいいまの私の居宅の、二階の天井裏が物置となっておりますので、これに秘密裡に工事をくわえるつもりです。そうして、それが出来しだい、これを『御原罪の御やどりの間』と名づけたいと思います。

日本の宣教師ベルナルド・プティジャン

三

長崎に於て、一八六五年九月十四日

親愛なる教区長様、きょうは、私でもいったいどうかんがえたらよいのか、見当もつきかねる御報告をいたさなくてはなりません。

浦上をはじめ、外海地方の各部落、神ノ島、伊王島、平戸、五島の島々にひそむ切支丹の動静と、彼ら迷える羊がいかにして主の羊舎にかえってきつつあるかということは、いままでの何十通かの御報告でよくおわかりのことと存じます。それはひとつひとつ、あきれるくらい迷信的、狂信的でありましたが、しかしよくいってきかせれば、彼らは幼児のごとく素直にじぶんたちのあやまりをみとめ、またそのあやまりのためにすんでのことで天国をとり失うところであったとふるえあがって私に感謝してくれました。

——ところが、ここに、どうしても私どもを受けいれぬ島があるのでございます。それはたしかに切支丹の島ですが、なんともいえないほどふしぎな、怪奇的ですらある島なのです。

各地の切支丹は、いつも申しあげるように、おたがいにまったく連絡がなく、おたがいを異教徒としてうたがいあっているようなありさまなので、むこうから噂をきいてひそかにこちらにやってきてくれなければ、その存在すらも把握できないような状況ですが、それもまず大部

分は判明してきたこのごろ——この一週間ばかりまえに、はじめてわかった島なのです。

「ひょっとすると、あの部漣島も、善か人かもしれまっせん」

そんなことをいう信者がありました。切支丹は切支丹を善か人とよぶのです。

部漣島というのは、長崎の西方、約二十里の海上にうかぶ孤島であります。ほんの小さな島で、人口は三、四百人くらいであろうということで、べつに山らしい山もなく、地表はむかし火山からふき出された大小の石でおおわれ（もっとも、これは、この東方にある五島にも共通する地勢です）、住民は主として漁業に従事しているらしいのですが、くわしいことはよくわかりませんでした。というのは、この島の人々は、外界とまったく交通がないからであります。

それがなぜ切支丹の島らしいということがわかったかというと、二、三年まえ、五島の漁夫がこの部漣島の沖を漂流しているとき、それはちょうど星もない真夜中のことでありましたが、その海の果てから——たしかにその島から——波の音にまじって、細ぼそとした、こんな唄声をきいたというからです。

「ベレンの国の姫君
いまはどこにおらすか
御讃め尊めたまえ……」

——また去年の春のこと、外海地方の出津にながれついた一艘の漁船がありました。嵐に難破したものらしく、なかにはふたりの漁師がよこたわっておりました。きいてみると、それが

部漣島の住民だったのであります。それをたすけて家につれかえったのは、出津の切支丹でありました。

粥などあたえて、まず人心地がつくと、その漁夫のひとりが、きょうは何日か、ときいて、こたえてやると、非常に困惑したような表情になったそうです。それはあとで気がついたことで、そのときは、たすけた切支丹の男のほうが、少々困惑しておりました。

なぜなら、その日は、切支丹の暦で、ちょうど謝肉祭の日で、是非とも鳥獣の肉をたべなくてはならず、もし子供などたべずにねてしまうと、天狗（日本の悪魔）から口を吸われるといって、肉類を唇になすりつけてやります。そういう行事をこの部漣島の漁夫に見られたくなかったからであります。

それでも、そのことは、彼らに知られずにすみました。ところが——あとで、そのふたりの漁夫のところへいってみると、彼らの唇は真っ赤な血に染まっていたというのです。そして、ひとりの漁夫の小指が、ぷっつりくいちぎられていたというのです。……

いまからかんがえると、もしかしたらそのふたりも切支丹だったのではあるまいか。やはり彼らも切支丹暦の勤行をまもったのではなかろうか。肉を欲し、それをもとめることがかなわず、彼らなりの謝肉祭をやってのけたのではあるまいか？　——こういうのです。

そうだ、それにちがいない。私は確信しました。部漣島は切支丹に相違ない。そして、この話でも察しられるのは、部漣島の切支丹の信仰が、いかに熱烈をこえて、妖気をおびているか

ということです。

一昨日、私はその部漣島へ出かけたのであります。——島の人々は、たしかに切支丹でありました。が、それはあまりにも恐ろしい切支丹でありました！

その夜の九時頃、私は敬三郎と源太郎をともない、竹の皮の笠をかぶって、下り松から小舟にのって、海へのり出しました。八人もの強健な切支丹の漁夫が、根かぎりこいでくれましたが、その島にたどりついたのは、きのうのもう夜明け方でありました。

岩だらけの磯に舟をのりすて、私たちは島へあがってゆきました。そして、いつものように、私と三、四人だけがしばらくとどまり、敬三郎とほかの四、五人が、まず部落へ入ってゆきました。むこうがほんとうに切支丹であるかどうかをたしかめ、かつ、彼らが何百年か待っていた黒衣の神父——私がきたということを告げるためです。

なかなか話が通じないらしく、いままでの経験のうち、いちばんながく待たされたときの二倍は待たされました。東の海から、太陽がのぼってきました。きょうも晴れるらしい。海の色は、どこかもう秋です。しかし、海と空が明るくなればなるほど、なんという寂しい島でしょう！　浜辺もそうですが、むこうにみえる部落のほうも、ただ石だらけ、石垣だらけ、小さい貧しい屋根さえも、無数の石ころに覆われているのです。

やがて、敬三郎たちが、三人の老人をつれてきました。

「神父さま、やっと私たちが仲間であることをわかってくれました。これが、この島の帳方

パオロ徳蔵さん、こちらが聞役のドミンゴ孫八さん、あれが水方のジワン市兵衛さんです」

この島の秘密信徒団の組織は、やはり九州本土の『さんたまりあの御組』と大同小異でありました。この三人が、この島の長老らしい。いずれも、年のころはわからないほどの老人で、ふかい皺のなかから、犬のように澄んだ——かなしげで強く、うったえるようで疑いぶかげな眼が、じっと私を見つめております。

私は彼らがおそれないように、微笑して、いろいろときました。……が、しだいに胸のなかがくらくなってゆきました。……彼らはたしかに切支丹の後裔らしい。しかし、これほど徹底的にまちがった切支丹ははじめてです。ほとんど、聖教の原形もとどめないといったほうがいいくらいです。

この島では、暦の繰り役、よそで帳方とよんでいる役を大和尚といい、洗礼役すなわち水方を中和尚といい、祝日の触れ役すなわち聞役を小和尚という。イエスを十ス様といい、聖母をお影さまという。祈禱のことばは、こういうのです。

「万事かないたもう御身の御ふかん、聖イナツシオ様は、いくさのしういにたちいりさせたまいて、スベリキの大将はしらいしよにしらいたてまつる。下界にては傷をこうむり、天の上には御三ぼうの位をうけ、天をあずかりさせたもうようにつつしんでいのりたてまつる。アメン、十ス」

なんの意味だか、さっぱりわからない。これはおなじ日本人の切支丹である敬三郎以下にも

全然わからないのです。

ああ、教区長様。——これだけなら、まだいいのです。けれど、どうぞつぎのような問答をお読み下さい。

「御主——いや、その十スさまは、どんなお方か、なぜおなくなりになったか、御存知ですか？」

「十スさまは、ナサレテと申す国の若君で、姫君お影さまを恋いしたわれたお方でござえます。……」

「え、ゼズスさまが、サンタ・マリアを恋いしたわれたと？」

「はい、ところが十スさまには十三人のお弟子がござって、その十三番めのジョタスという男が悪人での。こいつめがお影さまにもちかけて、もったいなやお影さまは、牛小屋のなかで、ジョタスの子をお生みになりました……」

「おお、マリアが、ユダの子を！」

「そこで十スさまは、こがれ死、かなしみ死をなされたのでござるが、そのまえの晩、ほかの十二人の弟子に、ひときれの肉をちぎって、御馳走なされたら、みな満腹して、あまりがあったと申します。それから……尊いお経文がござる……」

「……」

「さるほどに、十字架のもとに、姫君お影さま、御弟子たち立ちならび居たまえば、十スさま

姫君を御大切におぼしめし、御弟子をごらんありて、姫君に、いかに女人、なんじのとがをゆるさん、ただこれより御身の夫は十二人なり、とのたまい、十二人に、なんじらの妻はこれなりとのたまえば、それより御弟子たち、お影さまを妻となしたもうなり……」

「……」

「十スさまはお亡くなりあそばしたが、そのときとがはゆるされたから、お影さまはひとたび生をうしなわれても、また生きかえりたちかえり、いつの世にも顕現あそばして、わしどもをいつくしみ下されるのでござります……」

私はからだがふるえるようでした。御主さまのおんいけにえも、十二使徒も、御復活も、なにもかもめちゃめちゃです。めちゃめちゃどころか——彼らをあわれむより、私は怒りに息もきれそうでした。——しかし、教区長さま、ああ、これだけならまだいいのです。……

これらの問答は、その浜辺でかわされたものではありません。その大和尚といわれるパオロ徳蔵の家にいってから、ながいあいだの説得ののちに、やっと彼らがかくしてもっていた聖絵やメダイをみせてもらい、ポツリポツリきき出したものでそれはもうおひるちかくになっていたでしょう。ここまでうちあけながら、なお三人の老人の眼には、私たちをどこか信じかねる暗い不安のひかりがありました。

顔いろをかえて、二の句もつげない私に、むしろ反抗するように、白髪の徳蔵は恐ろしい厳粛な調子でいうのです。

「げんに、この島にもお影さまがおりなされる」

「なに、サンタ・マリアさまが！」

そのときでした、どこからか、遠く奇妙な音楽の音がきこえてきたのは。——

島は、そのすこしまえから、なにやら騒然としておりました。事実また、色の黒い、いかにも漁師らしい島民が、それまでに何人も、何度となくこの家をのぞきこんで、三人の老人をせきたてるらしい顔をみせたのです。しかし、老人たちはくびをふって、彼らをたち去らせたのでした。

ふいにパオロ徳蔵が、重っ苦しい、しかし決然とした調子でいい出しました。

「きょうは、この島で、お影さま祝言の祭りがごぜえます。……祝ってやって下せえますか？」

「お影さまが、結婚？　だれと？」

「十二人の弟子と——」

こと、ここにいたっては、かなしみより、あわれみより、怒りより、おどろきより、私は絶大なる好奇心にとらえられてしまいました。三老人の眼は、そういう私の表情を凍りつかせるほどまじめで、深い色をたたえていました。

私はうなずきました。私はやっと反省したのです。これほどではありませんが、いままでの経験から、この『はなれ切支丹』たちの信仰習俗を、あたまごなしに否定したり、笑ったりす

ることは、百害あって一利もありません。とにかく一応しずかに彼らの行事をみてやることが大切なのでした。——しかし、私はそれをみてはいけなかったのです。ああ、それはなんたる破戒無慙の行事でありましたろう！

「きょうは……あなたたちの暦で……どんないわれがある日なのですか？」

つれ立って、わびしい村のなかの石の路をあるきながら、私は老人にたずねました。

「お影さまの御祝言は、毎月あるのでござえます」

「毎月の……きょう？」

「日はきまっておりません。お影さまの月の障りが終ったあくる日に——」

私は、なんのことだか、いっそうわかりません。こういっているあいだにも、村の路地、坂路から、はだかにちかい老若男女が、バラバラとあらわれて、ある方角へはしってゆくのです。

そこは島の西側にあたる、白い石に覆われた広場でした。そこは三百四、五十人の人々が、大きな円をえがいてあつまっていました。そして、太鼓を鳴らし、笛を吹き、足を交互にふみながら唄っているのです。

蒼い海を背に、一本の木の十字架がたてられていました。十字架には、あの髷を結った、日本風のサンタ・マリアさまの絵がかけられていました。その下に、祭壇——とはいえません。ひとつの木の台です。そこに、その絵とおなじような、美しい、けれど古びた裲襠をきた若い女が坐っていました。

ああ、教区長さま、どうしたことでしょう、私はその女の顔をみたとたん、それがこの島の女とも、お影さまとも思わず、

「おお、サンタ・マリアさま！」

と心中にさけんでいたのです。その女は、それほどゆたかに気だかく、美しく威厳にみちていたのです。

唄声がたかくなりました。

「参ろうや、参ろうや、
天国の寺に、参ろうや……」

そして、群衆のなかから、ひとりの若い男があるいてゆきました。

それをむかえて、お影さまは、裲襠をハラリとぬぎおとしました。すると——彼女は、全裸体だったのであります。碧空に秋の白い太陽は燦々とかがやき、横たわった彼女のからだは、これまた雪のようにかがやきました。

「天国の寺とは申すれど、
広い寺とは申すれど……」

それからあとのことは、かくにしのびません。あまりのことに、さけび出そうとした私の手を、敬三郎が紅潮した手でしっかりとつかまえました。三人の老人は、恐ろしい眼で、じっと私のほうをうかがっておりました。

「神父さま！　……神父さま！　あれはなに？　あのひとたちは何をしているのです？」

そうさけぶ少年源太郎の眼と口を覆ってやったのがせめてものことです。……お影さまの祝言とは、このような神をおそれぬふるまいであったのか！

「祝言」をおえた若い男はもとの路をもどり、そして別の若い男が十字架のほうへすすんでゆきました。私は、おさえようとしてもおさえきれぬ恐怖に、ついにうめくようにパオロ徳蔵にたずねました。

「これを……まさか十二人――」

「いかに女人……これより御身の夫はこの十二人なり、とのたまい、十二人に、なんじらの妻はこれなりとのたまえば……」

パオロ徳蔵はおごそかにつぶやきました。

「それより御弟子たち、お影さまを妻となしたもうなり……」

「と、その十二使徒を、だれがえらぶのです？」

「十スさまにかわり、わしどもが」

「あのお影さまは？」

「十スさまにかわり、わしどもが」

もう四人めの男があるいていました。

「あのお影さまは、むかしからお影さま？」

「三年まえにかわりました。まえのお影さまは、血肉はみなの血肉にとかし、霊は天に昇られました……」

「し――死んだのですか？」

「お影さまの御昇天は、三つの場合にあります。御懐妊のことがない――月の障りが涸れたとき。役人どもがうばおうとしたとき。それから十三人めの悪人ジョタスの甘言にお影さまがまよわれたとき――」

私には、パオロ徳蔵のいうことがよくわかりませんでした。

もう広場には、七人めの若者がすすみ出ていました。お影さまは、白い蛇のように台上にのたうっています。ときどき、すすりあげるような泣き声をもらします。あれが、この島民たちには神聖きわまりない美しさにみえるのでしょうか。広場には、ひざまずくもの、祈るもの、そして酔ったような唄声のみがみちておりました。

「参ろうや、参ろうや、
天国の寺に、参ろうや、
天国の寺とは申すれど、
広い寺とは申すれど……」

教区長様、おゆるし下さい。こんどだけは完全に失敗しました。彼らを救うことができませんでした。それどころか、私はガタガタとふるえ、吐気をもよおし、一刻もはやくこの恐ろし

い淫らな島をのがれたい一心でいっぱいであったのです。

ところが、パオロ徳蔵たちは、その私の袖をつかみました。

「神父さま。……あなたさまが、私どもと同心のお方だということは、いつわりではございますまいね？」

「同心のものです。……日を改めて、きっとまた参ります」

と、敬三郎が蒼ざめてこたえました。

「それでは、そこの小さなお方をこの島にのこして下され……。あなたさま方が、またおいでになりますまでな」

と、徳蔵が指さしたのは、小さな源太郎なのです。彼らが私たちをうたがい、奉行への密告をおそれて、源太郎を人質にとろうとしていることはあきらかでした。

私たちがすくんでいるあいだに、はやくも察した敬三郎が、弟にいいきかせました。

「源太よ。のこれ、わしたちは、すぐにくる。……ひとりで寂しかったら、天の星に祈れ。神父さまから教えていただいた祈禱をわすれるじゃないぞ」

——そして、私たちはヘトヘトになって、さっきこの長崎にかえってきたところなのです。源太郎は部漣島にのこりました。

のこすのではなかった。大変なことをしたと、いま私のこころは後悔の念でねじくれるようです。まさか殺すこともありますまいが、あの少年をあの邪教の島にのこして、それは殺されるよりも恐ろしい結果をもたらしはしませんでしょうか？

このままではすておけません。私は明日から新しい勇気をふるい起こして、あの少年と、それから——あの不幸な島の人々を救うべく活動を開始しなければなりません。どうぞ、教区長様、私たちのためにお祈り下さい。

日本の宣教師ベルナルド・プティジャン

四

長崎に於て、一八六五年九月二十日

親愛なる教区長様。部漣島の件につき、御報告いたします。

あの翌日に、もういちど島へとってかえそうとする私を、敬三郎がひきとめて、こう申すのです。

「あの島を覆っている迷信の霧は、三百年来のものです。いま神父さまがゆかれても、窒息なさるか、それともたまりかねてさけび出されて、いよいよ絶望状態に陥らせるか、いずれかです。それよりも、まず私が——日本人の私が参りましょう。たとえ、あの三人の老人がつくり出したお影さまにせよ、三老人をもふくめて、島民たちのあの女に対する尊敬はたいへんなもののようです。私がいって、まずあの女を正しい御教えにたちかえらせましょう。神父さま、

どうぞ三ヵ月だけお待ち下さい。きっと私が部漣島からよいお便りをおくりましょう。……」

いろいろかんがえてみたあげく、私はすべてを敬三郎に託するつもりになりました。この純潔な少年の熱情と、そして年にも似合わぬ聡明さと沈着さは、この場合他のだれよりもたよりになれそうに思われます。

それについて、私は昨夜九時から、例の『御原罪の御やどりの間』で、敬三郎に洗礼をほどこし、けさ未明、弥撒聖祭をおこない、天使のごときこの少年にはじめて天のパンを拝領させました。

ああ、二百何十年来、はじめて聖体のゼズスが日本人の胸にやどらせたもうたのであります。私はこの少年を、私の伝道の初穂として、御主と聖母にささげます。

おお、ゼズスはいまでこそいたるところで侮蔑されたまえど、やがてかならず日本国中に尊敬されたもう日がくることでありましょう。

敬三郎はよろこびいさんで、朝、蒼い海の果てへ、妖島部漣島へ去ってゆきました。教区長様、なにとぞ彼に多大の望みを託して下さい。

日本の宣教師ベルナルド・プティジャン

五

長崎に於て、一八六六年二月二十五日

親愛なる教区長様。またしてもかなしいお便りをしなくてはなりません。いいえ、昨年の暮からはじまったあの恐ろしい教難の嵐――今度の騒動についてではありません。

むろん、それにも関係はありますが、私にとって、もっと恐ろしい、不安な事実なのです。ついにうごき出した長崎奉行の手は、浦上をはじめ、外海地方、港外の島々、五島にまでいたらざるなく、私の愛する子羊たちを狩りたて、獄に追いこめつつありますが、その悪魔の手がとうとうあの部漣島にもおよんだらしいのです。

源太郎がかえってきました。ひとり縛られてかえってきました。一昨日、捕吏の群が部漣島へおしよせて島の人々をいっせいにとらえ、いつかお知らせしたあの西海岸の広場に竹矢来でかこんだ獄をつくって、追いこんだそうですが、源太郎は島の人間ではないというので、かえされたのであります。奉行所から連絡がありましたので、年少のことではあり私の使用人として、私が強くいってひきとりました。

ところがであります。おなじく島の人間でない兄の敬三郎はかえって参りません。いいえ、みずから島民とおなじくその獄の中に入ってしまったそうであります。

ああ、愛する敬三郎はどうしたのでしょう。はじめ数回、希望にみちた秘密の便りをよこし、それっきりここ四ヵ月以上も消息を絶ってしまったあの美しい少年は、どういうつもりなのでしょう。

じぶんものこるといいはる源太郎を、それでも強いて追いかえした彼は、長崎にいって私にあったらこう伝えてくれといったそうです。

「神父さま。お影さまを部連のサンタ・マリアから人間にひきもどしました。そのかわり、私も人間にかえりました。ふたたびお目にかかれますまい。さようなら！」

これはどういう意味なのでしょう？　敬三郎が、人間になったとは？

源太郎にきくと、敬三郎とあのお影さまとは仲がよいが、敬三郎はほかの島民にはあまり好感をもたれていないようです。だれかが、「ジョタスがきた」といっていたそうです。敬三郎が、ユダとは？

そういう源太郎じしん、すくなからず妙なのです。どこかうつろな風で、私の顔をみようともせず、気がついてみると、西の方をむいて、なにか十字をきりながら、ブツブツとつぶやいています。

「われこの涙の谷になげき泣きて……恩寵みちみちたもう御身に御礼をなしたてまつる。御主は御身とともにましますし女人の中において、わきて御果報いみじきなり、十スの御大切なるお影さま、いまも、われらが最期にも、われら悪人のためにたのみたまえ。……アメン」

私は不安でなりません。この源太郎も、あの敬三郎も、部連の島の魔性の嵐にあてられたのではないでしょうか。あの島の妖気はどれほど恐ろしいものがあったでしょうか。

私はいってみなくてはなりません。今夕、さいわい横浜からロシュ公使閣下が、ローズ水師提督と長崎へ到着なさいました。私はこれからさっそく公使におあいして、部連島へわたれるよう奉行所へ談判していただくつもりであります。そして、敬三郎を一日もはやく救い出さなくてはなりません。

日本の宣教師ベルナルド・プティジャン

六

長崎に於て、一八六六年二月二十八日

親愛なる教区長様。ただいま長崎へかえって参りますと、貴師さまのお贈り下さいました聖フランシスコ・ザヴィエルさまの御遺品が到着しておりました。なんとも御礼の申しあげようもございません。

それほどはげまして下さいますのに、なんと私の無力なことか。——すべては無に帰しました。いいえ、これ以上はない破局にたどりついてしまいました。敬三郎が死んだのです。

おお、いまも私の眼にのこっているあの凄惨な冬の波濤のいろ、その海を背景に、くびをつっていた敬三郎のぞっとするほど美しい死顔のいろ。

私が部連島についた朝、敬三郎はまだ生きていました。しかし、気が狂っておりました。——いや、敬三郎ばかりではなく、竹矢来をかこむ数十人の役人すべてが、気がちがったよう

にさわぎまわっていました。ひっそりと、しずかにうずくまっていたのは、囚われの部連島の人々だけだったのです。

その日は、ちょうど朝から、いよいよこれら囚人をひき出して、あの忌わしい踏絵をさせたり、訊問したりする手はずだったということです。

まえの晩は、暗い、寒い、氷獄のような夜でした。竹矢来をかこむ数十人の役人も、どうどうたる海の音に、まるであの世にきたようにもの哀しい気分にひきいれられたと申します。……真夜中ごろ、それまで音もなかった竹矢来のなかの囚人たちが、しずかに唄い出しました。

「参ろうや、参ろうや
天国の寺に、参ろうや
天国の寺とは申すれど
広い寺とは申すれど……」

それは、はじめ地からわき出るようにひくく、かなしく、制止する機会もないうちに、暗い潮と織りなされる大合唱となって、はてはまるで酒宴でもひらいているようにたからかなものになりました。やがて、やっと役人たちが夢からさめたように叱りつけると、しばらくしんとしていて、また細ぼそと唄声がわきあがってきたといいます。

「ベレンの国の姫君
いまはどこにおらすか

御讃め尊めたまえ……」

そして、この声もやがて陶酔したように歓喜の讃歌となりました。

朝がきました。三百何十人かの囚人たちは昨夜の狂態は夢かと思われるほどひっそりと、鴉の群のようにうずくまってうなだれておりました。役人たちが第一番めによび出そうとしたのは、この島の邪宗門の妖姫とも目されるあの女でした。

ところが……彼女の姿はどこにもなかったのです。

昨夜はたしかにいた。監視のきびしい矢来の外へにげ出せるはずもなく、なかにかくれる場所はありません。石だらけの大地も凍って、またそれを掘る器具などもちこんでいようはずはないのです。それにもかかわらず、『ベレンの姫君』は消滅してしまった。仰天してたずねると、あの白髪のパオロ徳蔵が、かなしげに答えたそうです。

「お影様は、昨晩、天に昇られましたじゃ」

私が島についたのは、その騒ぎのまっ最中でした。私はその騒ぎの意味がわからず、ただ、ほかの囚人たちとはポツンとひとりはなれて、竹矢来にもたれかかっている敬三郎の姿をみとめて、かけよりました。

が、彼は私の顔をみてもなんの感動もせず、あきらかにもう気のちがった眼で、ときどき口のはたのよごれをぬぐいながら、ひとりつぶやいていました。

「御主、群衆に命じて地に坐せしめ……七つのパンと魚とをとり、謝してこれを裂き弟子たち

にあたえたまえば……弟子たちこれを群衆にあとう。すべての人食らいて飽き、裂きたるあまりをひろいしに、七つの籠にみちたり……」

「敬三郎！」

「とりて食らえ、これはわがからだなり。……なんじらみなこの盃よりのめ、これは契約のわが血なり。……多くの人のために罪のゆるしを得させんとてながすところのものなり。……」

あの「お影さま」がいなくなった、ということがわかったのはそのときです。私もびっくりして、役人たちといっしょにさがしまわりました。そして、ふと気がついてひきかえしてくると、敬三郎は竹矢来に自らくびを吊って死んでしまっていたのです！　まるであのユダの死のように。——

ああ、いったい敬三郎はどうして気が狂い、どうして死んだのでしょうか。私には一切わかりません。それよりあの部漣のマリアはどこに消えてしまったのでしょうか。私には、一切わかりません。

それを知っているのは、あの三百何十人かの『はなれ切支丹』たちですが、しかし彼らはたとえ地獄におちても申しますまい。あの氷の飛沫をあげる碧い冬の海のこちら側に、じっとうずくまっていた群像のしずかに強い印象から、わたしにはそう思われるのです。『ベレンの姫君』はどこにいったか、私にはわからない。……いいえ、私の頭には、あの気味わるい老パオロの声がきこえて参ります。姫君昇天の三つの条件と、それから、『血肉をみなの血肉にとか

し……』云々のえたいのしれぬことばが——。また私の頭には、それよりもっと化物じみた黒い雲のようなあるかんがえが浮かんできそうです。あの日は、ちょうど切支丹暦で、謝肉……これ以上、私にはかけません。おお、神よ、この私の頭をうちくだきたまえ。……教区長様、私にはもう書けません。……

私は、いま、すがりつくように、お贈りしていただいた聖なる銀の匣をひらいたところです。ザヴィエルさまの御遺物に礼拝したところです。ザヴィエルさまの御遺物のうち、御右腕だけはローマの耶蘇会本部で拝して、ふかい感動にうたれたものでした。そして、——いままでほかの御遺物の一片をいただいた宣教師たちが、この百年どれほどこの奇蹟の力によって新しい熱情をふるいおこし、奮闘してきたことでありましょうか。

おお、私は意気屈してはなりません。恐れてはなりません。教区長様からいただいたこの聖なる腸の一片は、いま私に新たなる力をふきこんでくれました。私はこの不吉な想い出、恐ろしい迫害にめげず、いよいよこの長崎で迷える子羊たちの伝道につとめましょう。

日本の宣教師ベルナルド・プティジャン

【註】　一五五二年、聖フランシスコ・ザヴィエルは広東の近くの上川島で歿し、その地で埋葬されたが、のちに掘り返してみると、遺骸はそのまま少しも腐敗せず、芳香ふくいくとしてあたりに薫じていたといわれる。この遺骸はゴアの聖堂に移され、いまも銀棺に納められて、世

界からの巡礼者に拝観をゆるすということであるが、熱狂的な帰依者たちが、その法衣、帽子、杯などの遺物を求めるのが高じて、ついにその右腕を切断してローマの耶蘇会本部に送り、腕形をした銀の匣に納めて礼拝するようになった。残った遺骸はその後さらに胃や腸までもとり出され、コマ切れにして、のちのちまでも篤信者たちのあいだに聖物として伝えられるに至った。ザヴィエル上人の「御遺物」とはこのことである。

スピロヘータ氏来朝記

一　忘るるなかれ八月十五日

聖ヨハネの祝日、マラッカを出帆してから五十一日目、例によって艫に安置した貨狄様の木像の前で骰子を投げていた老船長アヴァンが、突然恐怖のひとみを天にあげて、「ああ、牛の目だ！」と叫んでから間もなく、雲は葡萄いろに、海は泡だち、万象はたとえようもない悲愁のひかりに染まって、それから二日二晩というものそのシナ戎克は蒼い風と濤の炎のなかを木の葉みたいにもまれぬいた。

その二日二晩、嵐に白髪を吹きちらし、無理に出帆を命じたポルトガルの宣教師どもを呪って、悪鬼のように狂いのののしっていた老船長は、制止しようとしたパウロという修道士をしたたか殴りつけ、ふり飛ばしたが、そのはずみに自分もなかば水に満ちた船底の水槽のなかに、まっさかさまに顚落してしまった。

嵐が去って、蒼々たる中天に半輪の月が見えはじめて来たけれど、水槽から救いあげたアヴァンの身体は冷たく、眼は梟のように虚ろにひらいたままであった。

「可哀そうな異教徒……」

と、神父コスメ・デ・トルレスが、横たわった老シナ人の骸にかなしげな視線を落としていった。

「この男の霊魂は地獄へいっただろう」

アヴァンの礼拝していた、あの艫の偶像こそ、宣教師達の心を最もいたましめたものであった。永遠、無限、全智全能にして唯一なる神をいかに熱心に教えても、「海賊」という綽名を持つこの海の老人の頭に頑として君臨する貨狄様のお告げが、毎朝、毎夕、潮と風との吉凶を決定し、さなきだに短く限られた航海季節を、どんなにムダに浪費させたことであろう。

すると、このとき、修道士パウロが進み出て、冷たいアヴァンの額に十字架を置いて、一心に祈りはじめた。彼の頬には、さっき打たれたときのまま血潮がながれていた。

二、三時間前まで吹きどよもしていた風とは、同じものとは思われないような穏やかな南西の季節風が、破れた帆をやさしくふくらませ、水泡は無数の宝石のように軽やかなひびきをたてて、戎克のうしろへすべっていった。

「――これは何だ？」

突然死人がいった。彼の蒼醒めた手は額にあてられていた。

「聖・十字架」

修道士パウロが微笑んで答えた。

不安げに覗きこんでいたシナ人の船員達の間に、溜息と低い唸り声がどよめいた。一人が老船長の手をおそるおそる握って、「あっ、生きている」と叫んだ。

「おれは死んでいたのか？」

「そうなんで、お頭、それをこの坊さんが拝んで助けてくれたんでさ」

「アヴァン、お前を甦らせたのは罪人のわたしではない。あそこにいられる天帝です」

とパウロは、つつしみ深い眼を天に投げて十字を切った。

老船長「海賊」は、胸を大きく波うたせながら、暫くキョトンとして、光の薄れて漂う月を眺めていたが、やがていった。

「それなら、おれも天帝様とやらを信じてもいい」

「むろん」

とパウロは感激に満ちた力強い声でうなずいて、

「天帝さまは、お前を異教徒として死なせない御意からこの奇蹟をあらわしなされたのです」

「有難いことだ！」

老船長はむくりとはね起きると、十字架を三たび押し戴き、それからもぞもぞと服をさぐって骰子をとり出した。

「若い坊さん、お礼にわしは、お前さんの運命を占うて進ぜるよ」

修道士が啞然として口をあけたとき、背後からその肩を強く打つ人があった。

「パウロ、海を見なさい、海の向こうを――」

帆檣の下に立って、北東の水平線を指さしている人の姿をふり仰いで、修道士パウロは恭しくお辞儀した。

長身に帯も外衣もない着古した長衣をまとい、それは印度の貧僧の服装ながら、美しい髯のなかに微笑をたたえ、白皙の額の下で澄みきった眼は青い火のようにかがやいていた。

「陸地が見える――あれは、お前の国ではないか！」

「おお、開聞岳！」

黎明のひかりに浮く秀麗な円錐形の山のすがたを望んで、パウロは躍りあがった。その叫びは、完全な日本語であった。

まことにその顔色、瞳の色、この修道士は印度の都ゴアの聖パウロ学院でパウロ弥次郎と呼ばれ、その聡明と信仰、学林随一と知られた日本人であった。

彼の鋼鉄のような頬に涙がつたい、わななきつつもきれいなポルトガル語で、

「遂に――ついにやって参りました！　あれはわたくしの故郷、サツマの南端、カイモン岳でございます。ザヴィエル様」

「ああ日本！　未開拓の豊饒なる葡萄園……」

フランシスコ・デ・ザヴィエルは叫んだ。青い眼にかがやきながら涙があふれて、

「パウロ、お前は泣いている。嬉しいであろう、お前は三年目に父母の国に還るのじゃからな

……」

「神父さま、わたくしの唯一なる父母は天にいらせられます。わたくしの涙は、いまだ異端の闇をさまようこの国の霊魂を救うべき聖なる任務を与えて下されましたその御意に対する感激の涙なのでございます」

その国の薄明のとばりは、山々の彼方から昇りつつある日輪のひかりの潮に、次第に押しながされようとしていた。

「時あたかもよし、きょうは聖母被昇天の日でございます」

と、神父のうしろにひざまずいていた少年のようなイスパニア人、修道士ジョアン・フェルナンデスが微笑んでいった。

「おお、聖母被昇天の日！」

フランシスコ・デ・ザヴィエルは眼を荘厳な朝暾にそそぎながら叫んだ。

「不思議な運命じゃ！　耶蘇会創立の日がきょうであろうとは——わたし達七人の同志が、巴里モンマルトルの殉教者の丘に集まって、清貧、童貞、エルサレムへの巡礼を、聖父イグナチオ・ロヨラ様に厳かに誓ったのは、ちょうど十五年前のきょう、聖母被昇天の祝日であったのじゃ！」

「そして貴方様はエルサレムへゆかれず、印度へ——それから、とうとうこうして日本へおいでになりました。宏大無辺の天帝の御意でございます」

とフェルナンデスが神父の裾に接吻していった。燦爛たるひかりに海鳥の群が乱舞しはじめた。パウロ弥次郎は十字架を額におしあてて叫んだ。

「天帝のお助けにより、必ずや日本のすべての人々はわが教えに帰依するでございましょう。——なかでも、真っ先にただ一人、その前にひれ伏してわたくしが救わなければならぬいたましい女が待っているはずです。神よ！　彼女に恩寵を垂れたまえ——」

「有難いことだ！」

と、そのとき艫の方から老船長「海賊」の凄じい笑い声が、蒼い潮風に乗って来た。

「おれを助けてくれた若い坊さん！　貨狄様のお告げにはな、お前さんは近いうち、おれ達の仲間になってくれるとよ！　有難いことだ！」

聖フランシスコ・デ・ザヴィエル、神父トルレス、修道士フェルナンデスとパウロ弥次郎、パウロの従僕たる日本人ジョアンとアントニオ、シナ人マノエル、印度人アマドールの一行八人、霊魂救済の使徒たちをのせたシナ戎克は、今満帆に暁のひかりと風を孕んで、鹿児島湾の滄溟にすべりこもうとしていた。

時に、御出世以来一五四九年八月十五日。

二　聖なる信仰のパウロ

東より博士達をみちびいた星のごとく、西の方より基督の栄光につつまれた聖者ザヴィエル

を導いた修道士パウロ弥次郎とは何者か。

その履歴は、彼自身に――その前年、彼が羅馬（ローマ）の耶蘇会創立者イグナチオ・ロヨラに送った書翰（しょかん）に語らしめた方がよいと思われる。

「日本のパウロより貴方様に、イエズス・基督の平和と恩寵と愛とをお送り致します。

母の胎内からわたくしを、この世へお離しになった御主様は、遠い異郷の迷える羊をお忘れなく、闇黒より光明へ、わたくし達の霊魂の救主なるイエズス・基督の信仰へみちびき入れて下されました。この大なる御恩寵を、わたくしは深く感じております。御主様がわたくしに与えて下されたこの御恩恵を語るのは、ただただ実に御主様をおたたえせんがためなのでございます。

わたくしは、異教徒の国、日本のカゴシマでシナとの貿易を営んでいた、放蕩（ほうとう）無頼の一商人でございました。あらゆる悪徳をかさねたあげく、仲間のある貿易商の妹の美しい少女に恋慕し、酒乱のはてにこれを瀆（けが）し、その上憤激したその兄を斬り殺してしまったのでございます。裁きの手からまぬがれるため、当時ヤマガワという港に来ていたポルトガルの一船に逃げこみ、船長のジョルジ・アルヴァレス氏のはからいで、わたくしはそのまま海を越えてマラッカの町へ渡りました。一五四六年秋のことでございます。

過去から呼びかける地獄の声、それに耳をふさいでわたくしがマラッカで送った呪わしい罪

の日々は、申し上げるのもはばかられます。その果てに、ソドム・ゴモラにも劣らぬシナ人街のある魔窟で、わたくしは恥ずべき恐ろしい病気に冒されてしまいました。けがれた局部はもとより顔にまで、赤銅色の環がふくれあがって、眩暈（めまい）、はげしい頭痛や関節痛――そのため、狂乱したようなわたくしの上に、なおも神の鞭（むち）は下りました。瘧疾（おこり）にかかったのでございます。二日目毎に襲ってくる恐ろしい高熱。のた打ち回りながら、ある日巷（ちまた）に這（は）い出して昏倒（こんとう）していたわたくしに、突如として天帝のおん憐れみがそそがれたのでございます。

それは昨年の十一月のこと、たまたま聖母教会の結婚式においそぎになるパードレ・メストレ・フランシスコが、路上に倒れていたわたくしの傍にお立ちになったのでございます。

主よ、御名をあがめさせたまえ――たちまち奇蹟があらわれました。パードレ・メストレ・フランシスコの愛に満ちた御祈りによってわたくしは甦（よみがえ）りました。まったく、熱はもとより、あの恥ずべき恐ろしい身体の斑点も痛みも、みるみる消えていったのでございます。同時にわたくしの魂にも、神の矢が射通りました。

すべては天帝のかたじけない御意によるものでございました。パードレ・メストレ・フランシスコのおはからいで、本年三月、わたくしは当市ゴアの聖パウロの学院に入学し、五月十日聖霊降臨日、日本より従えた下僕とともに、大司教アルブケルケ様から洗礼の聖水をいただき、霊名をパウロとさずかりました。

わたくしの魂の安息は何に例えようもございません。わたくしは、このように容易に御主様

のおんことを心中に印し、このような短期間にポルトガルの言葉に通じ、聖マテウスの福音書のごとき高尚なる御教えを受け入れて、これを記憶にとどめる才能と意志をわたくしに授けて下された天帝の御恩恵を決して忘却致すまいと、一しんに祈っております。

願わくば、われらの主の愛のため、尊師の御祈禱によって、主がわたくしに与えたまいしところを空しく受けず、その讃美と光栄となるに至らんことを。

パードレ・メストレ・フランシスコは、日本に赴く準備に着手なされました。

万物の御創造主であらせられる天帝と、われらを贖わんがため十字架におのぼりなされたイエズス・基督の御教えが、日本に弘布され、大いなる収穫を納めるよう、わたくしたちは心より切望致しておるのでございます。

何とぞ御主様が、パードレ・メストレ・フランシスコをお助けになり、またその愛のため、百たび生命をささげる必要があるならば、わたくしにこれをなす力を与えたまうよう、貴方様も絶えず天帝にお祈りなされて下されまし。

御出世以来一五四八年十一月廿九日

ゴアの聖パウロ学院より

下僕・日本人　サンタ・フエのパウロ」

サンタ・フエのパウロとは『聖なる信仰のパウロ』の意味である。

天使堕ちて昇らば、堕ちざりしよりさらに栄あり――聖フランシスコ・デ・ザヴィエルもまた彼を『徳高き誠実の人』と呼び、この尊敬すべく信頼すべき一日本人の背後に横たわる未知の島国に無限の希望を投げかけた。

鹿児島上陸以来、最初の数ヵ月の間、その希望は裏切られぬかに見えた。

島津貴久を国分城に訪ねたザヴィエルは、この薩摩王から予想以上の歓待と鷹揚な布教許可を受けて歓喜した。神父が、日本の最高にして正統の君と聞いている天皇に謁見するため速かに都に上りたいという希望を述べたとき、島津はにこやかにうなずいていった。

「承った。左様ならば私が船を一艘仕立てて進ぜましょう。ただし、航海に都合のよい風の吹く季節まで、しばらくお待ちなさい」

ある夜のこと、公教要理の日本文編纂にいそしんでいたパウロ弥次郎の眼が深いかなしみに翳っているのを見て、ザヴィエルはそのわけをたずねた。

「神父様、あの娘がいないのでございます。店もつぶれて、その行方もわかりません。それも当然でございましょう。一家の柱ともいうべき人を、わたくしがこの手にかけたのでございますから――」

彼の身体はおののいた。

「わたくしに身をけがされ、兄を殺されたあの可哀そうな娘は、今、何処にどうしていることでしょう?――若し――若し、すでにこの世にないならば、罪ふかいこのわたくしは、現世に

おいても、来世においても、御慈悲をおねがいすることができないように思うのです」

「祈りなさい。パウロ」

とフランシスコは優しくいった。

「祈れば、天帝はかならず救って下さる。そうして、きっとお前がその哀れな娘に罪を贖う日が来ようよ」

神父の顔を仰いで、パウロは涙をながした。その涙は彼の憂愁を洗い去るかのようであった。

あくる日から、彼は清い同僚のフェルナンデスとともに、熱烈に町の人々に福音の伝道をつづけはじめた。

フェルナンデスがいかに日本語の修得に一生懸命であったかは、後にこのイスパニア人が平戸で死んだとき、臨終の囈語すら日本語でつぶやいたという挿話によってもうかがわれる。

三　迷える羊

ザヴィエルは、伝道の最大の障壁が仏僧であることを看破した。そのため彼は、招かれも呼ばれもしないのに、みずから諸処の寺院を訪ねて仏僧達と問答した。彼がこのように出入するのは、あたかもその家の童児のごとく自由であった。

神父は毎日二度、鹿児島で最も著名な寺院である福昌寺の山門に立って、パウロが翻訳した

公教要理を民衆に読みあげた。

この寺の住職は、忍室という高名な禅僧であった。あるときザヴィエルは、石像の群のごとく坐禅をくんでいる僧侶達を見て、不思議そうに忍室にきいた。

「この修道士たちは、何をしているのですか？」

「左様。ある者は檀家からのあがりを勘定し、ある者はどうしたらもっとよい待遇を受けられようかと思案し、またある者は女や悦楽のことを考えておる。いずれにせよ、鼠のクソほどのねうちのあることを考えている奴は一人もござらぬよ」

と、鶴みたいに痩せた老僧はからからと笑った。

また別のとき、神父は忍室に、青年期とあなたのような老年期といずれがよいと思われるかとたずねた。

「そりゃ、若いにこしたことはござらぬ」

言下に、澄ました顔で忍室は答えた。

「第一、若いときは病気にもかからぬし、それから、何を欲しようと、自由に遂げられますから喃」

「しかし、考えてごらんなさい。大海の真っ只中にある船と、静かな港に近づいた船と、その乗客の心は――」

「いや、あなたのおっしゃろうとすることは、よくわかっている、伴天連殿」

と老いたる禅僧は手を振った。巨人と巨人。〈わが畏るべきは天帝のみ〉という信念に燃え、のちにあらゆる異教の坊主どもを完膚なきまでに弾劾したフランシスコが、このサツマの老僧の澄んだ眼の底に漂っている笑いとかなしみの翳をのぞきこむとき、いつも不思議なななつかしさと畏れを感ぜずにはいられないのであった。

けれどもこの奇妙な問答は、ひとしく俗界を超えたふたりの高僧の住んでいる空気が、どんなに種類の異なったものであるかということを示す証左でもあった。いわんや、高い懐疑もなければ理性もなく、ただ過去一千年、日本の土に張りめぐらし、すでに硬化している権威の根に寄生し、むしゃぶりついているのみの一般仏僧どもが、この新宗教の弘布に胆を冷やし、次第に猛烈な妨害に出はじめたのは当然であった。

すでに渡来以前から、日本の僧侶は肉食せぬと聞いて、みずからもその習慣を断っているザヴィエルに向かって、「伴天連たちは、人肉を食べる」といいふらした。

ザヴィエルは敢然として魂の戦闘を開始した。

「彼らがわれわれをおまえ呼ばわりするならば、われわれも彼らをおまえと呼んでやろう」

と神父はパウロ達にいった。坊主ばかりではない、一般の民衆に対しても——貧しい印度僧の服装で説教することは、この傲慢な国民に関する限り、かえって効果を減ずるのではないか、と神父もようやく気づきはじめていた。

が、さすがに唖然としたのは、最初あれほど感謝した薩摩王の好意が、実に現世的な利害観

念から来ていることを知ったときである。航海の季節を口実に、一行を城下にひきとめておいたのは、実はそれによって珍奇な商品を積んでくるポルトガル船をおびき寄せるため、島津の欲しいのはただ鉄砲だけであった。聖フランシスコは聖書を与えようとした。目算がはずれて、薩摩王の額に次第に皺がきざまれ、権威に臆病な民衆はその顔色をうかがいはじめた。

ようやく露骨になった迫害のなかに、ある夜、眠っていたパウロが、突然大声で「もっと！もっと！」と叫んだ。その翌日、何の夢を見ていたのかと聞いたフェルナンデスに、「私はある男を肩にのせており、ひどく重く、圧しつぶされそうになったとき、御主様のことを考えたので、さらに困苦をさずけたまうように願ったのだ」とパウロは答えた。

「ある男とは——誰？」

「わからない。ただそれは日本人の顔にはちがいなかった……」

「それは日本人全部じゃ」

と神父は微笑んで、パウロの肩をたたいた。

「だが、主の御光栄のためのたたかいは、最初からわたしたちの覚悟していたことではなかったか？　嵐は一層強く吹いてくるだろう——が、この国が種を播くに良き地、神における希望の島であるというわたしの信頼は、深くこそなれ、決して揺ぎはしない、御覧、市来を。あの山の城には主の葡萄園が、すこやかに、かがやかしく実を結んでゆくではないか？」

市来の城は、島津の属将新納伊勢守の住むところで、山を十ばかりの砦にわかち、砦と砦は

すべて鶴嘴でけずった深い掘割をめぐらし、それらに橋がかけわたされて、それを通り過ぎるとき、人はそれが人工をもってなされた業と思われず、あたかも地獄をのぞく心地がするのであった。

城主の伊勢守は、唇の厚い、動物的な容貌を持ち、魁偉な体格ながら、少しばかり愚鈍なのではないかと思われるような人物で、島津家にはばかって彼自身は洗礼を受けなかったが、奥方や家臣が説教を聞いたり洗礼を受けることは許すのみならず、よろこんでいる気配であった。

この家臣の一人が、あるとき、「もし島津の大殿が、余に従うか切支丹たるか、ふたつのいずれかを選べと厳命なされたら、貴殿は如何なさるか」という難問を出され、即座に、「殿よ、殿が私にまことの忠節を欲したまうならば、切支丹たれと御命じ下さい。私はこう御返答つかまつります」といったのは有名な話である。

この家来より、城中の侍女達の帰依はさらに熱烈であった。この山の城の奥ふかく、きよらかな女達に囲まれてすごす信仰の夕は、神父達にとって何というよろこびと愉楽であったろう。いったい、この一画のみに、かくも盛んに聖なる火の燃えあがったのは何ゆえであろうか。他には見られぬその原因のひとつに、ある覆面の保護者のあることを神父達が気づいたのは、よほどたってからのことであった。

鈍い、茫漠たる城主ではなかった。病身で気弱らしい奥方でもなかった。それが伊勢守の愛妾で、「お扇の方」と呼ばれる女性らしいことはつきとめたが、伊勢のただひとりの世子の母として彼女が城の上下にわたって非常な権威を持っているらしいにもかかわらず、いや、それゆえに、宗教的に許されぬ婚姻を最大罪悪の一つとして厳しく非難するザヴィエルの説教をはばかってでもいるのであろうか、ついぞ信仰のまどいに姿をあらわさないのであった。

このいじらしい影の女性のことを、心の曇りのひとつとして残しながら、薩摩王の不誠実なたくらみのため、思わぬ月日を鹿児島で送ったザヴィエル一行が、ついに上洛の決意をかためて、先ず平戸へ旅立ったのは一年後、一五五〇年九月のことである。

パウロ弥次郎のみが残ることになった。彼はその数日前から市来城にきて暮していた。

それは城内に、日本はじまって以来最初の小礼拝堂が建立されつつあったので、旅の途次師の一行が立ち寄るまでに是非竣工して奉献の式をあげたいと思い、工事の督励に来ていたのである。

ある晴れた朝、それは完成した。

裏山の檜林で鳴きしきる、ふるようなひよどりの声のなかで、地にひざまずいたまま、恍惚と喜悦の眼をうるませていたパウロは、ふと背後に、しずかな跫音を聞いて振りかえった。きらびやかに着飾った侍女達に囲まれて、金と朱紫との裲襠をはおった女が一人たたずんで、凝っと彼を眺めていた。

パウロは雷に打たれたようであった。

「――あっ」

愕然として息がとまった。

「お前さまは！」

「扇、と申します。修道士さま」

と女は低い声でいった。燃えたぎるような瞳であった。パウロ弥次郎の顔色は土気色に変わっていた。呻くように、

「お扇――お扇の方とは、お鶴、あなたのことであったのか！」

一瞬の後に、彼は女の足もとにまろび伏していた。

「探していた……ああ、どんなにあなたを探したことか……詫びなければ、あなたのどんな報復の鞭、いや、それが火であろうと剣であろうとこの罪の身体に受けなければ、わたしは地獄に堕ちるよりほかはなかったのだ！　おお御主様、よくぞ、よくぞこのひとにめぐり逢わせて下さいました！」

「祈りなさい、修道士さま。あなたさまの神さまは、お祈りさえすれば、かならず救って下さるそうではございませんか？」

冷たい嘲けりをふくんだ声に、パウロは面をあげた。

お扇の方は笑った――艶然と、牡丹のように。

おお、これが三年前自分の乱酔した腕のなかに、身悶えして泣きさけんだ哀れな小娘と同一人であろうか。牝獅子のように傲然とかがやく雙眼は頽廃の隈にふちどられ、頬は深い苦悩に

わななきながら、真紅の唇は地獄の虹を吸いとったように濡れて笑っていた。

「むろん、わたしは殺されても覚悟の前です」

パウロはふたたびひれ伏して、声をしぼった。

「けれど、あなたはどうぞ天帝さまを信じて下さい！」

「御説教は、そのうちこの御堂でお聞かせ下さいまし。これからはあたくしも参らせていただきます。あたくしのお建て申しあげた聖堂でございますから――まあ、ほんとに美しいこと」

彼女は笑いながら、礼拝堂を見回して、茫然たるパウロをあとに、侍女達を従えてしずかに立ち去っていった。

神父の一行はその日の午後市来城に立ち寄った。

その小さいながら見事な聖堂に、彼らは感動して涙をながした。ザヴィエルはみずから、マリア像や、十字架や、ロザリオ、聖水入の磁器の容器、絹製の祭壇用天蓋などを贈ってこれを祝福した。

「パウロ、あとをしかと頼みましたぞ。わたし達の播いて、はじめてこの国に芽生えたささやかな信仰の花、聖なる羊の群、天帝の御助けによって、お前はこれを一心に護り育ててゆくのじゃ」

「神父さま。わたくしに出来ましょうか？――わたくしはあなたさまにお別れするのが、恐ろしくてなりませぬ」

パウロの顔は蒼醒めて、ひしと師の手にすがりつき、容易に離れようともしないのであった。けれども、それは如何なる心理であったか自分でもわからなかったが、彼はあの娘をこの城主の寵姫として発見したことを、師に告白しなかった。

フランシスコ・デ・ザヴィエルは、美しく縮れた黒い髭の一部をさくりとみずから剪りとって、パウロに与えた。

「わが子よ、これをわたしだと思うがよい。わたしはいつまでもお前と一緒にいると思って、勇ましくたたかいなさい。よいか――」

「わたくしは神父さまを信じます」

パウロは叫ぶようにいった。その頬に血がのぼった。

「では、神父さま、わたくしは、いつ、何処でまたあなたさまにお逢い出来ましょうか？」

「ヨセファットの谷で」

と、聖フランシスコは愛弟子の瞳を慈愛に満ちた深いまなざしで覗きこみながらいった。

それは、「最後の審判の日に」という意味であった。何かこの世のものならぬ力に打たれて、このときパウロ弥次郎の身体が、魂の底からふるえあがったようであった。

四　アーメン！　アーメン！

それは流星の美であった。

その威厳は、城主の愛妾という地位からくるものではなく、彼女の美そのものから来た。お扇の方は、新納伊勢の心をしっかりとらえていたが、それでいて傾国のそしりをうけるどころか、武骨な家臣はもとより、病がちな奥方から、畏怖を超えた讃美にちかい眼を投げられているのは、ただ世子の生母という理由ばかりでなく、本来極めてすぐれた素質を持つひとりの女が、その肉体のみならず精神までも燃焼するその迫力が、人々を圧倒しているのであった。

清浄の身をけがされ、兄を殺されて絶望し、海へ入水しようとした憐れな少女をたまたま救いあげたのは、今は新納家でも最も熱烈な切支丹である好人物の老臣であったが、このどん底から市来城の侍女へ、さらに主君の寵姫へと昇った彼女の運命を、「転落」といっても信ずる人はあるまいが、聖なる信仰のパウロはそれを看破した。

彼女が愚鈍な城主にささげる妖艶な媚の眼の底には、まるで熊か犬でも見るような軽蔑のひかりがやどっていた。環境の上昇とは無関係に、肉体はいよいよ凄絶の光芒をひきつつ、精神はあの日から堕ちつづけていた。地獄へ――あらゆるものに対する不信へ。

（あの日から――、おお、清らかな星をつき落としたのは誰だ？）

パウロ弥次郎はおののいた。

きよい洗礼に洗われた彼の眼は、誰も知らぬ彼女の「転落」を鋭敏に見抜いたが、またそれゆえに今や彼女の魂の底にうごめく怪物が何をたくらんでいるのか、はっきりわからないのであった。かつてあれだけの大罪悪を犯し、今は一国の迫害を貧しい僧衣に浴びている男を、寵

姫お扇の方は、なんの危害も加えぬどころか、彼のために美しい礼拝堂をたて、アヴェ・マリアの鐘の音に耳を澄まし、謎のごとき微笑をたたえつつ、安息日ごとに説教を聴聞にくるのであった。

「神父さま――あの女は、ほんとうに天帝を求めているのでございましょうか？」

ある秋の夜、美しく蠟燭のともった礼拝堂のなかで、パウロ弥次郎は、白い小さな絹の袋を押しいただいてささやいた。

苦悶に満ちた彼の眼に、お扇の方のあでやかな恐ろしい笑顔が、毒の花の幻影のようにしみついて消えなかった。その夕、彼が侍女達に世界創造の話をし、ルシフェルがその傲慢のゆえに地獄に投げ入れられた次第を説いたとき、背後でうっすらと微笑んだお扇の方の面輪である。

ザヴィエルがこの地をはなれた日、はじめて覆面をぬいで姿をあらわしたこの愛妾は、それ以来安息日ごとに礼拝堂を訪れた。恭しくひざまずくその姿は、最初、あまりに厳格にして偉大な神父の鞭をおそれて逃げていた小羊が、おずおずと近づいて来たようないじらしさを感じさせたが、説教の途中、ときどき浮かべているあの不信と蔑みの微笑は、今や神父去って呪縛をとかれた美しい悪魔が、悠然とその翼をひろげはじめたようにも思われるのであった。

「だが――なぜ、なぜ、なぜあの女はこの聖堂を――」

お扇の方の笑顔は、パウロの胸の底にえたいの知れぬ戦慄と動揺をおこすのであった。突然、彼は床に倒れて声をしぼって呻いた。

「ああ、憎んでいるなら、どうぞ石で打ってくれ！　復讐したいなら、遠慮なくわしを殺してくれ！　火あぶりでも、水責めでも――それが当然だ。わしは恨まぬ。そうしてくれたら、わしはお前に感謝するのだ！」

彼は灯にかがやく十字架をふり仰いだ。すると、急に、どういうわけか眼がくらむような恐怖に襲われて礼拝堂を走り出た。

石段を駈け下りようとして彼は転がった。無意識に持っていた白い絹の袋が、手から投げ出された。妖しい霧にけむったようなパウロの瞳に、それは星みたいにきらめいて、ぴしりと灼きつけられた。

「ああ、神父様！」

パウロは這い寄って、その袋を額に押しあてた。

その袋に入っているのは、フランシスコのこしていったあの髯であった。

「神父様、お護り下さいまし、この弱い弟子を……それからあの女も、どうぞ救って下さいまし！」

パウロは涙をながしながら、狂ったようにその袋に接吻しつづけた。耳の底には、あの優しい厳かな師の声音が鳴りひびいていた。

「――わが子よ、これをわたしだと思うがよい。わたしはいつまでもお前と一緒にいると思って、勇ましくたたかいなさい。よいか……」

この一握の髯に、パウロは毎日師から託された小羊たち、鹿児島の信徒達の動静、布教の状況を報告してきたのであった。これこそは神父そのひと、いや、今の彼にとっては天帝そのものにひとしい権威に満ちた聖物であった。

パウロは眼をあげて、静かにかがやく星くずに満ちた秋の穹窿を仰いだ。山は寂寞と眠っている。心の渇きを癒すような、完全な、力強い感動が彼の胸につきあげてきた。彼は指を胸の前にくみ合わせて、低く叫んだ。

「神父様……わたくしは救います。御主様の御力によって、かならずあの女を！」

数日とたたないうちに信徒達は、修道士パウロの顔つきと物腰が、それまでよりさらに清冷に、熱烈に、一種の凄味さえ帯びて来たことを感じた。

のみならず彼は、イエズスが持ち、フランシスコが持っていたという、あの奇蹟を行う神秘な力すら獲たようであった。

中風の老女を、癲癇の小児を、臓躁の女を、鬱症の若者を、そのほか狐憑きや犬憑きの人々を見舞い、その額にあの神父の髯をおさめた袋を置いて祈るパウロの姿は、彼自身が何かに憑かれているようであったが、祈禱が終ったとき、哀れな病人が恐ろしい幻覚や悲惨な苦しみからケロリと醒めはてたように平静になる奇蹟を見ては、天帝を信ずる者はいうまでもなく、信じぬ者もわれしらずフランシスコの名を讃える叫びをあげずにはいられないのであった。

一五五〇年の秋は、いつしか冬に移っていた。

この年は日本で例年にない大雪がふった年で、ここ薩摩もめずらしく師走のなかば、霏々とした白雪に襲われた。聖なる信仰のパウロにとって、いや日本にとって永遠に忘れ得ぬ運命劇の幕が、一挙にひらかれたのは、実にその雪の夜のことであった。

二、三日前から熱っぽい頬の色をして、ウツラウツラしていた新納伊勢の世子笛丸が、その日の夜明頃、急に闇から起きあがって、「こわい、こわい――」と叫び出したのである。年があければ四つになる、病がちな神経質な子供だが、こんなことは今までになかった。

「あれ、そこに白い髪した婆が――」

パウロはすぐにやって来た。彼はこの城主の茫漠たる瞳と、病む児の母お扇の方の妖艶な瞳に、未だかつて見たことのない動乱と苦悩の色を認めて、時到れりとふるい起った。時到れり、父よ、子が汝の栄光をあらわさんため、汝の子の栄光をあらわしたまえ。……

信ずれば山もまた動くという信念の炎にパウロの両眼は燃えかがやき、ひきつけていた小児は魅入られたように手足をちぢめて修道士の清い恐ろしい眼を凝視した。

パウロは小児の額に、聖なる髯の袋を置いて十字を切った。――

彼の頭の奥を、フランシスコの神々しい声がながれていった――父われに在して御業をおこないたまうなり。わがいうことを信ぜよ、我は父におり、父は我にいたまうなり。もし信ぜずば、わが業によりて信ぜよ。誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん……

「おお、わしも洗礼を受けたい！」

突然、城主が、感動に躍りあがるような叫びをあげた。

パウロは眼をひらいて、笛丸がすやすやとおだやかに眠っている姿を見下ろした。赤みのさした小さい頬には、花のような微笑が浮かんでいた。

お扇の方は畳にひれ伏したまま、失神したように動かなかった。

パウロは声もなく微笑んで、一礼して、しずかに出ていった。

五　天とどろきて去る

繰返していう、聖なる信仰のパウロと日本にとって、永遠に忘れ得ぬ運命劇の幕の切り裂かれたのは、その霏々としてふりつづける雪の夜のことであった。

その夜、パウロが祈りをささげている礼拝堂の扉をほとほととたたく者があった。

パウロが扉をひらくと、彼の考えていたとおり、入ってきたのはお扇の方であった。が、侍女もつれず、ただひとりである。

「修道士さま」

と彼女は低い、ふるえる声でいった。

「あたくしは、懺悔とやらに参りました」

彼女は祭壇の前にひざまずいて、しばらく凝っとあの白い絹の袋に眼をそそいでいた。

「ああ！　あたくしは何という罪ふかい女でしょう……」

その悄然たる後姿には、傲慢な寵姫の誇りがかき消えて、いじらしい四年前の小娘のわななきが戻っているようであった。

微笑んで見つめていたパウロは、身をふるわせて首を垂れた。

「いえ、罪ふかいのは、このわたしです」

「あたくしは、修道士さま――今こそ申しあげましょう、あなたに恐ろしい復讐をしようと、そのことばかり考えてきたのです」

パウロは眼をあげた。見えたのは、うなだれたお扇の方の揺れる黒髪ばかりであった。

「やっぱり――そうでしたか！　そうです。それが、当然です。どうぞ、今からでも遅くはありません。わたしはあなたにどのような――例え殺されても仕方がないと思っていたのです。ただ、ただ……天帝を信じるよろこび、この例えようもないよろこびだけは、あなたにも是非おわけしたい！」

「きょう、笛丸さまを助けていただいたあの御力は、天帝さまを信じさえすればあらわれるものでございますか？」

「あの御業は天帝さまのものです。それから、神父さまの御力です」

パウロは進み寄って、白絹の袋を恭しく押しいただいた。感動と涙があふれるようであった。

「それが、フランシスコさまの御髯なのでございますね？」

お扇の方は、はじめて顔をしずかにあげた。
「どうぞ、あたくしにも押しいただかせて下さいまし」
彼女はおそるおそる絹の袋を受け取ると、落着いた動作で袋の口を釈いて、白い掌になかの美しく縮れた黒い毛髪をさらりとのせた。
「修道士さま、たしかにお覚えがございますか？」
「忘れは致しませぬ」
とパウロはやや怪訝の感に眼をみひらきながらいった。
「この秋、都へ旅立たれる神父様がこのお城にお立ち寄りになったとき――」
「あたくしは懺悔致します。そのとき、あなたに下されたお髯は、その夜のうちにあたくしが捨ててしまいました！」
お扇の方の顔にうっすらと浮かびあがった微笑を愕然と見つめて、パウロは白痴のようになっていた。
「――今、何とおっしゃった？」
「これはザヴィエルさまのお髯ではないと申し上げました」
ささささ、と扇に雪が鳴った。灯がゆらいだ！
「けれど、あなたには、たしかにお覚えがございましょう――それと入れ替えたこの毛は、この毛は、この毛は――」

お扇の方はすっくと立ちあがっていた。突然凄じい笑いが、紅を塗った唇から溢れ、鐘のように礼拝堂一ぱいに鳴りわたった。
「おほほほ、おほほほほ！　おほほほほほ！」
「――あっ」
とパウロは急に炎に吹かれた蛙のように飛び退っていた。
「けっ、汚らわしい――お前さまは！」
「汚らわしい？　おほほ弥次郎さま、おお、ほんとに汚らわしい！　けれど、この汚らわしいものが、四年前、お前さまにあたくしの兄さまを斬り殺させるもととなり、また数々のあの奇蹟を生んだのではございませんか――」
「ひどい、ひどい！　何というむごい復讐だ！　天帝を、天帝を――」
発狂したようにパウロは頭をかきむしった。
「おお、いっそひとおもいにわしの眼をえぐり、この腹を裂いてくれた方が――」
「そう考えておいで遊ばす聖者さまに、火が、水が、剣がなんの用をなしましょうか！　地獄に堕ちた女が探すただひとつの復讐の道――御覧なされませ、弥次郎さま！」
五彩の紅が眼前に舞った。裲襠を脱いだのだ。面を覆ってよろめいたパウロ弥次郎の背に祭壇がぶつかり、聖像や燭台や聖器ががらがらと崩れ落ちた。同時にそれはパウロの頭のなかであらゆるものが轟然と砕け散る凄じい響でもあった。

「おほほほ！　わたくしは信じませぬ！　例え笛丸さまの御命は救われたとて、それはザヴィエルさまの御髯の御力ではございませぬもの！　おほほほほ！　わたくしは何も信じませぬ！」

四辺の壁がグルグル回り、灯は業火のごとく燃えあがり、鳴りわたる地獄の哄笑、そして、見よ、見よ、見よ、脱ぎ捨てた絢爛たる色彩を踏んまえて、くねり、挑みかかる雪白の美女の裸形！

星は地に堕ちて天の万象を灼き溶かした。四年前と寸分変わらず、獣のように弥次郎は十字架を足下にへし折って、その妖艶な肉塊に飛びかかっていた。

「悪魔、悪魔、悪魔……」

と兇暴な唸りをあげながら。……

＊

二十日ばかりたったある日、蒼々と晴れあがった薩摩の空の下を、雪どけの泥にまみれ、こけつまろびつ、弥次郎は走っていた。野こえ、山こえ山川の港へ——

荒淫と恐怖に濁った彼の眼には、赤い花が毒々しく閃めいたり、消えたりした。彼は見たのだ。お扇の方に、かつてマラッカでおのれの局部にあらわれたものと同じ症状を。——

神父の奇蹟は、彼の黴毒をまったく癒してはいなかったのだ。——だが、弥次郎の頭には今や神父の影の片鱗だになかった。彼の頭のなかで暴風のように乱舞しているのは、マラッカで

見たその病のなれの果て、あの恐ろしい悲惨な狂人群であった。——

同じ頃、聖フランシスコ・デ・ザヴィエルはフェルナンデスらを伴って、山口から都へ、膝を没する雪を血で染めながら急いでいた。そのめざす都は戦乱に焼け、天子はすでに幻影的存在となり、将軍も今や逃げ去ったとも知らず、いわんや、後に日本の覇者となるべき織田信長が、いまだ一介の餓鬼大将として、馬上、不敵な面魂に柿をがぶりくいに喰いながら清洲の町をねり歩いているなどとは、もとより知らず。——

聖なる一行は、喘ぎながら讃美歌をうたいつつ一心に進んだが、雪と寒さと石を投げる悪童たちは、その歩みを遅々としてはかどらせなかった。

その牛歩の使徒達を追って、スピロヘータ・パルリダは、雷光のごとく、潮のごとく駈けひろがっていった。お扇の方から城主へ、その他の愛妾へ、市来の城へ、さらにこの南国から日本全土へ——ああ、げにや未開拓の豊饒なる葡萄園！

聖なる信仰のパウロは何処へいったか。——

「神秘にして測り知られぬ天帝の御摂理により」

とルイス・フロイスはその著『日本史』のなかで感動していう。

「彼は海賊船に乗ってシナに渡り、その地で殺されたということである。おそらく、彼は己の罪について後悔し、良き死をとげたであろう。しかし、それもなお確かなことではなく、これ以外にわれわれは彼の末路に就ては何も知らない……」

邪宗門仏

一

西暦一六一三年の七月に入って間もない或る日の午後、肥前平戸の港に碇泊した一隻の南蛮船から、碧い空も水も交響するような華やかな唄と楽器の音が鳴りわたっていた。

檣頭高くひるがえっているセント・ジョージの旗を見ればわかるように、これは二カ月ばかり前、日本にはじめてやってきたイギリス船、クローヴ号で、その日船を見物にやってきた平戸の貴族たちに、甲比丹のジョン・セーリスが精いっぱいの歓迎ぶりをしめしているのであった。

土耳古毛氈をしきつめて、特別にしつらえた船室では、今しも少年黒奴が、グラビチェンバロ、ハープ、リュートなどのめちゃめちゃな演奏にあわせて滑稽なジャガタラ踊りをおどったところで、

「あはゝゝ、あはゝゝ、見られい長谷川殿……猿が、猿めが……」

テーブルの真正面で、平戸の老王、松浦法印鎮信は椅子からころげ落ちんばかりに哄笑していた。浮かれきった砲手長愛翫の手長猿が、黒ん坊を真似てヒョコヒョコお尻を振り出したのである。

並んで坐っているのは、昨日平戸を訪れてきた長崎奉行の長谷川左兵衛藤広で、その木の実みたいに乾いた鋭い眼に、さすがに笑いが波のように揺れて、

「やんや、やんや」

と、グラスの赤いイスパニア産葡萄酒を口にはこびながら、

「ときに甲比丹……えげれすは切支丹の国ではござるまいな？」

通弁のミグエルを通じて問いかけた。

最近、この東洋の島国で、切支丹に対して不穏の気がただよい、信徒が諸処で迫害されたり殉教したりしているということは伝え聞いているし、特にきょうの二人の主賓たるホーインサマとブギョーサマは、カトリックの宣教師たちから「宗門の敵」といわれていることは、先日平戸の和蘭陀商館長ヘンドリック・ブルウワーから耳にしたので、

「オー！　ちがいます。イギリスは和蘭陀と同じです。ポルトガルやイスパニアのような切支丹ではありません」

両手をひろげてジョン・セーリスは叫んだが、何しろはじめて来た国なので、兎に角東印度会社から、「エドで皇帝の外交顧問となっている筈の同国人ウィリアム・アダムスと相談せよ」と命令されているとおり、彼の到着を待って詳しい国情を聴くまでは、メッタなことは喋れな

い。

手を振って、楽隊にさらに演奏をうながしながら、話題を転じようとして、

「ああ、あの貴婦人！　素晴しくキレイですネ……わたし、あとであの方に金の指輪と薔薇香水をあげましょう。あのトノサマの恋人ですか？」

笑いながら、テーブルの一隅に坐っている娘を指さした。

十数人の松浦家の重臣のなかに、四名ばかりの婦人がまじっていたが、それは最初からずっとセーリスの注意をひいた異様な娘である。

物腰はしとやかで、優雅だが、惜しいかな、肌が黄色い——と先ずセーリスに印象せしめた日本の婦人のなかで、ただひとり、これは！　と息をのむような雪白の美少女だった。白いばかりでなく、透きとおるような頬の色なのだ。が、セーリスが異様に思ったのは彼女の態度である。この部屋に入ってきたとき、その娘は正面の壁を見て、なぜか雷に打たれたようであった。それ以来、酒と歌とに湧きかえる歓楽の潮騒のなかで、ひとり彼女は、小さな冷たい宝石のようにぽつんと考えこんでいる。傍の青年武士が、ときどき優しく笑いかけた。「オチエドノ、オチエドノ」という言葉がしばしば聞えるところを見ると、それは彼女の名前なのであろう。セーリスの眼にも卑屈と見えるほど、その武士は娘の意を迎えるのに汲々としている様子であったが、それにもかかわらず彼女は彼に対して無関心だった。いや、沈んでいた。ときどき何ともいえない苦悶に翳った瞳をあげて、正面の壁を見た。

そこに何があるか、甲比丹セーリスは知っている。大きな額縁に入った一枚の絵だ。けれども、その清麗な娘がなぜその絵にあんな苦しげな眼を投げかけるのか、どうしても彼は了解出来ないのであった。

「恋人？」

と、老王のホーインサマは叫んで、虎のように呵々大笑した。

「あはゝゝ、どうじゃ、午之丞、そうであったら嬉しかろ……四年間も傍に置いて、振って振って振られぬいている、あわれな、愚かな恋人じゃ！」

毒々しい笑い声に、午之丞と呼ばれたその武士は、ぱっと顔をあからめて、苦しそうに首を垂れた。

「うたえ、うたえ、黒ん坊踊れ」

金糸で刺繍した黒絹の帽子をかぶったまま、ホーインサマがのけぞりかえって両腕を振ると、船室は発狂したような器楽と歓笑にあふれとどろき、蜂蜜はこぼれ、白パンと砂糖菓子は床にころがり、棚の象限儀と砂時計がくだけ落ちた。

すると、そのとき海で誰かが大声で叫ぶのが聞えた。

二

それはあたかも、荒れ狂う海をしずめる魔法の呪文のようであった。一瞬に部屋はぴたりと

静かになり、みな一せいに耳を澄ませた。ホーインサマの手から、駝鳥の羽でつくった大きな扇がぱたりと落ちた。

セーリスは眼をパチクリさせたが、これはエドの政府から直接に急使の到着したことを告げる声だったのである。

部下のリチャード・コックスが船窓の真紅の窓掛をめくると、金糸雀（カナリヤ）の鳥籠をとおして港の岸に伝騎の群が馬をしずめながらこちらを眺めているのが見えた。クローヴ号の舷側にも早舟が来ているらしい。

「――何ごとか？」

緊張した顔を見合わせ、たちまち騒然として人々は上甲板に駈け出していった。ブギョーも六十五歳のホーインサマも、イギリスの船員たちも。

つりこまれて、甲比丹セーリスも部屋を出ようとして、ふと振りかえった。

――あの娘がひとり、残っている。

意外なことに、彼女は絨毯（じゅうたん）の上にひれ伏していた。涙をたたえた瞳をあげてあの壁の絵を見つめ、わなわなふるえる唇で喋っている。低い声だが、何の意味とも知らぬセーリスの胸を、なぜかえぐるような調子であった。

「――恩寵に充ち満ちたまうマリアにおん礼をなしたてまつる。たっときおん主は御胎内にまします。天帝のおん母、今もわれらが終りにも、われら悪人のために頼みたまえ……アーメン……」

その最後の祈りの言葉に、セーリスははっとして駈けもどっていった。

「あなた……あの画像が何か御存知か？」

娘は毛むくじゃらの甲比丹の指さす手を見上げて、涙に濡れて、譫語（うわごと）のようにつぶやいた。

「童貞（どんぜ）・サンタ・マリアさま……」

「お千絵どの！」

ばたばたと慌しく走りこんで来たのは、午之丞と呼ばれた先刻の若い武士である。眼が血走って、キラキラとひかっている。いきなり早口で喋り出した。

「お千絵どの……わしと夫婦になって下され。もはや、そなたの生きる道はそれよりほかにないのじゃ！　曾てわしはそなたの命を救った。だが、そなたはまだひそかに十字架を隠して持っている。それを知っているのはわしばかりだ。いや……ああ、あの御隠居も感づいておいでの御様子だ。……だが、わしは、お千絵どのはきっぱり天帝を棄てたといい張っておるのだ。お千絵どの、わしの恋をかなえてくれ。今の今、うんといってくれ――さもなければ、わしはそなたが切支丹であると申し上げるぞ！　唯今、江戸から――」

「乾（いぬい）さま、わたしはいちど天帝におそむきしました」

かなしげに、白鳥のように身ぶるいして彼女はいった。

「けれど、たったいま、天帝のみもとに帰ったのでございます」

何か脅迫しかかっていた乾午之丞は雷にうたれたように立ちすくんだ。驚愕のあまりしばらくは口もきけない様子であった。

「千絵はもう少しのところで地獄へ堕ちるところでございました……いえ、もう堕ちていたのです。四年前――父上も、母上も、兄上も、あなたさまの手でけなげな殉教をとげたとき、わたくしは――曾てエルナンド・デ・サン・ヨゼフ司教さまから洗礼を受け、クララという霊名までをいただきながら、このわたくしは、ひとり情けない臆病風にふかれ、異教徒のあなたさまのおかげで生命をながらえました――おお、苦しい生命、悶えぬいた四年間！　それが……さっきこの部屋に入ってきたとき……わたくしは見たのです……わたくしは見たのです。あの壁のマリアさまを！」

「いけない！　お千絵どの――皆が帰ってくる――」

背後に近づいてくる跫音に、乾午之丞は狼狽して飛びあがった。

「御覧なさいまし、イエズスさまをお抱きになった聖母さまの麗わしいおん微笑みを――わたくしは打ちのめされて、死んだようになって……そうして甦りました。――乾さま、わたくしは今懺悔をしたところなのでございます！」

「お千絵どの――」

午之丞は両腕をねじり合わせた。娘の透きとおるような満面に、炎の花に似た微笑が咲きひろがった。

「火もふれよ！　海も凍れ！　わたくしはもう何も恐れませぬ。わたくしの背にはマリアさまの栄光があります。クララは切支丹娘です！」

「こんご伴天連門徒御禁制也」

うしろで物凄い声がした。長崎奉行長谷川左兵衛と松浦法印を囲む一群が入口に立っていた。なりゆきは知らず、茫然としていた甲比丹セーリスは思わずふるえあがった。

奉行の薄い黒い唇が冷やかに動いた。

「御上意だ」

三

「今後伴天連門徒御禁制也。日本国の内、寸土尺地を措くところなく、速かに之を掃攘せよ。若し違背の輩あれば、忽ちその罪科遁るべからざること」

将軍秀忠の朱印を捧げて、鉄騎は電光のごとく四方に放射せられた。

もとよりこれは、駿府にある大御所家康の命によるものである。それまでも各地の諸侯の意向如何によって、局地的な迫害はくりかえされていたが、長い間貿易と新宗教の利害を彼一流の慎重な秤にかけてはかっていた家康が、ついに公然と全国的なこの断を発したのはこのときのこと。あの有名な切支丹大名ジュスト高山右近がその一族をあげて、雲濤渺々たる呂宋の果てへ逃れ去ったのは、この禁教令の投げた悲壮な波紋のひとつであった。

波紋はもとより平戸にもひろがった。

老王松浦法印鎮信は、時運を見ることに於て宛然小家康であった。

元来彼は切支丹が大嫌いだった。伴天連たちは、彼を「狂人じみた異端者」とささやいていた。ずっと前に、彼は、夫人が天帝を信じ、ドンナ・メンシャと呼ばれて家中の切支丹武士たちから尊敬されているのを知って、離婚や追放の嚇し文句を以て棄教を迫ったことがある。メンシャは悪びれずに夫から去ろうとし、家中の信徒たちは、重臣ドン・ヒェロニモ篭手田兵部をかしらに大挙して長崎に亡命した。法印はびっくりして、迫害の手をゆるめたが、この事件で切支丹に対する憎しみが一層ふかく胸中に余燼となっていぶりつづけていた。

一六〇九年、法印のこの憤懣の爆発による悲劇が、また平戸の属島たる生月の島で起った。さきに長崎へ亡命した篭手田兵部の家老ガスパル・西玄可は妻のウルスラ、長子のヨハネ又市、その妹のクララと生月の山田につつましやかな宗教生活を送っていたが、秋の或る日、突如として山田の奉行乾午之丞の討手を受けた。

縄がかけられようとしたとき、老武士西玄可の顔色が変った。しかし逮捕の理由が切支丹であるがためと聞いて、彼はにっこり笑って両腕をさしのばした。

十一月十四日土曜日の明方、玄可と妻と又市は刑場にひき出されて処刑された。彼らはおん主ゼズスにならって磔を願ったが、許されなかった。ただ奉行の乾午之丞みずから刑刀をとったのが、せめてもの面目であった。

娘のクララのみは生命をゆるされた。彼女を棄教させた旨を乾午之丞は主君の法印公に復命したが、それはクララに対する彼の恋による努力の結果であった。法印はそれを看破していた。

それから、四年——ついに公然と将軍から切支丹弾圧の指令が発布されたわけである。老法印は血ぶるいして起ちあがった。もはや信徒どもの逃げ出す寸地はどこにもない！　長崎には「悪魔の虜」と呼ばれる長谷川左兵衛がいるのだ。

犠牲者第一番はクララであった。

この運命は、もはや乾午之丞とて覆すことは出来なかった。法印みずから聴いたのだ。時もあろうに幕府の禁教令を受けた刹那に——場所もあろうに将軍直轄の長崎奉行の面前で。

「クララは切支丹娘です！」

よしやこの可憐な美少女に、老王が惻隠の念をうごかしたとしても、その情は押しつぶさなければならなかったであろう。関東と大坂との間に風雲急を告げている今、豊臣家と姻戚関係にある松浦家は一層大御所にはばからねばならぬ。ましてあの長崎奉行の妹は、その大御所の側室の一人なのだ。

平戸の町の辻々に高札が立った。

七月二十九日、千里ケ浜に於て切支丹娘を刑殺す。

その日クローヴ号からボートに乗りこみながら甲比丹セーリスは真っ蒼になって、「馬鹿な話だ！」と叫んだ。

それまで彼はなんどこの言葉を吐き出したろう。あの日の船中の異様な劇的情景は、もとよりそのとき彼には何の意味ともはっきりわからなかったが、あとで、右のようないきさつを大体聞き知ってセーリスは驚いた。

彼はこの悲劇の最も重大な原因が、或る誤解から成立していることを知った。それは滑稽をとおり過ぎて悲惨ですらあった。セーリスは部下のコックスをやって、領主にその誤解を釈明させた。尤もこれは彼自身、日本と円満な貿易を望むイギリス自身のためでもあった。

けれども、磔の白木柱をけずる無慈悲な鉋のひびきはやまなかった。セーリスは恐怖に顔をしかめて、毎日叫んで来たのであった。

「馬鹿な話だ！　実際、馬鹿な話だ！」

四

宇宙に太陽はじっと燃えている。海峡の蒼い潮は永遠の濤音を巻いてゆく——平戸島の白い砂原へ。

槍ぶすまに囲まれて、白衣のクララは立っていた。

頸にかかった玫瑰花冠に、聖十字架がキラキラとひかっている。

海辺の松をつらねる竹矢来の外に雲集した平戸の町の人々にまじって、ジョン・セーリスは船員達と一緒に見ていた。

一ト月近い牢獄の責苦に、娘は別人のようにやつれ果てていた。

しかし彼女は天使のように微笑んで群衆に喋った。

「お聞き下さい、平戸の皆さま、あなたたちはあの太陽と碧空を御覧です。けれど、その碧空も太陽も、今すぐわたくしの足の下になるのです。考えて下さいまし、天帝の御教えのほかに人の救われる道はありませぬ。他の宗門はみな暗闇か盲目です。あなたたちのうち、まだ御存知ない方は、どうぞ切支丹に変られますように。若しいちど切支丹になって御覧になれば、わたくしのいったことが本当だということが、きっとおわかりでしょう。それから、わたくしは誓います。あなたたちのうち、お転びになった方々に後悔をさせ申し、立ちかえらせて見せます。またかたく天帝を守っていらっしゃる方々は、ふかい根をはって、死ぬまでも忍ばれて、ますます堅く御教えを守って下さいまし！」

「だまれ——娘」

と、家臣に囲まれて、床几に腰をかけた法印は白髯をふりたてた。クララはふりかえって笑った。

「わたくしをはげまして、物をいわせて下さるのは御主様です。わたくしは魂のなかの歓びを抑えることが出来ません。殉教の歓びがつい外にあふれ出るのです」

「おお、けなげな奴、もっと歓びをさずけてやるぞ」

と老王は、猛虎のような眼つきを笑わせて合図した。

「邪宗門のみせしめに、お前の美しい額を火の十字架で焼いてくれる――やれ！　午之丞！」

家来のなかから、フラフラと酔っぱらったような足どりで、乾午之丞が歩み出した。片手に黒い串をぶらさげている。黒い？　あかるい太陽に遠くから黒ずんで見えたが、ふと袴にふれるとそれはぱっと白い煙を立てた。群衆は鈍い唸り声をあげた。それは灼けた鉄であった。

「天帝を棄てなされ――お千絵どの」

午之丞は声をしぼった。主君から己れに与えられた残忍な恐ろしい罰に、彼はなかば失神していた。

クララはしずかに首をふって、優しい眼で男を見かえした。

「どうぞ、あなたも天帝を信じて下さいまし。乾さま」

「やれ！　主命にそむくか、未練者め！」

と老王は激怒して膝をたたいた。乾午之丞は発狂したような表情になった。

「御上意でござる！」

午之丞はクララの頭をかかえて、その額に灼けた鉄の串を押しあてた。恐ろしい悲鳴と一緒に細い煙があがった。

顔を覆った娘の姿に法印は哄笑した。

「あはゝゝ、あはゝゝゝゝ」

嵐のような笑い声が、突然ふっと消えた。――まだ、誰か笑いつづけている――嬉々として

春の日のひかりに囀る小鳥のように。

クララは両掌をとった。――見よ！　雪の額に灼かれた黒い十字架！　しかも、彼女は笑っている。笑いつづけながら、彼女の瞳から涙がこぼれた。

「お可哀そうなお殿さま……」

「何！」

刺しつらぬかれたように法印は起ちあがっていた。武装した衛兵に囲まれた恐ろしい老人の爛々たる眼と、可憐な娘の濡れた薔薇の花のような笑顔がはたと相対した。

突然、法印は戦慄した。曾て朝鮮役で三軍を叱咤したこの猛将が、みずから知らずワナワナとふるえあがっていた。

歯軋りしながら彼はうめいた。

「裸にしろ、小賢しいこの娘を、あかはだかにして曝してやれ！」

すると、クララはあと退りした。火にも鉄にもなお笑うこの娘の頬に、みるみる血潮がゆらめきのぼった。

「おお、童貞・アナスタジアさま！」

彼女はよろめいて、胸の玫瑰花冠をしっかと握ると、急にきっと顔をふりあげた。

「むかし羅馬のアナスタジアさまは、打たれ、乳房を切られ、舌を抜かれて殉教におのぼりになりました。それをおもえば、裸が何の恥でしょう？　わたしはもっと恥ずかしいことをして

来たのですもの！」

それはクララがいちど天帝を棄てたことをいったのであった。彼女はあらけない番兵たちに頸の十字架をひきちぎられないため、いそいでみずから白衣を脱ぎすてた。

真夏の太陽の下に、雪のような裸身の乙女は、砂に膝をうずめ、指を胸に組んで、蒼い空に祈禱をささげた。

「御主様、わたくしは御主様がわたくしをどう御考えになっているか存じません。またどうしてこんな大きなお恵みをほどこして下さるのか存じません。わたくしはあなたさまにどう御礼を申しあげたらいいでしょう？　けれど御主様、今こそわたくしのこの身と霊をささげます。どうぞ、お受けになって下さいまし、そして今罪を犯している人たちも、後悔してあなたさまの御寵愛を受ける恵みを垂れて下さいまし。なかでも、御老体の御殿さまに——御殿さまは、わたくしを十字架にかけて、御主様の御苦しみを知らせて下さる大恩あるお方でございますから——」

「だまれ、だまれ、だまれ」

法印は物凄い形相になって踊りあがった。日のひかりと、何千という群衆の眼に曝された円い乳房の珠は、彼の予期に反して、純潔と神聖以外の何ものでもなかった！

狂ったように老王は両腕を振りまわした。

「殺せ、磔にかけろ、いや、這え！　四ツン這いにあの磔柱まで這わせてゆけ！」

「殿！　御慈悲を——」

と、乾午之丞がひれ伏して絶叫した。主君を見あげた真っ赤な眼は、すでに正気の色ではなかった。

憎悪と恐怖が大波のように老王の逞しい身体を戦慄させ、声がつまって、午之丞がクララに刑衣を纏わせる姿を彼は黙って、睨みつけていた。

槍に追われて磔柱へ歩むクララは、まるで婚礼か天国の祝宴に招かれてゆくようであった。日は西の勝尾嶽に近づいていた。海峡は壮麗な音楽を奏でつづけた。

十字架の上で、娘のほがらかな祈りの声がひびきわたった。

「天にましますわれらが御親、御名をたっとまれたまえ。御代きたりたまえ——天において思召ままなるごとく、地に於てもあらせたまえ——われらが人にゆるし申すごとく、われらが科をゆるしたまえ——」

槍がきらめいて、彼女の唇から獣のような叫びがあがった。胸を染める真紅の血潮が、磔柱の根もとに打ち倒れた乾午之丞の背に滴って、曼珠沙華みたいに咲いた。その瞬間、彼の身体はピクンとひとつ痙攣し、それっきり動かなくなった。失神したのだ。——恋と君命におしひしがれた哀れな武士！

「見えまする——あの船の」

ふたたび槍の穂が脇腹から肩につき抜けたとき、苦悶にねじりかえながら、彼女は天をふり

仰いで眼を見張った。

「美しい聖・マリアさま！」

金鈴のような笑い声をたてて、クララの頭ががっくり垂れた。

五

「残忍な——何という残忍な人種だ！」

両手をひろげて、ジョン・セーリスは昂奮して叫んだ。

周囲をぞろぞろと波のように群衆が歩いている——平戸の町の通りである。彼らは暗い顔で、みな黙々と散ってゆく。

怒りに燃えながら、セーリスの一行が、夕焼雲の下に三色旗がしずかにはためいている和蘭陀（オランダ）商館のあたりまでやって来たとき、一人の異様な服装をした五十歳ばかりの欧州人がつかつかと近づいてきて、

「甲比丹セーリス？」

と問いかけた。そうだ、とうなずきながらセーリスたちは不審気にまじまじとその男の顔を見つめた。

「わたし、ウィリアム・アダムス——英国の兄弟、ようこそ！」

「ああ！」

とセーリスは思わず歓喜の叫びをあげて、しっかとその手を握りしめていた。

これこそ、クローヴ号が平戸に入港して以来、急使を出してずっと待ちつづけていた人物、エドにいるただ一人のイギリス人、一六〇〇年に日本に漂着してから、家康の外交顧問として寵遇され、今はこの国の婦人と結婚し愛児すらもつくっていると聞いていた三浦安針その人であった。

熱狂的な接吻を交してから、彼らはこもごも母国と日本のことを語り合いながらボートに乗った。そのときセーリスは、今自分たちの見物してきた切支丹の一少女の死刑の情景を話し出した。

「惜しいことをした。もうちょっと早く平戸に着いていたら、わたしも見ることが出来たのに」

と、アダムスは言った。セーリスはちょっとその顔を見た。これがこの男の持前なのであろうか、それとも十三年間もこの国に暮して来たため、いつのまにか同化されてしまったのであろうか。ウィリアム・アダムスは何か日本人のように鈍い、重い、動かぬ表情を持っているのであった。

「しかし、残酷な国民だね——これは！　いつか、わたしたちも大変な目に合わされそうだ」

と、セーリスは平戸の町を振りかえりながら叫んだ。

「なに、われわれとそれほど違いはありませんよ」

とアダムスは落着いた微笑を浮かべながら、

「ただ、スンプにいるダイフサマ（家康）、あれだけは恐ろしい、いつも謎のような、深い微笑を浮かべている——穏やかな、物凄い老将軍です——しかし、甲比丹、こんどの禁教令はわれわれ新教徒の国民にとっては、天来の福音なのですよ。日本政府が脅威を感じているのは、カトリックの宣教師どもなので、これはやがてイスパニア、ポルトガル船の来航禁止にまで進展するにちがいありませんからね……」

「それは知っている。まったく天来の福音だ！　それは知っているが……あまり事の起りが悲惨で馬鹿げているから！」

クローヴ号の甲板に上ってから、甲比丹セーリスは天を仰いで長く嘆息した。

「わたしは、平戸領主に一生懸命釈明したのだが、あの娘が切支丹であると判明した以上それはどうにもならなかった……アダムス君、その娘をあれほど震撼（しんかん）させ、殉教をも厭わぬ一大宗教心をふるい起させた感動の源泉は——実は、聖母子像でも何でもなかったのだよ！」

彼らは例の船室へ降りていった。

「あれは、私の従兄でね、ピーコックという飲んだくれのヘボ画家の描いた——恐ろしく卑猥（ひわい）な、キューピットを抱いたヴィーナスの絵だったのだ！」

暗然と、声をふるわせながら、甲比丹セーリスは扉をあけた。

「御覧——ああ、思えば罪のふかい画像だった！」

「その罪のふかい、恐ろしく卑猥な絵というのは何処にあるのです？」

むっつりした表情で、ウィリアム・アダムスが振りかえった。

セーリスはけげんな顔をあげて、真正面の壁をふっと見るや、

「や、や、や——あれは何だ？」

愕然とした叫びをつッ走らせて棒立ちになった。

クローヴ号の船員たちの瞳にもみるみる恐怖の色がひろがっていった。

「ああ！」

ほがらかに金糸雀（カナリア）が鳴いた。

船窓のぎやまんをとおしてふりそそぐ夕焼のひかりに、炎のごとく燃えあがる壁の上——

「ピーコック」と酔いどれた署名はそのまま——しかも、見よ！　その額縁のなかには、黄金の円光をいだいて幼きイエスを抱く聖・マリアが、意味深い、厳かな微笑をたたえて、立ちすくむ人々を凝っと眺め下ろしているのであった。……

奇蹟屋

御役人様。

ああ、先刻の踏絵の踏みようがいぶかしいとおっしゃるのでございますか。

恐れいりました。いかにもあのおり、わたくしの足が、いなずまほどのあいだ、ふっと空にとどまったかも知れませぬ。それは、あの刹那、あしうらにきりっと火のような痛みがはしったように感じられたからでございます。

いえ、いえ、わたくしは切支丹でもなんでもありませぬ。いかにも、わたくしは島原であの修道士シモン太兵衛の相棒であったに相違ございません。さりながら、お聞き及びかも存じませぬが、シモン太兵衛は、信者仲間からさえも「奇蹟屋」と嘲けられながらお仕置場にひかれていった男でございます。その太兵衛の相棒となって、天草の姫君をはじめ世間さまをまんまとたぶらかした罪は、いかな御糾明をうけようとも是非もございませんが、いまさら、ころぶのころばないのと、そもそもこと自体が、わたくしが切支丹でないという何よりのあかしではございませぬか？

それでは、さきほど、どうしてわたくしが踏絵にひるんだのかと申しますと、それがなんとも自分でも不思議なのでございます。あのときふっと頭のなかを太兵衛の顔がとおり過ぎたので——いえいえ、御役人様、わたくしの頭にあの男のことが黒けぶりのようにゆらめいているのは、実はあの天草の髑髏ケ丘このかたのことで、この長崎へ逃げて参りましてからも、ときどきひょんなはずみにこの黒けぶりがすうっと胸を吹きすぎて、そのたびに身体じゅうが冷たくなるような思いがするのでございます。

ああ、こんなことくどくど申し上げても、何やらとんとおわかりになりますまい。——はい。順を追うてお話し申し上げましょう。そして御役人様、シモン太兵衛の最期にまつわる不思議な物語は、いったいどういう仔細かわたくしに解き明かしていただきとう、こころからお願い申し上げるしだいでございます。——

太兵衛発心の事

シモン太兵衛と申しますのは、がんらい肥前の唐津で唐金鋳物を家業とした男でございました。はい、いえ、このわたくしも同業なのでございますが、若いころからの放蕩三昧、あらかた親ゆずりの店をつぶしかかっていたわたくしとちがって、太兵衛の家は唐津でも十本の指のうちにかぞえられるほど手堅いものでございましたが、これはひとえに後見の伯父貴がしっか

り者のゆえで、あの男自体は、薄ばかみたいで、からきし意気地のうて、いつもただ芋虫みたいにうす暗い物蔭をのそのそと這いまわっている人間でござりました。

この太兵衛が、ある日、ふいにわたくしのところにやってきて、いっしょに旅に出ようではないかと、こう申すのでござります。

めずらしく、思いつめたようなその顔を、しばらくあっけにとられたまま眺めやっていて、それからわたくしは、われしらず、にやりと笑いがこみあげて参りました。

と、申しますのは、ちかごろ太兵衛が、とんだあか恥をかいたことを思い出したからでござります。つまり、太兵衛めにそろそろいい嫁女を心がけていた後見の伯父貴が、ある造花問屋の美しい娘に目をつけたところが、その娘が「太兵衛どののような、芋虫みたいな男は死んでもいやじゃ」と、身をふるわせて、さめざめと涙をながしたという話が、町一帯にひろがっていたのでござります。

ひとなみはずれて気の小さな太兵衛が、この噂にほとほと滅入って、町を逃げ出したくなったのはわかるとして、その旅にもだれか連れがのうては出かけられぬとは、——太兵衛はふところからずっしりとした金ぶくろを出して見せて、一生懸命にわたくしをそそのかすのでござります。で、わたくしはにやりと笑いましたが、笑ったのは、実はまだ太兵衛のあわれな心がらばかりではござりません。そのころわたくしはながい放蕩のむくいで、錨づなみたいに借銭に首をしめつけられて、その夜にも夜逃げでもしなければなるまいというありさまでござりま

したから、とんだ渡りに舟と、額をたたいて笑つぼに入ったわけでござります。

で、ふたりは思いはそれぞれ、とにかく尻に帆をあげて、まず雲仙へとしゃれのめしました。——その島原をまわっている旅の空で、運わるく、あの白い髯を持ったいまいましい切支丹伴天連のズニガに逢ったのでござります。

「聞かれい、皆の衆、——この世でいちばん弱い者——女、童、罪人、病人、片端ものなんぞこそ、いちばん天帝の御内証にかなうのじゃ」

そのとおり、この老ぼれた伴天連のいったこんな世まよい言に、太兵衛はほとほと感服して、つまり、これが魔に魅入られたはじめとでも申しましょうか。——

ああ、太兵衛が邪宗門に帰依したのは、まったくあの男の御面相のゆえなのでござりました——いえ、あれを、かげぼしの胡瓜みたいな愚図にしたのも、ちゃんとした家を飛び出させたのも、みんなあのひょんな顔のせいだったのでござります。

造花屋の娘は「芋虫」と申しましたが、これは、まだ口のやさしい方でござります。青ンぶくれた顔に、唐がらしみたいな奇態な色をしたあぐら鼻、出ッ歯にすが目、そのうえ猫背に大足と御念の入った身体つきは、醜いうえに少々可笑しみさえあって、まったくあれでは「片端ものこそ天帝に可愛がられる」と、てにをはにあわぬことを申す伴天連に随喜の涙をながしたのも、無理なはなしではござりません。

太兵衛が、ズニガから「洗礼」とやら申す、まじないを受け、シモンと申す異人名をもらい、

すっかり切支丹に入ってしまったのは、それからまもなくのことでござります。

ものの、いいはずみとは恐ろしいものでござります。いえ、一念というものほど怖いものはござりますまい。あれほど愚図で能なしの太兵衛が芋虫頭をふりたてふりたて、出ッ歯から唾をはねとばしながら、林のなかで、また夜の野原で信者どもに説法する、その理窟のこねかた、勢いと申しますものは、これがあの陰ぼし胡瓜の太兵衛かなと、わたくしさえも小首をかしげ、ときには笑おうと思ってもどうしても笑えないくらいでござりましたから、信徒はもとよりほとほと感銘いたし、伴天連ズニガが太兵衛をおのれのかた腕とまでたのみ出したのも、あたりまえのなりゆきと申せましょう。——

あ、わたくしでござりますか？　わたくしは切支丹ではござりません。梵天帝釈四天王、惣じて日本六十余州の神々にかけて、決して、決して——わたくしは天帝とやらいう嬶みたいなものよりも、夜鷹の方が肌にあいます。洗礼の水なんぞより、お酒の方が大好物でござります。わたくしを太兵衛にくっつけておりましたのは、ただもうあの男の金ぶくろだけだったのでござります。その金ぶくろがだいぶあやしくなって来たころ、もうそろそろ故郷の借銭とりの頭も冷えたであろうと考え、いちどわたくしがひょいと里ごころを起こしたおり、こんどはあの男が唐がらし鼻から湯気をたてて、わたくしの袖をつかんでこう申すのでござります。

「弥平次よ、おぬしは可哀そうに、あらゆる悪徳にけがれ、あらゆる罪を犯している。このまま別れたら、おぬしが死んでも地獄に堕ちるは必定じゃ。な、もうしばらくわしといっしょに

暮してくりゃれ。きっとおぬしを天帝を信じる聖い人に変えて見せようほどに」

——ところが、それからまもなく、とんでもないひょんな紐でふたりはむすばれ、切っても切れぬ相棒となってしまったのでござりました。——

そのきっかけと申しますのは、先年、島原一帯を襲ったあの大地震だったのでござります。また、どんなにズニガに可愛がられていたとは申せ、たった三年足らずのあいだに、シモン太兵衛が修道士にまでなったのは、あの大地震のおかげだったのでござります。

あれは、月のあかるい野が砂原のように白じろとひかる夜でござりました。ひれ伏した奉教人たちを前に、シモンが片手を天にあげて、

「されば、その日には天帝の御怒りによって、空は血のごとく燃え、山は崩れ、とどろきふるいて地も裂けようぞ！」

と、わめいたとたん、なにやら雲仙のうえの空がぱっと赤くはためいたと思うと、万雷のくずれかかるような恐ろしい地鳴りがして、皆あっとさけんだまま草の根をつかみしめておりました。

まことにこのときばかりは、この世の終りかと思いました。山海嘯にも似たとどろきが去り、ややあって恐る恐る頭をあげてひとりの信者が、

「あれ、あれ」

と魂ぎるような叫びをあげたのも道理、なんとシモンの背後に、蒼白くひかる丘の土が、か

っと縦横十文字に地割れして、まるで天から降った巨きな十字架のように見えたではございませんか？

シモン太兵衛は――と申しますと、先刻、片手を空にあげたまま、すッくと立って、身ゆるぎもせず――その天に逆立つ髪、爛々とかがやく瞳、さすがのわたくしも「ああ」とうなったきり、思わずまたべたとひれ伏してしまいました。この世のものならぬ威厳、神々しさに打たれたとでも申しましょうか。――

――ところが、御役人様、のちに太兵衛から聞きますと、なんとあの男はその一瞬、気絶していたのだそうでございます。眼球をむき出し片手をあげたすがたのまま、雷に打たれたように、骨も肉もうごかなくなってしまっていたそうでございます。

「奇特じゃ！　奇特じゃ！　奇特じゃ」

たちまち、こんなあえぎ声が風のようにいっせいに起こりました。

まったく、このときばかりはこのわたくしも、切支丹どもが信ずるあの奇特とやらがてっきり現れたに相違ないと思いこんだくらいでございます。なれども――ふとった太兵衛の顔をふりあおいだとき――いよいよ厳かにすましかえったあの男の頬に、翳みたいなうす笑いを見たような思いがして、わたくしは凝っと眼をこらしたのでございました。

――のちに聞けば、このとき太兵衛はわれにかえっていたそうでございます。そして、うす笑いを浮かべていたということはまったく覚えがないが、左様、まるでおのがあの天帝にでもなり上がったような、なんともいえない浮き浮きした奇態な気分になっていたのだそうでございます。

ところが、本人がそんないい気持でいるとき、このわたくしは、太兵衛がはじめてこちらと同じ人間になったような感じがしたのでございました。

しょげた御面相のゆえに、地べたをのそのそ這いまわっていた昔の太兵衛でもなければ、やれ天帝の、やれ天国のと、へんに飛びあがっていた今までのシモンでもなく、小さい悪党のこのわたくしと同じ人間に、――左様でございます。シモン太兵衛に生まれてこのかたはじめて人間なみの慾心が出てきたのは、きっとこの恐ろしい夜からのことであったに違いございません。

奉教人たちが家を案じて、蜘蛛の子を散らすように村の方へ駈け去ったあと、わたくしは、のそのそとちかづいていって、ぽんとシモンの肩をたたいてやりました。地震とわかれば、どうせ他国からながれて来た風来坊、しごく気楽なものでございます。

「へ、へ、おん奇特とおいでなすったよ――太兵衛、さぞ、いい心持であろうな」

赤く錆びついた物凄い月の下で、あの男はびくんとわれにかえったようにわたくしを見返りましたが、やがて顔をそむけて、薄ぼんやりと笑ったようでございました。……はい、このときくらいわたしは太兵衛が卑しく感じられたことも、それから、へんにうれしくなったこともございません。

天草の姫君

あの恐ろしい大地震は、しかし申すまでもなく、たまたま時のめぐりあわせで、天帝のおん奇特なんぞであるはずがなく、それより島原にはびこる邪宗門に、雲仙の山霊がお腹をおたてになったとでも考えた方が、まだまっとうなのでござりましょう。

なれども、そこがそれ、聖霊やら天使やら嬰児のかたことみたいなことを口にするたびに、眼も血ばしってくる切支丹どものことでござります。

「同宿シモンが奇特をあらわしなされた。同宿シモンが奇特をあらわしなされた」

地震に荒れはてた山や河を、このうわずった叫びがながれわたり、伴天連ズニガが京の方へのぼるにさいして、太兵衛を修道士にあげていったのも、ありようはこの奉教人どもの大評判に自分からつりこまれてしまったに違いござりません。——

あの丘の十文字の地割れがまぐれあたりであったことは、ほかの誰よりも先ず太兵衛が知っているはずでござります。ところが、御役人様、人間、調子づいてきたときには奇態なもので、それからしばらくして、あの男がひとりかふたりの信者の病気を祈禱でなおしたという出来事がほんとうに起こったのでござります。

シモン太兵衛が天草のお城に呼ばれて、不知火姫にお目どおりを許されたのは、そのころのことなのでござりました。その夕がた、お城から下がってきた太兵衛のすが目は、まるで酒に

でも酔ったようにぎらぎらとひかり、赤鼻はいよいよ茹でたての蟹のいろに燃えさかっておりました。

「修道士どのよ、さてさて首尾はいかがであったな？」

と、わたくしが、あの海内無双と噂だけは承っておりまする、あでやかな姫君のおんまえにまかり出た、芋虫男の可笑しさにからかい半分に聞きますと、

「されば、姫は切支丹にするのじゃ。かならず……姫を切支丹にするのじゃ」

と、まるで何かに憑かれたような様子なのでござります。

もっとも、あの「十字架の奇特」のまぐれあたりは、自分でもよく承知しているはずなのに、まわりの取沙汰にゆらめら浮きあげられて、ちかごろ何やら神がかりになっている気配もほの見えるシモンのことでござりますから、そのときはわたくしもなにげなくにやにや笑ったのでござりましたが、それから十日ばかりたって、その男は実に途方もない談合をわたくしにしかけて来たのでござります。

それは何かとおっしゃるのでござりますか？　まあ、ちょいとお待ち下さりませ。……それからまもなく、修道士シモンが、ある村のはずれで、いざりの男を歩かせたという奇特、ゆきだおれの中風の老人をもとの身体にもどしたという奇特、癲癇の武士を、あるいは足のなえた旅人を、みるみる癒したという奇特が相ついで起こりました。

これは数多くのひとびとが、——いえ、わたし自身、この眼でたしかに見たことなのでござ

りますから、神かけてまちがいではござりません。

そしてとうとう、天草の姫君の御覧のまえで、シモンが海を歩んでわたるという大奇特の起こった日が参ったのでござります。

それは、美しい夏の夕ぐれのことでござりました。

天草の海辺に、幾百千ともしれぬひとびとがあつまっているなかにお忍びながら、十数人の御武家さまやお女中がたに護られて、たしかに不知火姫さまもお出ましになっていたということでござります。

やがて、黒衣をつけた修道士シモンが、銀の十字架を抱いてしずしずとあらわれました。

シモンは、そこで大音をはりあげて、ながながと説教をいたしましたが、なんでも天帝を信じる者は、波のうえを歩みわたっても決して溺れることのない力をさずけられるという趣を、邪宗門の開祖の話をひいて語ったそうでござります。

海にあおあおと夕風がさざなみをたてはじめると、あの男はうやうやしく祈禱をあげたのち、しずかに波に半身をひたしてゆきました。

わたる海は、沖に小島をひかえて、童でも泳ぎわたる幅ではござりますが、しばらく遠浅がつづくと、それからさきは十尋の深みに変わるのでござります。

ところが——これはしたり、シモンは、おお、まことに沈みも溺れもしないのでござりました！　さすがに歩いてゆくとまでは参りませず、なかばなお水にひたっておりましたが、上半

身はまっすぐに立ったまま、頭上たかく両手で十字架をささげて、しだいに沖の小島へ去ってゆくのでござります。

海に白いまるい月はのぼりかかっております。聖十字架はきらきらと星のようにかがやいております。このとき、波もそのささやきをひそめ、ただ厳かなシモンの声が風につたわってくるばかり。

その声がしだいに遠く小さく消えてゆくにつれて、

「アーメン！　アーメン！」

という唸り声が、海嘯のように湧きあがって参りました、なかには涙をながし、砂にひれ伏して感泣していた者さえ、少なくなかったということでござります。……

はい、いえ、この光景は、わたくしは見たわけではござりませぬ。と申しますより、ありようは見ることは出来なんだのでござります。なぜなら、わたくしは海をうみ亀のように泳いでおりましたゆえ——

大きな木切れを、それこそほんとに十字架に組み合わせ、わたくしはそのうえに腹ばいになった胴をしばりつけ、しずかに水をかいておりました。シモン太兵衛は、そのわたくしに馬乗りになっていたのでござります。はい、ちょうどあの浦島太郎のように。——その重みのためにわたしの身体は波のしたにしずみ、ときどきかま首をもたげて潮を吹くのがやっとのことでござります。なれども、そのかま首は、シモンのひろげた黒衣のかげにかくれて、岸のひとび

とには見えるわけもございません。

ああ、これこそ修道士シモンの奇特の正体なのでございました！

あの、シモンが癒したという足のなえた旅人、癩瘤の武士、中風の老人、腰居の男、これならばわたくしもよく存じております。——と申しますのは、これらの人間こそ、このわたくし自身なのでございましたから。……

この七化はおろか、うみ亀にまで化けることが、いつか太兵衛のわたくしにかけてきた相談なのでございます。

わたくしの慾しいものは、ただ銭ばかりでございました。酒と女の買えるお金でございました。太兵衛はそのわたくしの願いを、存分に満たしてくれました。信者たちからあつまるお金は、ほとんどみな、わたくしにくれたようでございます。

それはよいとして、あのうすのろみたいな太兵衛が、つぎつぎとこんな悪智慧を出してくるのに、わたくしは少々気味がわるくなり、もしかしたらこの男には、天帝どころかあの悪魔とやらがのりうつっているのではなかろうかと、腕をこまぬかずにはおられませなんだ。しかし、シモンは、ときどき、ぐったりと壁なんぞにもたれて、かなしみにあふれるような姿を見せることがございます。いえ、ほんとうにまた、そっと涙をながしていることもございました。

「太兵衛よ……おまえはべつに一儲けするつもりでもないらしい。それどころか、だんだん、しょんぼりしてゆくようじゃ。……いったいなんのためにあんな妖術を使うのじゃ？」

「妖術？——ひっ、ひっ、ひっ、天草のお城の方々を切支丹にさせ申すには、妖術もやむを得ぬわい。やがて、ズニガさまが京からお帰りになる。もしお城にアヴェ・マリアの鐘の音が鳴りひびいていたら、どのように司祭さまがおよろこびになることであろう」

八幡大菩薩、五道之冥官にかけて、私は信じようとは思いませぬが、あの男の狂気のような伝道の執念、ひたむきな信仰、というより修羅の妄執につくづくと——はい、いえ、少しばかり恐れ入ったのは、このときの凄じいシモン太兵衛の目のひかりを眺めたときでございます。

そして、この狂人のひく車のおもむくところ、とうとう千仞の地獄の谷へ落ちこんでしまったのが、日もあろうに、——しばらく御仁恵によって切支丹どもを大目に見て下されたお上が、ついに御堪忍の緒をきられて、いっせい召捕りの御布令を下され、それがこの天草の島へまわってきたあの日であろうとは！

天から落ちた話

「修道士シモン、祈禱により、天より星を降らせて見しょうとのことでござる」

このまったく途方もない、前代未聞の予言が、天草のお城のなかをつたわったのは、その年の秋のことでございます。

ある月のない夜、天草のお城の、広い庭に面した縁さきから、木蔭、築山、池のほとりまで、

たくさんの御家来や侍女衆がひしめいて、東の空を仰いでおりました。そして御障子をあけはなされた御座敷には、白い小袖にきらびやかな裲襠をお召しになった不知火姫さまが美しいおん瞳をいっぱいにおひらき遊ばして、いっしんに、庭の真んなかの醜い可笑しい猫背の修道士を、御覧になっていたということでございます。

醜い？　可笑しい？——いえ、いえ、そうではございませぬ、えんえんたる篝火に半面を照らされて、ゆれる念珠、血のいろにかがやく胸の十字架——出ッ歯にすが目の顔も祈禱の声も異様な鬼気と厳かさに満ちて、されば、月こそなけれ満天にきらめく銀砂子、そのひとつぶがすうっと流れても、そのたびに、

「あ、あの星か——」

と、いっせいにどよめきわたったというのも、もっともなしだいでございましょう。

と、突然、シモンが「おう、聖霊下りたもう！」と大声で叫んだとき、ひとびとは海のうえに、忽然とあらわれた異様な星を見とめたということでございます。

星——星、今まで見たこともないほど巨きな、青い青い星がひとつ、真っ暗な夜の大空にゆらめき浮かんで、しかも、ああそれが次第次第にしずしずと海へ下ってゆくではございませんか？

「ああ、聖霊……アメン！　アメン」

と、叫ぶひとびとの声も夢にゆめみるよう、このときには、まだ洗礼を受けられぬ姫君も、

思わずしらずおん胸に御掌を組まれて、この聖霊の星を伏し拝まれたそうでございます。

京の方へいっていた伴天連ズニガが、その白い髯にうずまった鷹のような顔を御城内にあらわしたのは、ちょうど、庭の真んなかに仁王立ちになったシモンが、声たからかに天帝のおん徳を頌めあげたときのこと、ズニガは小首をかたむけて東の空の青い星を仰いでおりましたが、狂ったような周りの騒ぎに気を呑まれて、しばし茫然とつっ立っていたそうでございますから、そのとき姫君のおそばに坐っておられた御家老さまが、そそくさと奥へお入りになったのを、きっと気づかなかったに相違ございません。

伴天連ズニガは天草へ帰ってくるなり、信者から留守ちゅうの不思議な出来事、別して今夜現れるというシモンの奇特の話を聞いて、なんともいえない妙な顔つきになり、すぐその足でお城にやって来たということでございますが——憐れむべし！　それときびすを接して江戸から御使者が、切支丹征伐の厳しい御上意をさげてお城に入ったことを、宏大無辺の恩寵とやらに護られているという身でありながら、ゆめにも感づかなかったのでございましょう。

気をとりなおしたズニガが、一歩すすみ寄って、

「シモンよ、シモンよ」と呼びかけたのは、御家老さまが恐ろしい御顔で、ふたたび御座敷に入って来られたときでございます。

シモンはふりかえって師匠を眺め、ふたりは凝っと眼を見かわしたまま、しばらく声も出なかった由でございますが、その間五尺、切り結ばれた異様な気配を、まわりのひとびとはそれ

と、気づくいとまもござりませぬ。——と申しますのは、あの海の夜空に、またまた大変な奇特が起こったのでござります。

「おう、星が燃える！　星が燃える！」

その叫びに、びっくり仰天、ふりむいたシモンは、急にわっと悲鳴をあげて頭をかかえてしまいました。いえ、この有様も、わたくしはこの眼で見たのでござりませんが、星の燃えたのはよく知っております。それを見てびっくり仰天したのは、決して太兵衛に劣りません。

と申しますのは——御役人様、その燃える星の下の海で、小舟をうかべていたのは、このわたくしでござりましたから——。

ありようは、凧でござります。凧に雪洞を吊るしていたのでござります。真っ黒に塗りつぶした雪洞を星形に切りぬいて青ギヤマンを嵌めこみ、なかに、大蠟燭をともしていたのが、とつぜん雪洞ごと燃えあがったのでござります。

燃えあがった雪洞の炎のあかりは、あなやというまに、そのすぐ空に宙がえりしている凧を、ありありと浮き出させてしまいました。

天草のお城で、見物のひとびとが、あっと眼をむいて呆れかえったのは、申すまでもござりません。が、そのときはやく御家老さまが鞭のようにはね上げられて、

「たわけ！　山師伴天連、年貢の納めどきが参ったわ！」

と大声でわめかれても、なおしばらく、御家来衆はぽかんと口をあけたまま、身動きも出来

なんだそうでござりますが、

「切支丹の徒は厳に誅戮せよとの、将軍家よりの、御上意じゃ。それ、ものども、早々にこの売僧どもをくくりあげよ！」

との御声に、はじめてわれにかえったように、色をうしない、たちまち、どっと、ふたりに雪崩かかって来られた由にござります。

シモン太兵衛の方は、両手で頭をかかえたまま、畏れ入って神妙に、御縄をいただいたと申しますが、南蛮伴天連の方はあまりの急に乱心し、のぼせあがったと相見え、なにやら怪鳥のような南蛮語で叫びながら、瘤だらけになって御手向いいたした由、とうとう力尽きて引き立てられるとき、弟子の太兵衛をはったとねめつけて、

「奇蹟屋め！　地獄に堕ちよ！」

と、唾はきかけてののしったそうでござります。

おおかたズニガは、今回の御召捕りが、てっきり途方もない大しくじりによるものと思いこんだに相違なく、その腹立ちようからうろたえぶり、まったく笑止のいたりながら、それにしても飛んで火に入る夏の虫、この無惨なぶちこわしの場にのこのこ乗り込んで来ていたとは、でもまあ何という運の悪さ——いえ、運の良さ、お上のあそばすことにはいつもこのようなかたじけない天の配剤が現れて、ただただ恐れ入るばかりでござります。……

それにしても「奇蹟屋」とは、いやはや、よくぞ申しました。

最後の奇蹟

去んぬるとしどし、数かぎりない邪宗門の信者どもを御仕置になって、伴天連どもが「髑髏ケ丘」と呼んでいる天草のある丘で、ズニガ、シモンを始めとし、十三人の切支丹どもが火あぶりになったのは、それから十日ののちでござりました。

伴天連ズニガと申せば、当時信徒たちから、宗門開祖の再来とまであがめられた人間でござりましたのに、丘へひきたてられてゆく途中も、悪鬼のように狂いののしり、その別人かと思われるありさまには、灰を拾いにきた奉教人たちも少なからず興ざめするほどでござりましたが、なかでもこの老人が歯がみしながらシモンをふりかえるときの眼ときたら、恨みと申しましょうか、さげすみと申しましょうか、凄じい憎しみに陰火のようにどす黒くにごって見えたということでござります。このときズニガはしきりに「ジョタス、ジョタス」というようなことを口ばしったそうにござりますが、なんでもこれは切支丹の開祖を敵に売った男の名の由でござります。

シモンはと申しますと、ひどくしょんぼりして、とんと塩をまかれた蛞蝓のよう、ただうすぼんやりした顔つきで、わたくしは久しぶりに、憑きものが落ちて昔のふぬけの芋虫男が、忽然と眼のまえにもどってきたような思いがいたしました。――いえ、このわたくしは、そっと見物に混じって見ていたのでござります。あの夜、胆をつぶして海から逃げ出したわたくしも、

さすがに長年相棒をつとめてきただけに、太兵衛の最期だけは見とどけておきたかったのでござります。

ありようは、わたくしが不知火姫をじかにお見かけ申し上げたのも、髑髏ケ丘で、はじめてだったのでござりました。はい、姫君さまは、ちょうど、あの海をあゆみわたる修道士、天からくだる聖霊の星を御覧においで遊ばしたと同じように――御きげん麗わしく、切支丹どもの火あぶりを御覧においで遊ばしていたのでござります。

ああ、あの月輪が芙蓉の花のように朦たけたおん顔ばせ、つゆもしたたるばかりの黒髪、たくまずしてこぼれるおんあどけなさ――畏れながらこのわたくしでさえ、いつのまにやら、うっとりとお見とれ申し上げたくらい、聞きしにまさるおん美しさは、まことに地上のものではござりません。どうしてどうして、このように浄らかな姫君が邪宗門などにお惑いになるはずがござりましょうか。左様でござります。姫君がしばしばシモンの奇特を見て御満悦であったのは、ただただ邪気のない憂さばらし、珍しもの好きな、天真爛漫なお心柄からばかりであったに相違ござりません。

髑髏ケ丘にたちならぶ、はりつけ柱は十三本、しばりつけられた御縄がわざとゆるやかなのは、御成敗の、邪宗門どもが、のた打ちまわる最後の苦患をいよいよ大きくして、他の見せしめにしようとなさる、ありがたいお上の御仁慈によるものでござります。

薪に火がつけられると、たちまちあがる炎と黒けむり、不知火の海を血に染めてしずみゆく

落日もくろ錆びて、いっせいにあぶら汗をながしながら祈禱をあげる叫びが聞えはじめましたが、やがて犬とも狼ともつかぬ阿鼻叫喚の吠え声と変わります。

なかでも恐ろしかったのは、白髯に火がついて狂いまわる伴天連ズニガで、

「おお主よ、悪しきこの国に永遠の火を降らせたまえ――」

という嗄れ声がとどろきわたったときには、われしらず見物の衆で顔いろの変わらないお人はないほどでござりましたが、次の瞬間、この恐ろしさをいっぺんにぶちこわしてしまったのは、あのしょげた芋虫男でござります。

「神父さま、かんべんして下され！　わたくしの罪を、天帝様にとりなして下され！　忘れずにわたくしもどうぞ天国へつれていって下され」

燃えさかる炎のなかで、こう頓狂な声をあげて、ズニガの方へ身体をねじむけ、ぺこぺこと頭をさげる姿がちらと見えました。この場合に、見物のひとびとが思わずどっと笑ったのは、あのシモンの大奇特の正体と、この虫のよい註文を思い比べて、あんまりそれが可笑しかったからでござりましょう。

――いつしか、獣のような悲鳴も断え、のた打ちまわる身体は黒ぐろと柱にこげつきます。あとはただ大空を吹きどよもす風に、万丈の炎がうなりをあげるばかり。――そのときでござります、十三本のはりつけ柱の、十三番目の炎のまえに異様なものが現れたのは！

それはシモン太兵衛の柱のある場所でござりました。さりながら、そこから出て来たのは、

人間ではござりませぬ。いえ、人間のはだかのかたちをしておるようでござりますが、髪もなければ眼鼻も見えずただ身体じゅうまっくろな――この妖怪めが、ふらふらと風に吹かれてただようてくるのでござります。

――「ぎゃあっ」とひと声、嬰児の泣いたのがはたと断たれて、あとは海も炎も、天も、地もしーんと死のようなしずけさ、ひとびとは、息をのんだまま石ぼとけのよう――あとでも、あれは悪い夢ではなかったかと、おたがいに語り合ってたしかめたということでござりますが、これは夢でもなければまぼろしでもない、まことにこの白日の地上に起こったことでござりました。

そのまっくろなあやかしは、しずしずとひとすじに歩んでいって天草の姫君のおんまえにつくと、しばらく凝っとたたずんでおりました。……

――が、やがてそっと顔をかくすように両掌をあげると、恐ろしさのあまり、ただまじまじとおん瞳を瞠られた姫君の御裾に、さも恥ずかしげにうずくまり、そのおみあしに口をつけるようなすがたになったものでござります。

「――ああ！」

たまぎるような叫びを姫君があげられた刹那、その黒い化物は、がさりと地べたにくずれてしまいました。

――くずれた？　はい、左様でござります。あとで見ましたら、それは人間のかたちをした炭

であったということでござります。

そして御役人様。――あとで調べますと、十三本のはりつけ柱のうち、シモン太兵衛のむくろのみが、その柱からふっと消えていたそうでござります。……さりながら、そのくろい炭の化け物が太兵衛であることは、そやつが姫君のおんまえで見せたのろのろした猫背の恰好から、いちはやくわたくしは気がついておりました。――そして、あの愚図の太兵衛が、いったいどうしてあのような、海を歩んだり、聖霊の星をくだしたりする大それた妖術をつかったのか、はじめてわかったような思いがして、われしらず身体じゅうの毛あなをそそけ立たせたことでござります。

ああ、太兵衛は、想いを懸ける相手もあろうに、天草の姫君に煩悩(ぼんのう)の炎をもやしていたにちがいござりまん。――

いえ、きっと、そうでござります。

ああ、醜い、可笑しな、意気地のない男に、はじめて人間なみの張りと慾が生まれて、はじめて上の方を見た眼にうつった天上の華一輪、憐れなあの太兵衛が、いっしんふらんに姫君の御心をひこうと、かなわぬまでもその御心をお慰めしようと、死物ぐるいにあがきぬいたのに相違ござりません。……

いえ、いえ、御役人様、わたくしは決して切支丹なんぞ信じるものではござりません。あの恐ろしいズニガの断末魔を見ても、それが悪鬼の邪宗門であることはあきらかでござります。

……あの海の奇特、星の奇特の正体も、今申し上げたとおりでござります。

……さりながらさりながら、御役人様、奇蹟屋シモンが、死んでからあらわした最後の奇蹟だけは、ほんとうだったのでござりました。

これはどうぞ、あのお仕置にお立ちあいになった天草の御役人様にもおききあわせになって下されまし。

憐れな、可笑しい芋虫男の、恐ろしい恋の話と申しますのは、これだけでござります。

山屋敷秘図

——伴天連渡り候えば、或いは火あぶり、或いはつるし、或いは斬罪に仰付けられ候ゆえ、伴天連たびたび日本へ渡り申し候——

——北条安房守宗門改記録——

一

定

きりしたん宗門は累年御制禁たり、自然と不審なる者あらば申し出づべし、御褒美として、

一、ばてれんの訴人　銀子二百枚
一、いるまんの訴人　銀子百枚
一、立かえり者の訴人　同　断
一、同居並びに宗門の訴人　銀子五十枚

右の通り之を下さるべく、たとい同宿門のうちたりといえども、訴人に出る品により、銀子二百枚之を下さるべく、隠しおき、他処よりあらわるるに於ては、その所の名主五人組まで、一類ともに厳科に処すべきもの也。

楣間にこういう制札のかかった山屋敷の表門から、石段を下り、さらに丹下坂を下りたところにある幅一間、長さ九尺にも足りぬ木橋を、このごろ小日向の町の人々は獄門橋と呼んでいるそうな。この橋畔に、ときどき、責め殺された邪宗門信者の首が梟けられるからであろう。

「なんだって？　お前さん、切支丹屋敷に御奉公してなさるのかい？」

使い先で、よくこうききかえされて、恐怖に満ちた相手の瞳を見るたびに、長助はかなしくなる。

「そりゃア……気をつけねえと、伴天連の魔法にかかるぜ。あの化物どもは、血の磔にかけられなきゃ極楽にゆけねえというそうじゃあねえか？」

長助は伴天連たちが憎らしくてたまらなかった。

ほんの先年まで、四千坪からあるお屋敷は、青い森や丘につつまれて、この季節には、いたるところ老鶯やひよどりや仏法僧が鳴きしきっていたものだ。——大目付井上筑後守の下屋敷、が、先祖代々の下男の倅としてそのなかに生まれ、そのなかに育った長助にとっては、主人の屋敷というより、柔らかな、大きな、みどりの揺籃のような気がするのだった。

その殿様が、五年ばかり前、切支丹奉行に仰せつけられ、屋敷のまんなかに、一丈二尺もあ

る石塀をめぐらした牢獄や、首切場や、火刑場がつくられて以来、その一角からたちのぼる血の匂いと妖しげな呪文の声に恐れてか、鳥もめっきり少なくなった。

「なに、魔法をつかおうたって、三重、四重の御牢のなかよ。第一、あの南蛮人ら、あれア眼は碧いし、髪の毛は紅えがな、……打たれても、たたかれても、まるで馬みてえにおとなしいもんだぜ」

長助は白い歯を見せて笑い捨てようとしたが、ふっと眼が宙にとまった。——それが薄気味わるいのだ。吟味所で、一枚十三貫の石を四枚も五枚も抱かされ、膝の骨のくだける音をたてながら、血の泡を浮かべた口を天にむけ、

「アーメン……アーメン……」と、つぶやきつづけているあのかすかな、が、歌のように歓びに満ちた声。

（いってえ、あいつらの身体ア……いや、頭アどんな仕組みになってるんだろ？　……あれが切支丹の魔法っていうものかしら？）

使い先から出たのち、しきりと小首をかしげながら往来を歩いていると、ふいに背中をポンとたたかれた。

「長助さん」

「あ、……おはるちゃんか。ああびっくりした」

くるくるした顔で笑っているのは、山屋敷の下女で、十九の長助よりふたつ年下のおはるという、やはり先祖代々井上家につかわれている小者の娘だった。

「これから、御用かい？」

「いえ、いま帰るところ、……長助さん、何をむずかしい顔して歩いていたのさ？　——牛の糞ふんづけたのも知らないで」

「あれ？　さっきから見てたのか、——いや、なに、むずかしい顔ったって……」

ふたりとも、浮き浮きしている。ときどき顔を見合わせて微笑する。幼なじみで、好きなのだ。が、たとえ下女と下男でも、主人の許しを得なければ、祝言はおろか、恋でさえもおおっぴらにはできない厳格な武家奉公の身分だった。

「なんでもねえのさ。ただね、あの伴天連たちが、あれほどひでえお調べにあいながら、どうしてまたあんなに嬉しそうな顔をしていやがるのかと、——つくづく不思議でたまらねえものだから——」

しかし、さっきまでのまじめな顔つきとちがって、うっとりとした声である。話していることはなんだっていいのだ。

ゆめみるように眼をあげて、ゆくての荒木坂を仰いだおはるは、このとき、ふっと足をとめた。

「お調べっていえば、長助さん、さっき沢庵さまと柳生の殿様が、お屋敷においでになったの知ってる？」

「沢庵さまと柳生さま？」

「ええ、お駕で……あたし、酒屋にいたら、お供の方が水をくれと入っていらして、おふたかた、これから山屋敷の御吟味にゆかれるんだっておっしゃってたわ」

「そうかい……どちらも御老体で、御苦労だなあ」

と、いったが長助は、いままでの浮いた気分から突然ひきもどされたような思いがして、また腹がたってきた。——ええ、くそっ、帰るとまた、あの気味のわるい悲鳴を聞かねばならねえのか。……

「可哀そうに……」

獄門橋のところで、おはるが身ぶるいしてつぶやいた。そのつぶらな眼に、いっぱい涙がたまっていた。

「可哀そうに？——誰が？」

「きりし——」

「しっ、と、とんでもねえ！」

長助はあわてておはるの口を覆い、蒼白い瞳で、丹下坂のすぐ上にそそりたつ山屋敷の表門をふり仰いだ。……

二

——門番所をとおると、百歩ばかり向こうに、一丈二尺も盛りあげた土堤が見える。いや、外から見ると土堤のようだが、その内側は、八寸釘の忍び返しを打ちつけた石の壁だった。二十間四方のこの石壁にかこまれた内部には、番所と官庫と牢獄がある。

吟味所は、この死の一画を出たすぐ西側、つまり表門と反対側に設けられてあった。

おはるとと別れて、しばらくしてから長助はへっぴり腰で、吟味所をのぞきにいった。怖いもの見たさという奴である。近づくにしたがって、もう物凄い唸り声が聞えた。突然、ぎゃーっと身の毛もよだつ絶叫がひびきわたり、ぎょっとして立ちどまった長助の耳に、きりきりと巻きあがっていったその悲鳴が、ふいと、美しい大空へながれ去ったように名状しがたい甘美な声に変わって、

「たっとき聖餐、秘蹟、褒め尊びたまえ、ゼズス・マリア！」

それっきり、声はふッつり断たれた。

急にしんと澄んだ日のひかりのなかに、長助は目まいがした。邪宗門の神を知らず、切支丹を憎んでいるはずの長助は、あの苦痛の極みに発せられる、変にやさしい祈禱の声が、なんのゆえか胸をしめつけ、涙をあふれさせそうになることに、なんべんも気がついてふるえあがり、首をふるのだった。

一瞬の後、うなるようなどよめきのあがった吟味所の方へ、しかし長助はまたソロソロと歩き出した。忌々しがりながら、恐ろしがりながら、長助は切支丹受難の光景を見にゆかずには

いられなかった。

砂利をしきつめた庭の一方にひしめいている同心や下男達のうしろから、おそるおそるのぞいて見ると、果たして、死んだのか、気絶したのか、血まみれになった一人の伴天連の身体を、向こうへ運び去ってゆくところだった。

正面の吟味所には、主人の井上筑後が威儀厳然とひかえている。その両側に坐っているのは、果たして宗彭沢庵と柳生但馬守。きょう相たずさえて訪れたのは、おそらくすでに幾万本かの死の十字架のたつ日本へ、執拗に、絶望的に潜入してくる不可思議な南蛮僧どもを、一見したいというつもりからであろう。すでにどちらも七十を超えた老体ながら、眉雪の下から炯と射る眼は、黒い、恐ろしい炎のようだった。

ほかの伴天連や修道士の痛め吟味は、もはや終ったと見えて、ひろい白洲のまんなかにいるのは、両腕を前にくくられた金髪の伴天連ひとり。——が、彼は坐っているのでも立っているのでもない。馬にのっているのだ。滑稽な、下品な、恐ろしい顔をした木馬！

「伴天連キアラ——」

吟味所の板縁に坐っている与力が叫んだ。

「しぶといにもほどがあるぞ。お公儀の御慈悲にすがれ。天帝を捨てよ——」

伴天連キアラは首をふった。木馬の背はクサビみたいにするどくなっているので、身体をうごかすと、激痛がくい入り、彼は尻を浮かし、頭を木馬の頸にのめらした。沁みこむような声

が聞えた。

「——いっさい人間を助けたまわんがため、十字架の上にてながしたもう、おん主ゼズス・キリストの聖きおん血を拝みたてまつる——」

与力がなにかいおうとしたとき、うしろ座敷で、「待て」と呼んだ者がある。柳生宗矩であった。彼は膝をのり出した。

「伴天連——面をあげい」

キアラは顔をあげた。髯と垢にうずまっているが、澄んだ、燃えるような碧い眼である。

「聞け、伴天連ザヴィエルが邪宗をつたえてからすでに百年、そのあいだこりもせず御国にしのび入った妖僧ども、それにまどわされおった切支丹ども、合わせれば五万にものぼろう——」

またたいた柳生の眼が、急にきらっとひかると、

「それらはことごとく誅戮され終った。よいか——若し、お前たちの申す天帝とやらが慈悲全能の神ならば、どうして彼らを護ってやらぬぞ。全能どころか、無能無情の邪神ではないか？」

「されば」

木馬の上で、キアラは、甘い、うっとりした微笑をうかべた。

「ゴルゴタの丘で、磔におん身をかけられたゼズスにならい、彼らを天国へのぼらせんがた

めでござる。天国の快楽を享けるにたる神の子羊たちを、殉教のらんびきにかけてえらび出されようとする天帝のみこころは、これをしも宏大無辺といわずしてなんでござろうか！」

「あはは、いや、うまく逃げおったな、伴天連！」

手を打ってからからと笑ったのは宗彭沢庵。

「じゃが喃、さような痛いらんびきにかけられんでも、このわしなどはな、生きながら浄土におるようなありがたい日を送っておるわ」

「異教徒！」

キアラは叫んだ。その碧い眼に、劫火のようなものがはためき過ぎた。伴天連が仏僧を見るとき、かならず焼きただらす凄じい憎悪の炎であった。

「現世の栄華になれて、永劫の罰の恐ろしさをお前は知るまい？　血と闇と硫黄の煙のみちた底なしの地獄を、――」

あとにもさきにも、長助はこのときほど恐ろしかったことはない。彼はその一刹那、まざまざと血と硫黄の煙のうずまく闇の幻影を見た。長助ばかりではない。吟味所一帯、それこそ魔法にかけられたようにしんとなり、不世出の高僧といわれる当の沢庵禅師でさえ、こころなしか頬が蒼ざめたようであった。

伴天連キアラは、じいっと老いたる仏僧に見入って、物凄く笑った。

「お、気がつかぬか、そういえば、お前の身体には、どうやら地獄の薄闇がたちこめてみえるぞ――」

「だまれ、伴天連！」

宗門奉行の井上筑後は、狼狽して、膝をたたいて絶叫した。

「無礼者――石を吊れ、石を吊れ、天帝を捨てるまで、責めて、責めて、責めぬけい！」

木馬の両側に垂れたキアラの足に、大きな石が吊るされた。一個、二個、三個。まるで股から腹へ、胸へ、真っぷたつにひき裂かれるような責め苦に、キアラはのけぞり、吼え、そして木馬の背から腹へ、真っ赤な血の糸が、悲惨にひかりつつながれはじめた。

眼をおおい、耳をおおって、長助は吟味所から逃げ出していた。ころがるように――晩春の花と草を踏みちらして駈ける長助の耳に、遠くから、しかし梵鐘のようにはっきりと、恐ろしい、美しい伴天連キアラの祈りの声が追ってきた。

「アーメン、天帝！」

三

鬼気を蓬々と小暗いまでの草にひめて、小石川小日向の山屋敷に夏がきた。

その夏、井上家子飼いの下男長助には、ちょっとした変化があった。つまり、下男から切支丹牢の番人になったのである。

それより三年前――西暦一六四二年（寛永十九年）の初冬、九州でとらえられた伴天連の一

団があった。これは、イスパニア人ペイトロ・マルケス、イタリア人アロンゾ・アロヨー、ポルトガル人フランシスコ・カスソラ、シシリア人ジョゼフ・キアラの四人の司祭を首とする、日本人唐人の、修道士、問答教訓者たち合計十人で、みなマカオからひそかに渡りこんだ直後であった。

当時、日本は徹底的な弾圧により、それまで海をこえて潜入した百名ちかい伴天連もほとんど全滅していたので、この密航が、飛んで火に入る夏の虫よりもなお無謀なものであることは、はっきりわかっているにもかかわらず、しかもあえて彼らはやってきた。

それは、血にむせびつつ殉教してゆく日本の奉教人たちを見殺しにしてはならない、この子羊たちをなぐさめ、はげまし、みちびくのは、神の牧者としての責任であるとする覚悟と、それから、さきに背教者となり、かえって悪魔（日本政府）の弟子となったとつたえられる伴天連フェレイラに逢って、これを面罵し、その罪を痛悔させて宗門の恥をそそがなければならないとする意図からであったが、そのふたつの目的に一指もふれ得ないうちに逮捕され、翌年五月、江戸の切支丹屋敷に送られてきたものであった。

それから二年、――まったく外界と杜絶したこの山屋敷のなかで、六人は悲壮な殉教をとげ、あるいは精根つきはててころび、当時、なお秘密牢に陰獣のようにとじこめられているのは、キアラ伴天連をふくむ四人だけであった。

牢獄は、まえにいったように二十間四方の高い石塀にかこまれた一画にあって、二間に五間

の建物、その内部は、厚い檜の隔壁で、一畳敷くらいの小房にわかたれている。牢舎の前には、番人小屋と官庫があった。

このしっくい塗込めの官庫には、没収された十字架や、聖母子像や、念珠や、経典や、祭具などがおさめられているのであるが、夏のはじめ、その土蔵戸前の錠をねじきり、なかの金銀の祭具が盗みとられた事件が起こった。穏密裡の探索の結果、犯人は意外にも、当夜は非番ではあったが、牢番人のひとり、岡本三右衛門というものであるということがわかって、ただちに断罪、首は獄門橋にかけられた。――そのあとがまに長助がすえられたわけである。

――重い、けれども退屈な役目であった。檻のなかの邪宗門信者たちは、羊みたいにおとなしかった。ただ朝と夕に、ひくい、美しい祈禱の声がながれ出した。

「――天の門をひらきたもうたすかりの犠牲――敵はわれらを責むるがゆえに、おん恩寵をあたえ御合力をなしたまえ、アーメン――三位ましまし御一体のおん主、なにとぞ天国においてわれらに終りなき生命をあたえたまえ、アーメン――」

それは番所に坐っている長助の耳に、甘い、かなしい旋律となって沁みこんだ。幼い日に死んだ母親の子守唄のように。

これがあの、ゆくところ血のうずをまきおこす切支丹だろうか？　炎の礫の上でなお高笑いするという伴天連だろうか？

以前から、恐怖にみちた長助の胸に、ときどき明滅していたひとつの疑いは、夏から秋へ

——毎日々々彼らと格子越しに暮していくにつれて、しだいに驚きの波紋をひろげていった。

「また秋がきたなあ、……おお、シシリア！　エトナ！」

いちばん手に負えぬと見られているキアラ伴天連が、ある日、とぼしい外光に眼をほそめてかなしげにつぶやいたのに、長助は思わずたずねた。

「伴天連——お前の故郷は、いいところかい？」

「シシリア？　美しい……美しい国だ。いつでもレモンやオレンジの花が咲き、葡萄や無花果がみのっている。海は青く、乙女は美しい……」

薄暗いなかで、キアラは微笑した。

「チョースケ、お前恋をしたことがあるか？」

長助はあかくなって、憤然としていった。

「そんなこたア、お殿様のおゆるしがなくっちゃあ、お叱りを受けらあ！」

長助は、いまのキアラの笑顔にはじめて見るような人なつこさを感じたし、うろたえたにもかかわらず、なぜかもっと今の対話をつづけてもらいたいような気がしたが、キアラはすぐに厳しい冷たい表情にもどっていた。

「そうだ。わたしはエドへ送られてくる途中、フジを見た。わたしの国にもあれによく似た山がある。エトナ……」

「富士？　おれアまだいったことがねえんだよ」

長助はちょっときまりがわるかった。

「いっぺんいって見てえと思ってるんだが、殿様のおゆるしをいただかなきゃあ……」

キアラはじっと若い牢番を見つめた。暗い眼であった。かなしそうに彼はつぶやいた。

「可哀そうな奴隷に幸いあれ！」

「伴天連——」

長助は、囚人の憐れみをたたえた瞳にむっとして叫んだ。

「そんならお前は、そんな美しい国をすてて……なんのために遠い日本へやってきたんだ？」

「ゼズス様のみこころをつたえんがためだ。——若者、お前は、ゼズス様の御一生を知っているか？」

そしてキアラは口早に、話しはじめた。聖マリアの御受胎、厩のなかの御降誕、山上の尊い訓え、水をわたり、死者をよみがえらせ給うたおん奇蹟、最後の晩餐、聖十字架のおん最期と永遠の御復活。……

茫然としてうずくまっていた長助は、小半刻もたってから、ぎょっとして立ちあがり、真っ蒼になってあたりを見まわし、大それた伴天連に砂をなげつけると、小犬のように逃げていった。

四

晩秋。——

ある夕、長助は枯葉とともに不思議な訪問者を切支丹牢へ案内した。長崎からきたというその人物は、不器用に羽織袴をつけてはいたが、七尺ちかい大男で、額から頬にかけて物凄い火傷のひきつりがのこり——その眼は碧かった。

「かまいません、開けて下さい」

キアラの牢の前にきたとき、彼は長助にいった。

暗い床に横たわっていた伴天連キアラは、すうっと入ってきた大きな影に、半身をおこし、しゃがれた声でたずねた。

「どなたですか？」

「——沢野忠庵」

ひくい、ふるえるような声であった。キアラは、しげしげと薄暮のひかりにすかしていたが、突然、愕然ととびあがって絶叫した。

「クリストファ・フェレイラ！」

一瞬、長助がぞっとしたほどの沈黙がおちた。

やがて、凝然と、塑像のごとくうごかなかったふたつの影のうち、まずキアラの肩が大きくあえぎはじめた。

「フェレイラ！　——まさかと思っていたが、その異形の姿は……さては天帝にそむいて、悪魔に身を売ったというのはまことだな！」

「ジョゼフ・キアラ、わたしはフェレイラではない、沢野忠庵という者だ」

「だまれ、天魔の奴、地獄の虫……」

幾千万かの欺きと憎しみと蔑みの言葉がのどにつまって、キアラは口もきけない様子であった。ただ、燃える眼が、闇中にふたつの炬のごとく真っ赤にひかっていた。

背教者沢野忠庵は、しずかに笑った。

「キアラ、あなたはわたしをののしる。が、わたしのこの額のひきつりを見るがいい、これは雲仙ケ岳の熱湯をそそがれたものだ。また、このコメカミの穴を見るがいい、これは三日間逆吊りにされて、ここから鬱血をしたたらした痕だ。……」

「ひとたびころべば、その忍耐がなんになる？　たかがそれだけの苦しみ、地獄の苦患にくらべれば——フェレイラ、わたしは九州でうら若い女の殉教を見た。ながれる血のなかに、彼女はなんとつぶやいたと思う？　——妙なる紅の花よ、天上の花の雨よ。天帝よ、なおこの雨をそそがせたまえ。——」

「ジョゼフ・キアラ。わたしは、そんな苦しみに負けてころんだのではない。わたしのころんだのは——」

忠庵はだまった。ピクピクとうごめく頬、泣いているとも笑っているともつかぬ、なんとも異様な表情であった。

「あなたは、いまわたしを地獄の虫と呼んだな。そうだろう、あの踏絵というもので、奉教人を見つけ出す方法を案出したのは、このわたしだから……」

「おお、蛇！」

「しかし、キアラ、いまのわたしが幸福であると思われるか？」

「ばかな。不安とおびえの百足に胸をかみつづけられるのは、背教者の受くべき当然の罪だ」

「ところが、わたしは、いま天国にいるような気持なのだ。いや、待ちなさい、わたしは、自分が罪ふかい人間であることはよく知っている。おお！　それはあなたより、千倍もよく知っている！　それだから、わたしは毎日、うれしくて、うれしくて、浮き浮きしてしかたがないのだよ。――」

沢野忠庵は、小さな牢獄のなかをゆきつもどりつしながらいった。その頬には、いまや、はっきりと変てこな笑いがゆらめいていた。

「この心持ちを、どういおう？　――キアラ、あなたも、そうだ、あなたのいまの顔つきでは、遠からずこのわたしと同じような奇妙な精神状態におちいるにちがいない。――感情倒錯症に」

「なに？」

「感情倒錯症。つまり、感情がひっくりかえってしまうのだな。――火あぶり、磔、木馬責め、あの人間の悪智をしぼりつくした物凄い刑罰、それこそはおん主のおん苦しみにあやかるこのうえもない果報だと思い、天国へあげられる歓びの儀式だと待ちもだえているうちに――その無理がある極限に達すると、人間の感情がまったくひっくりかえってしまうのだ」

「無理？　無理ではない！　デウスは――」

「それを無理ではないとするのが、そもそも狂気のはじまりだ。よいか、わたしは最も恐怖すべきものを最も歓喜すべきものと考えつめたあげく――とうとう、悪、醜、苦痛に愛と快感を、名誉や平和や富や美食に、憎しみと不快を感じはじめたのだ。キアラ、わたしは拷問の苦しみに負けたのではない。――おお、わたしは、拷問の快感にころんだのだ！」

なんという忠庵の顔だろう。なんというヘラヘラした、いまわしい笑顔だろう。――さすがの伴天連キアラも、ぎょっと立ちすくんだまま、声もなかった。

「苦難のたのしさは、あなたも知っていよう。が、快感の恐ろしさを御存知か？」

「フェレイラ！　神罰てきめん――狂ったな！」

「狂う？　このわたしが狂人だというのか？　あはは、そうすれば、これは天国の狂気だ。この世には悪多く、悩み多く、かなしむべきこと多きがゆえに、感情は逆になった方が愉しみが多い。このいま、わたしが毎日々々味わっている無限の愉悦、荘厳きわまる不可思議な歓喜を、キアラ、同門のよしみであなたにもわけてあげたいと思って、わたしははるばる長崎からやっ

てきたのだよ。――」

伴天連キアラは憤怒に全身をふるわせた。が、彼はゆっくりと首をふった。

「要らぬ」

さげすみと嫌悪にみちた眼は、牢の入口の方をさしていた。長助はそのキアラの姿に、いままで感じたこともないほどの偉大さと、この世のものならぬ哀愁を感じた。

「あはははは」

突然、裂けたように忠庵は笑い出した。

「キアラ、わたしはうれしい。その眼！　おお、その憎しみにかがやく眼は、なんとわたしに凄じい歓びをあたえてくれることだろう！　あはは、いまに、いまに、きっとあなたにもこの歓びを――」

顔じゅう口だらけにし、全身の骨も鳴りどよむばかりに、数分間、彼は笑いつづけていた。

……

長助は、この沢野忠庵というころび切支丹が長崎奉行所の宗門改役顧問として、お公儀にとってなくてはならぬ重要な人であることは知っていたが、彼をみちびいてふたたび牢舎から出てゆきながら、なんべんも、なぜかその大きな背なかの肉に刃をつきたててやりたいような衝動に打たれた。

忠庵とわかれて門番所までもどってくると、おはるが胸を抱いて待っていた。

「長助さん！」

「なんでえ？」

「あのね、お殿様がね……」

息をはずませて、真っ赤になった。

「お殿様がなんでえ？」

おはるはくるりと背をむけて、袖で顔をおおった。やがて、小さなわくわくするような声で、

「お父ッつぁんに、――おはると長助を夫婦にせえと……」

長助は棒立ちになった。身体じゅうが血に燃えたち、夜の山屋敷がめくるめくような光にみちた。すると、突然、なぜか、このあいだの伴天連キアラのふかい声が、かすかに耳によみがえった。

「――可哀そうな奴隷に幸いあれ！」

息づまるような叫びをあげ、長助がおはるの背を抱きしめようとしたときである、表門の方から、誰やらバタバタと駈けこんできた者があった。上ずったような絶叫が、

「おういっ、たいへんだ。東海寺の沢庵さまが、さっきお亡くなりになったってよ――」

長助とおはるはぎょっとして顔を見合せていた。沢庵さまが、――沢庵さまが、――長助の耳に、その刹那、物凄いキアラの叫びが鳴りわたった。

「おお、気がつかぬか、どうやら、お前の身体には、地獄の薄闇がたちこめて見えるぞ――」

長助の顔から血の気がひいた。彼はいきなりおはるの肩をつかみ、唇をブルブルふるわせ、へんに厳かな、憑かれたような眼で、じっと見つめてささやいた。

「おはるちゃん――切支丹にならないか？」

「――なぜ？」

「なぜでも」

おはるはひろがった瞳をあげて、蒼い、ひどく真剣な長助の顔を眺めた。しばらくして、彼女は無邪気に、愛くるしく微笑んでいった。

「あなたがなるなら、あたしもなる」

五

「揺籃よりの官奴……官命によって聖獄の番人となり……官命によって夫婦となる」

伴天連キアラは、あわれむようにつぶやいたが、その眼にはほのぼのとした微笑がいっぱいであった。――背教者クリストファ・フェレイラが、奇怪な告白とも宣言ともつかぬものをのこして去った翌日のことである。

キアラは、昨夜おそく、ひとりの娘をおそるおそるつれてきて、ともに切支丹に入ることのゆるしを願った若い獄卒のことを思い出していたのだった。格子越しの、一椀の水による洗礼、それから、異教徒としての祝言よりはやく、父と子と聖霊の名によって行われた、闇のなかの、

けれども真の結婚式。……

「神の合わせたもうもの、人これをはなすべからず。アーメン――」

キアラはたのしげにつぶやきながら、薄暗い牢のなかを浮き浮きと歩きまわっている。おお、宏大無辺の天帝よ！　十字架なく、聖書なき、幾重もの石の壁の底から、神秘なる信仰の手は、無智な、愚昧な獄卒をしっかりとつかまえたではないか。これを奇蹟といわずして、なんであろう。……

いや、いまの伴天連キアラにとっては、あの、およそこの地上でもっとも憐れな、みじめな若者と思われていた牢番の顔が、その妻となる少女とともに、まるで羽翼のあるあどけない天使のようにさえ感じられるのであった。

「ここだ」

ひかりにみちた幻想にしずんでいたキアラは、はっと顔をあげた。

格子のまえに、ふたりの人間が立っていた。一方は、長助ではないが、顔見知りの番人だけれど、もうひとりは――女である。キアラは首をかしげた。

「伴天連キアラ、都合によって、当分この女と合牢をたのむぞ」

こたえるいとまもなく、格子がひらかれ、どんとつきとばされてよろめきこんできた女の身体がキアラの腕のなかにたおれこみ、ピーンと不気味な音をたてて錠が下りた。

「待ちなさい、牢番！　これは――」

叫んだが、番人は梟のようなくぐもった笑い声をたてて行ってしまった。

茫然として、えたいのしれぬ肉塊をいだいたまま立っていたキアラは、突如、それが女であることを意識すると、はっとしてひきはなした。

女は——二十四、五であろう。光線のかげんか、色白というより蒼白く、頸にひとすじほそいくびれが見えるほどふとっている。黒い、うるんだような眼は、キアラの方へ見ひらかれていたが、麻痺したような視線であった。身体は水母みたいにブルブルとふるえていた。

怖がっているのだな、——と気がついて、キアラは気の毒になり、やさしい声でいった。

「心配なさるな、ともに天帝を信ずるものです。あなたは、どこで洗礼をうけましたか？」

女は、だまって、ふるえている。

「あなたは、切支丹でしょう？」

女がかすかに首を横にふるのを見て、伴天連キアラは愕然とした。——この女は、切支丹ではない！

「それでは、それでは、どうしてこの牢へ入れられたのです？」

「御奉行さまが……」

息絶え絶えに女はこたえて、またふるえはじめた。

「御奉行サマが？　——奉行のさしずだというのですね？　しかし、なんの罪もない者を、牢に入れるということはありますまい？」

「夫が……この夏、お仕置になりました」

「お仕置——なんのとがで？」

「ここの、あのお倉からお公儀のものを……」

いつしかちかづいていたキアラは鞭にはじかれたようにとびのいていった。

その事件は、彼も牢番同士の話からきいていた。妻の歓心を買うために、あの官庫にしのび入って、聖器を盗み、鋳つぶして売りとばそうとしたけがらわしい奴、それが発覚して梟首獄門にかけられた岡本三右衛門。……

「では、お前は——あの岡本三右衛門の妻だったのか！」

はためくような絶叫に、三右衛門の妻はよろめき、へたへたとくずおれた。……

蛇でもみるような眼で、キアラは壁ぎわに立ちすくんだまま、一時間以上もじっとしていた。女はしずかに泣きはじめた。夫の罪のために、恐ろしい紅毛の切支丹伴天連とおなじ牢獄にほうりこまれたひとりの女の、かなしみにちぎれるような、やるせない泣声であった。

——奇妙なことは、このとき、キアラの頭に、思いがけなく、十何年かまえのある追憶が浮かんだことである。シシリアの白い光、葡萄とオリーブの向こうにひかる碧い地中海……そして、まだ少年であった自分の腕のなかですすり泣いた初恋の娘ルクレチアの甘い声。……

突然、彼は、自分が途方もない情感にひたっていることに気がついて、身ぶるいして顔をあげた。彼は、女に対して非常に罪ふかい心持を持っていたような気がした。

「そこは、寒い。……ここへ来なさい」

キアラはかすれた声でいった。

女はこころ細そうな眼をちらっとむけ、ながい間たってから、おずおずと傍へやってきた。キアラは、厳酷な日本の法律ではどうであるか知らないが、たとえ泥棒の妻であるにせよ、すくなくともこの女に罪はないと考えようとし、哀れと思おうとしたが、モヤモヤと鼻孔をつつむ甘ずっぱい体臭をかんずると、石みたいに身体をこわばらせ、かたくなに眼を格子の方へそらした。

なぜか、息づまりそうになって、キアラはいった。

「お前の名は？」

「お蘭」

夜がきた。闇黒の夜が、——女はいつか、キアラに身をもたせかけたまま寝息をたてていた。肩と肩とふれあった部分が、キアラにはしだいに火のように熱く感じられてきた。柔らかな焼鏝——おお、それはあの天帝のための拷問のように、苦痛と快感にみちていた！

キアラは童貞だった。少年時代の初恋はまるでお伽噺のようなものに過ぎなかった。接吻さえもしないうちに、ルクレチアは死んでしまい、彼は聖い、きびしい僧門に入ったのだ。——爾来、無数の信仰ぶかい女たちが、ひざまずいて、彼の足を抱いたことがある。彼の掌につめたい唇をつけたことがある。しかしキアラはそれを異性としてかんじたことはなかった。

けれど——

「主よ……この意味をときたまえ。悪王どもは、なぜこの女を——」

キアラは喘いだ。しかし彼は知っていた。奉行が、いや、裏切者のフェレイラが、どうしてこの女を自分とおなじ牢に放りこんだのか——それは、火にも鉄にもたじろがぬ自分を、腐った肉のきずなでからみつけて、破戒無慙の地獄へ堕すためであることを。

怒りに息があらくなると、よりかかった女の香りが、濃い乳いろの靄のように、胸いっぱいになだれこんだ。お蘭のうすくひらいた厚ぼったい唇は、闇のなかに、玉虫みたいに金緑色にひかっていた。

「見そこなったな、フェレイラ……わたしが、天の壁にしっかと手をかけておるこのわたしが、いぬの考え出した、あさましい、下劣な邪淫の罠におちると思っていたか！」

全身の皮膚を鎧のように硬直させ、憤然として身をひこうとすると、女は無意識的に身体をすりつけてきた。

「さむい、さむいの……」

しかし、彼女はねむっていた。日がくれるまで懊悩と恐怖に、意志も神経もつかれはてて、なかば失神したような眠りであった。胴と胴が相ふれた。キアラはまた焼鏝をあてられたように声なくうめいた。そこから、もろくも鎧が溶けて、快感がキアラの身体じゅうの血管をつらぬきはしった。はじめて知る、恐ろしい異性の感覚だった。

六

——夜がしらんできたとき、伴天連キアラは、ちょうど三年前マカオから日本へわたる海の上で、一夜嵐にもみぬかれた朝のように、眼がくぼみ、憔悴した顔いろだった。

が、蒼白いひかりの落ちた女の寝顔を見たとき、キアラのすりきれた心に、突如として、ある変てこな思想がひらめいた。

（ひょッとしたら、これは悪魔のなげた憎むべき餌ではなく、わたしの信仰の堅固さをためすための、聖母マリアさまの化身ではあるまいか？）

そういう測り知れぬほど深い天のおんこころみは、古来幾多の聖人達の伝説的生涯に起こらなかったことではない。……その一瞬、キアラは眼もくらむほどの歓喜に襲われた。わたしは、試練を超えた！

女はぼんやりと眼をひらいた。が、白いひかりを冷たくぎる牢格子の影にはっとして顔をうごかし、金髪の伴天連を見ると、みるみる恐怖の表情になって、じりじりと隅の方へいざっていった。

「よく眠れたかな？　お蘭サン……」

キアラは、精いっぱいの微笑をつくった。両眼は敬虔の念にかがやいていた。お蘭はこっくりして、しばらく不安げな上眼づかいでキアラを見つめていたが、やがてにっと淡く笑った。

——ようやく、この伴天連が、決して鬼でも魔でもないと納得したらしい。

——しかし、この場合キアラにとって、彼女が悪魔の罠であろうと、天帝の試みであろうと、それに処すべき態度はまったく同じであるはずであった。それを、むりにマリアの化身であると思いこもうとした心の秘密は、ある恐ろしい予感に震撼するキアラの魂が、その対象を天上にひきあげて、わたしは堕落するのではないとみずからに絶叫する、狡い、はかない、けれども苦悶にみちた深い心理のからくりではなかったか。

薄暗い、一畳敷きほどのひろさしかない牢獄のなかで、異国の僧と死刑囚の妻との生活がはじまった、そして、たちまちキアラの憐れな聖なる幻想は打ちくだかれたのだ。

それは人間である以上やむを得ない、しかしあさましくも滑稽な、一つの生理的現象からだった。排泄行為。

便器は、隅に置かれた、汚れた小桶ひとつだった。耐えに耐え、顔いろが蒼白から暗紫色に変わってから、マリアさまの化身はその上にかがみこんだ。……その間は、ふたりにとって、背なかから熱い汗がにじみでるほどの拷問だった。

けれど、そのかなしい、簡単な行為ののちには、いままで予期もしていなかった変化が、忽然としてふたりの心に生じていた。キアラの夢は崩壊し、女の眼は獣のように無恥に図々しくなった。

幻想の歓喜が狂的であっただけに、幻滅の悲哀もふかく、茫然として牢格子の傍に坐ってい

る伴天連を見て、お蘭はいった。

「そこは、お寒うございます。……こちらへいらっしゃいまし……」

軽蔑と擯斥の瞳を冷やかに投げかえしたキアラは、しかし、それから小半刻もたたないうちに、こんどは彼自身、女の前で尻をまくらなくてはならぬこととなった。……

その最も屈辱的な演技を終えてから、キアラは死面のような表情でお蘭とならんで壁にもたれかかっていた。もはやこの女に天国の荘厳をとくことができないという絶望感。そしてそれよりなお恐ろしい、阿片のけむりみたいな変てこな安堵感。

「お蘭サン……切支丹の教えを信じなされ」

突然、しぼり出す苦鳴に似た声を彼はあげた。

お蘭はキアラの顔をじっと見た。厚かましい、なれなれしい、薄笑いの瞳の奥に、ドンヨリとひかる淫らなものがあった。彼女は、ゆっくりと首を横にふった。そのむちむちした顔に、いまはまったく恐怖のいろが消えているのを見て、逆にキアラがきゅっと泣き出しそうな表情になった。

「なぜ？　なぜ！　お蘭サン、お前がここへ、このわたしとおなじ牢へ入れられたということは、ひとえに天の配剤でなくてなんであろう？　それこそ、天帝の……」

「いいえ、お殿さまのお申しつけでございます」

「さ、さればだ、天帝が憐れな悪魔を使われたのじゃ。いかにも、奉行はお前を罰したつもりであろう、が、お前は、なんの果報か、天帝に見捨てられなんだ！　き、ききなさい、おん主も申された。幸いなるかな悲しむ者、その人は慰められるべければなり……」

お蘭は無恥な、にごった、泥酔したような眼をあげた。その頬にぽうっと血がのぼった。

「お殿さまは、キアラ伴天連と夫婦になれ――さすれば牢から出してやろう――さもなければ命はないぞ、と――」

「た、たわけっ」

キアラはのどもやぶれるような絶叫をあげて飛びあがり、牢格子に背をこすりつけた。

「神よ、ゆるしたまえ！　この女は、おのれの為すことを知らないのでございます――女っき、聞け、切支丹の愛するおん方はな、父よりも母よりもただおん主御一人じゃわ。ま、まして異教徒の女と――十字架を盗んだけがらわしい盗賊の妻と――ば、ばかな！」

「わたくしと、夫婦になって下されませ」

お蘭はかわいた唇をなめ、ゴックリと唾をのみこみ、ねばッこくくりかえした。

キアラに対する最初の盲目的な戦慄が、ともかくも一夜をともにしたことと、それから同じ人間的なあさましい姿態を見せあったことで、ひき潮のようにくずれ去ると同時に、主君の厳命が絶対的に彼女の胸を満たしてきたのにちがいなかったが、それ以外に、この若い、淫蕩な天性をもった寡婦の肉体をまぼろしの蜜のようにぬらすものがあった。

「もしっ、どうぞ、わたくしと……」

いざり寄ってくる女を、キアラ伴天連は蛇にでもまきつかれたような叫びをあげてつきとばした。

お蘭は仰むけにころがり、胸を波うたせながら、薄眼をあけてキアラを見、うっすらと不敵に笑い、またくねくねと這い寄ってきた。

「もしっ」

創世記以来の、奇怪な、妖しい鬼ごっこであった。裾をみだし、乳房もあらわにいどみかかる女に、男は悲鳴をあげて逃げまわった。キアラは恐ろしかった。石抱き、海老責め、つるし責め、あらゆる酸鼻な拷問の経験は外部の痛みにすぎず、これは内部を震撼させる恐怖だった。氷のように冷たい黄昏がきた。が、せまい牢獄のなかは、臭い熱い、むんむんする沼のようだった。それは死闘の果てにひっくりかえった糞桶と、もみあうふたつの肉体からながれ出した汗のためだった。——いやふたりはすでにまる裸になって、ただ豚みたいにころがって、はッはッと喘いでいるばかりだった。

「おお、天帝！　天帝！」

キアラは息絶え絶えにうめいた。が、それは救いを呼ぶ声ではなく、恐怖の悲鳴だった。男のうめきを聞いて、のろのろとお蘭はまたうごき出した。

「どうぞ……伴天連さま……」

蒼白くふとった四肢がからみついた。汗にヌルヌルした乳房がべったりとのしかかった。腐

った果物みたいな息が、熱いふいごのように彼の顔にかかった。

「ああ——」

キアラはもはや抵抗の気力をうしなった。女に対してではない——自分の内部から燃えあがるものにだ。下腹あたりは灼けて、そこから黒煙がたちのぼるようだった。が、この苦痛にまじるうずくような快美感はなんであろう？　恐ろしい、それが恐ろしい！　マラリアに襲われたように陥没した眼で、キアラはうずく黒煙の彼方に、怒れる魔神にも似た天帝の幻影を見た。

「おゆるし下さい……おさげすみ下さい……いえ、お見捨て下さい！　わたしは……わたしは……あなたの鞋をとるにも足らぬ人間でございます！　いえ、蛇、蝮の裔でございます！」

「——背くか、キアラ、さらば永劫の地獄に堕ちよ！」

雷のような声が耳たぶにはためき鳴った。彼は全身が真っぷたつにひき裂かれたような激痛をかんじた。天帝の声だ！

キアラは恐怖に打ち倒れた。牢獄のなかに満ちるまぼろしの黒煙の彼方へ、爛と煮えただれる天帝の眼がうすれ、かわりに真っ白な熱い巨大な肉体が乱舞した。

「蛇よ！　蝮の裔よ！」

憎悪と苦悶の号泣をあげながら、歓喜と快感に歯ぎしりしながら、伴天連キアラはその白い肉塊をなぐりつけ、噛みつき、抱きしめて、糞汁のなかをころがりまわっていた。

七

——キアラ一人、女一人牢に入れ置き候えば、これは牢屋にて女とむすび候てころび申し候につき、山屋敷一統に触れ候て、伴天連の祝言珍しく候間見候えの由申しつけ、夫婦盃を取りかわさせ、ながく召寄置候。——

査妖余録という書に、こう簡単にかきとどめられているこのころび伴天連は、しかしその心理において、実に想像を絶した奇々怪々なる症状に陥ったのだ。

——けれど、人間の精神というものは、その持主が決して狂人ではないにもかかわらず、ある場合、しばしば常識をもってしては解することのできない不可思議なる現象をしめす。殉教者の魂がそうである。宗教、主義、その信奉者は、迫害されればされるほど、弾圧されればされるほど絶望的な歓喜の嵐にとり憑かれる。

キアラはこの異常心理の極限に追いつめられて、さらにはずれて、その魂の天秤が逆転してしまったのだ。

キアラ自身がこのことに気がついたのは、その祝言の夜だった。

もと、岡本三右衛門にあてがわれていた山屋敷のなかの長屋で、わいわいとひしめきあう見物人の注視をあびながら、綿帽子をまぶかにかぶった花嫁との三々九度——妙な恰好に麻裃をつけさせられた金髪のキアラは、まったく白痴のようだった。

孫子の代までの語りぐさと、わいわい騒ぎながら仲間や下男や女房達が去り、新妻が熱っぽくそっと手をにぎって別室にしりぞいたあと、なお悪夢を見ているような姿で坐っているキアラの耳に、さしせまる息をおさえたささやきがきこえた。

「伴天連さま……」

長助であった。素朴な眼が、疑惑と怒りにキラキラひかっている。暗い土間に、ションボリ立ったおはるは、かなしそうにこちらを見ていた。

「あなたは、まさか……まさか、天帝をお捨てになったのではございますまいね？」

「捨てる！　……わしが天帝を？」

茫然と答えて、キアラはじっと死魚に似た瞳を見はっていた。深い深い霧を——いや、その奥にかがやいている恐ろしい森厳な眼を。

「では、ではこの祝言はなんでございます？　それとも、いったんお公儀をたばかって、奉教人達をお救いになろうとでもいうふかいお心からのことでございますか？　そうでございましょうね？」

いちずに思いつめたような声を、キアラは聞いているのか——魂の霧ははれかかっていた。が——おお、そこに現れてきた世界の形相はなんという変てこな恐ろしいものであったか！

「おゆるし下さりませ、伴天連さま、おれは、もしやあなたがお蘭にひかされてころばれたのではあるまいかと……あれは、淫らな女でございます……」

「あれは、恐ろしい女だ！」

キアラは身ぶるいして、かすれた声でうめいた。

そうだった！　わたしはあの女の蠱惑にころんだのではない。快感の恐怖に――あの下卑た、獣めいた誘惑に、魂に叛逆して肉体をどよもす快美感、その恐ろしさに――あの怒りに燃える天帝の眼の恐ろしさから逃げよう、その眼のとどかぬ地獄のどん底までももぐりこもうと半狂乱になったのだ！

霧ははれた。キアラはやっと自分が何をしたか、今宵のこのおかしな儀式はなんであったかを了解した。――おお、背教者！　邪淫者！　ユダの末裔！

が、これはどうしたことだ、この心を春の波のようにわたってゆく歓ばしさは！

怒れる天帝の眼は、極北であおぐオーロラのような歓喜を、あたえてくれるではないか。

……

「やりおったな、フェレイラ！」

絶叫し、躍りあがった伴天連に、長助とおはるはどぎもをぬかれた。ふたりは彼が発狂したのだと思った。キアラの蝙蝠みたいに大きくひろげた両腕は、しかし親愛なる友に呼びかける姿勢であり、そのかがやく両眼は、この世ながらの天国に随喜する涙にあふれていた。

「伴天連さま――どうなされました？」

恐怖に蒼ざめて立ちすくむ若者とその可憐な女房をふりかえって、キアラは顔じゅう口だらけにして笑い出した。

「チョースケ、オハル、わたしはうれしい。その眼！　その怯えた眼はなんとわたしに奇妙な歓びをあたえてくれることだろう！　あはは、あはははは！」

岡本三右衛門。

悲壮をきわめる日本切支丹の殉教史のなかに、たったふたつの醜怪な腫物のごとく存在した恐るべきふたりの背教者、曾ては信徒たちの尊い炬火でありながら、後にいたって幕府の手先となり、宗門狩りにいとうべき毒手を徹底的にふるった長崎の沢野忠庵と江戸の岡本三右衛門。この三右衛門こそ、盗みをはたらいて獄門にかけられた初代から、肉慾的な妻とともにその名を受け嗣いだ、ジョゼフ・キアラの後身だったのである。

彼は全国から没収されてくる聖具を鑑定した。当時潜伏していた信徒は、聖母子像のかわりに雪中の常盤御前をえがいたものを礼拝したり、変形十字架を秘めていたり、十五玄義図の代用として将棋の駒に似たお札をつかったりして、官憲の眼をのがれようとしていたからである。また彼は宗門糺明の論点を書いて井上筑後守にささげた。これは後々まで、代々の宗門奉行の職務必携となったものであり、さらにずっと後に、かの有名な伴天連ヨハン・シドウチがこの山屋敷へ送りこまれたとき、新井白石がその審問の第一の参考書としてつかったものである。

岡本三右衛門の具陳した転宗法の特徴は、奉教人を殉教の英雄にしないことだった。信徒を動物に――或いは動物以下にすることだった。排泄という行為を他人に見られることが、どれ

ほど荘厳な信念をゆるがせるか、それは自分の体験で知らされたことであるが、彼はさらにそれを悪質な、むざんな拷問へすすめたのだった。

その例を二、三あげると、切支丹娘を裸にして、衆人環視のうちに四ツン這いに這いまわらせたり、牡馬をもって犯させたり、はなはだしきは父と娘、母と息子を、相姦せしめようとしたりしたのである。

三右衛門が脳中にえがく血みどろの幻想は、かたっぱしから実現された。彼が外へ出るときといえば、その地獄絵巻を見物に、吟味所へゆく場合くらいのもので、山屋敷に美しい春がおとずれ、眩しい夏がやってきても、彼は花からも光からも蜘蛛みたいに身をかくそうとした。が、それは良心に痛みいる犯罪者の心からではない。うるわしいもの、かがやかしいもの——それに心おどらせる普通人とは、彼の感情がまったく逆転しているからだった。

夜こそは彼の世界だ。

毎夜々々、悪魔の著作にふけりながら、三右衛門はお蘭を愛撫した。愛撫？　いや、その光景はひるまの吟味所でくりひろげられる地獄図絵よりも、もっと凄じいものだったかもしれない。

「ああっ——なんて野郎だろう！」

お蘭は肩で息をつきながら立ちあがった。秋の夜だというのに、真っ裸だ。豚みたいにふとった胸肉からひとすじ血がながれている。情痴きわまって、それは夫が噛んだものだった。

「ほんとうにお前さんは、伴天連のころ、人間の生血を吸ったんだろう？　だからこう精がつよいんだよ——女殺しっ——」

しかしお蘭の瞳には、怯えといっしょに、ただれるような陶酔のひかりがよどんでいた。おろかしく笑いながら、羽織をひっかけ、彼女は厠へ立っていった。

三右衛門も金髪をふりみだしたまま笑っている。

この笑いこそ真に恐るべきものである。彼はかつて初恋のルクレチアを愛したような意味で、お蘭を愛しているのではない。ほんとうをいうと妻が恐いのだ。おぞましいのだ。その甘臭い息と汗の匂い、ぶよぶよした腹の感触、それは身の毛のよだつほどいとわしいのだ。その吐気をもよおすような嫌悪感から、黒煙のごとくたちのぼる快感の法悦。——

三右衛門は、行燈の灯に、机のうえに書きかけのままのっている拷問の新案覚え書をながめ、歓喜に舌なめずりし、身ぶるいしてうめいた。

「いや、いや、まだあるぞ、まだおれを、魂のどん底からよろこばせてくれるものが、この世にはあるはずだぞ——」

このとき、厠の方で、けたたましいお蘭の叫びがきこえた。

「誰？　——そこにいるのはだれ？」

八

くりかえしていうが、背教者岡本三右衛門の心理こそ、世にも妖しい、不可思議きわまるものだった。

ふつう、愛とは対象と一体になろうとするときにおこる情念であり、憎しみとは対象からはなれたくてならない場合に燃える感情であるが、彼は、その点でまったく倒錯していた。つまり、ぎゃっと悲鳴をあげて逃げ出したいものに吸引されるのだ。そのいやらしい対象に吸いついていることに、魔酒のごとき快感をおぼえるのだ。

罪ふかき者よ！　この自らにさけぶ声が、以前の厳かではあるが一抹のにがさをふくんでいた司祭のころとちがって、なんという純粋などよめくような歓びをあたえてくれることだろうか。

蛇よ、蝮よ、悪魔の子よ！　その身ぶるいするほど甘美な言葉、彼はその声のしぶきに打たれて、恍惚となった。無数の奉教人を血の池にのたうちまわらせて、彼らの呪いの叫びをきくとき、三右衛門はほとんど天国にいるような法悦にひたっているのだった。

「もっと！　もっと！　もっと！」

彼は身もだえした。何かある、何かある、まだ足りぬ、どこか不満な、うつろな穴があいている。もっと充実した最高の歓喜が――三右衛門は貪婪なひとみに真青な焔を燃えたたせた。

「お前さん、たいへんだよ――」

あわただしくお蘭が入ってきた。

「いま、裏の垣根の外に、黒い影がひとつ立っていたのさ。だれ？　と呼んだら、急に逃げていっちまったけど、あとに、星あかりにピカリとひかるものが落ちているので、いってみたら、これさ――」

わなわなふるえる掌にのっているのは、一個の十字架だった。

三右衛門は火花に打たれたようにとびあがった。

「おどろいたろ？　まあ、お屋敷のなかに切支丹がいるんだよ。明日にも訴え出てごらんな、磔、火あぶり、そんなことですむものか――なんて大それた、恐ろしい――女のくせに！」

三右衛門はとび出した眼で、じっと十字架を見つめたまま、かすれた声でいった。

「女？　――誰じゃ」

「おはる――いえ、はっきり見たわけじゃないんだけど、たしかにおはるだったわ。けれど、おはるは、切支丹牢の番人の女房じゃないか。なんてことだろう！」

「長助、おはる……」

十字架に凝然とした視線をそそいだまま、三右衛門はつぶやいた。

そうだ。長助、おはる、彼らはいつもおれの眼からコソコソ逃げかくれした。たまにゆきあうと、まるで蛇にみいられた蛙みたいにおののいていた。あの恐怖にみちた眼は、どんなにお

れをよろこばせたろう。……

突然、三右衛門は野獣のような叫びをあげて十字架にとびかかった。

「お前さん！　どうしたの！」

「ああ気持がよい——焼火箸をあてたような！」

彼は片手で十字架をピッタリ裸の胸にあてがった。額は嵐の空よりも黒み、眼は硫黄の炎のごとくかがやいていた。

あっと思うまもなく、お蘭は抱きこまれた。十字架をふたつの胸にはさんで、ふたりはもつれあってころがっていた。

「お前さん……お前さん」

お蘭はあまい鼻声をあげたが、すぐに犬みたいに真っ赤な舌を出してあえぎはじめた。

祝言以来、このときほど三右衛門が燃えたことはなかったろう。重なったふたつの胸のあいだで、淫らな汗にぬれて鳴りきしむ聖・十字架！　なんという冒瀆、なんという恐ろしい歓喜、三右衛門はうわごとのように、お蘭の耳たぶに噛みついて叫んでいた。

「この世界に祝福あれ！　お蘭……お蘭、あすは面白いものを見せてやるぞ。長助、おはる、あれをつかまえてやる。切支丹だ。あははは、おれがひきずりこんだ邪宗門信者だ！　痩せてきたろう？　ふたりともこの一年、生きた心地はなかったろう。だが……もう最後だ。あの、ふふ、天使のようなふたりを、血と炎のなかにのた打ちまわらせてやる！」

灯がゆらいだ。

戸がひらいて、誰か入ってきたのを知ったのは、三右衛門が吸いついたお蘭の柘榴のような唇から唇をはなしたときだった。

「長助か？」

彼は汗にひかる顔をあげた。

ぶるぶるっと身体がふるえたのは、黙然と枕もとに立っている長助の死相におそれたのではなく、その刹那、なんともいえない快感がぞっと背すじをはしったからで、恬然としてそのままの姿勢である。

「あははは、聞いておったか？」

「岡本さま。おねがいでございます。……おはる、あれだけはゆるしてやっておくんなさい。訴えねえで下せえ……」

しぼるような声だった。長助の眼はうわずって、獣も面をそむけるふたりの姿も見えないようだった。

「と、とんでもねえことをしてくれやがった。今、おはるから聞いて、おれ、胆をつぶしてとんできたんだ。十字架を、落とす場所にことをかいて……」

「宗門取締の役人の傍にか？」

三右衛門は毒々しく笑った。

「あはは、だめだ、長助、もうだめだ。おれは、お前たちふたりを木馬にのせて天国へやることにきめた。早く帰れ、こん夜一夜は女房にのって、この世の天国へゆくがいい……」

「十字架を返して下せえ……」

長助は低くくりかえした。眼がすわっている。背後にまわした片手がガクガクふるえだした。

「さもねえと、おれはお前さまを――」

「どうする？　その背にかくしておるのは、刀か？」

びっくりして口もきけなくなっていたお蘭は、三右衛門の腕のなかでたまぎるような悲鳴をあげて、もがきはじめた。が、三右衛門ははなさなかった。――いや、はなせなかったのだ。頭上に長助、胸の下にお蘭、恐怖にひンまがったふたつの顔、蜜につつまれた蜘蛛みたいに、彼は凄じい歓びに膠着してしまった。

「人殺しの罪を犯すか、長助、人を殺すなかれ、第五番のおん掟を忘れたか、あはははは」

鼠をじゃらす猫のように、眼をほそめ、のどを鳴らす三右衛門の嘲笑は、このとき、透きとおるようなひとつの叫びに断ちきられた。

「ええ、殺してもいいわ」

苦悶の眼をふりむけた長助は、愕然として叫んだ。

「おはる！」

「何をしているの、お前さん、あたし十字架を落としてったのは、わざと置いていったのよ」

おはるは、童女みたいに愛くるしく笑った。

「この一年、あの宗門のひとたちの殉教をみて、どんなにお前さんが苦しんだか……それを見ながら、知らない顔で、切支丹牢の番人をしてることを、どんなにお前さんが恥ずかしがってたか……あたし、知ってたわ、名乗りでよう、あのひとたちのお仲間に入ろうと思いながら、あたしのためにお前さんが黙ってきたこと……あたし、知ってるわ……」

「おはる！」

長助の眼には、みるみる涙が浮かびあがった。

「だけど、おれは――」

「わかってるわ。どうしてあたしを天国へつれていくのいやがるの？　でも、ここに、この家のまえに十字架を置いていけば、もういいわね。クヨクヨ考えることないわ。いっしょに天国へゆけるわね――」

あどけない、無邪気な、唄うような声だった。彼女は甘えるように微笑んでいる。が、その可愛い姿には、まるで正義の女神テミスにも似た厳粛な、壮絶なものがあった。

「おはる！」

おぼえず知らず三人はおののいていた。長助は感動のわななきであり、お蘭は恐怖の戦慄であり、そして三右衛門は快感の身ぶるいだった。――迫りくる幸福の予感、それはなんだ？

おはるはまた可憐な声で笑った。

「そのひとたち、どッちでもいいけど、殺したっていいと思うわ、天国へいったら、あたしおわびしましょう。天帝（デウス）さま、きっと、ゆるして下すってよ――」

「おうっ――」

鞭みたいなうずき、ふりかえると長助は、なんのためらいもなく、足もとに重なった裸の男女に、ぷッつりと脇差をつき立てた。

恐ろしい絶叫――巨大な昆虫ピンに刺しとめられた二匹の芋虫！

その一瞬、お蘭の火のような舌が、ペロンと三右衛門の鼻の頭をなめた。彼女のぶよぶよした腹は波を打った。四肢が蛇みたいにうねった。腹から背へつき立てられた刀を中心に、お蘭の白い肉体は赤い虹をひいて風車のようにまわった。

が、三右衛門の鎖のごとくまきついた腕はまだはなさない――背から腹へつらぬきとおった熱鉄の快感！

「これだっ、これだっ、待っていたのは、これだっ」

女の苦鳴を嵐のように覆う歓喜の咆哮（ほうこう）だった。

めくるめく眼に三右衛門は何を見ていたか。この世のものならぬ白光にみちた天国（パライソ）の花のうえをころがりまわっているような大法悦、あふれちる血潮の音は、荘厳きわまる山海嘯（つなみ）のような天楽のひびきとも聞えた。彼は片手に胸の十字架をつかんで、高く高く空にかざした。

「ありがたや、恩寵（ガラサ）満ちみちたもう天帝！」

感謝と満足にかすむ断末魔の眼で、三右衛門は若いふたりの殺人者をふりあおいだ。

ふたりはこちらを見てもいなかった。長助とおはるは、血にぬれた手をしッかりとにぎりあって微笑していた。

「さあ、ゆこう、お奉行さまのところへ――」

そして、まるで天国へ舞いのぼる二人の天使のように、頭上に黄金の輪をえがき、銀河の下へ嬉々（きき）として走り出ていった。

売色使徒行伝

一

近江源三郎がつれて来たその娘の美しさを、最初いちどは漆間春蔵は眼の錯覚だろうと思った。

なにしろ季節は初冬のころで、暗い空には枯葉が乱れ飛んでいたし、場所は、春でさえ、この森には鳥も来ないのではないかと思われる切支丹屋敷である。名さえ獄門橋と名づけられた小さな木橋を、源三郎がその娘の手をひいて渡り、高い石段を上って来たとき、偶然、切支丹の同心漆間春蔵は表門のところに立っていた。

「やあ、これは好都合だった」

と、源三郎はいった。

「おぬしに用事があったのだ」

「どうしたのだ」

春蔵は象みたいに細い眼をまるくして、その娘を眺めながらいった。貧しげな身なりをしているのに、その娘があまりにも美しかったからだ。

「ここに切支丹乙見保之丞の妻がいるだろう」

源三郎は声を低くしていった。

「これは、その娘だ」

「ほ？　では、この娘も？」

それにしては縛られてもいないし、と、いよいよ不審そうに見まもる春蔵に、源三郎は首をふった。

「ちがう。それなら去年、いっしょに捕えてここに送り込んでいたところだ。この娘は、非人に落とされていたのだが――」

清朗な源三郎のひたいに、一瞬暗い翳が掠め過ぎたようであった。彼は邪宗門担当の町奉行所同心で、若いがやりてで、去年の春、乙見保之丞という浪人夫婦の切支丹を検挙したのはまさに彼なのであった。

「思うところあって、こんど非人から返し、この山屋敷で下女として使ってもらうことになった。――すでにお奉行さまのお許しを得てある。どうか、そのようにとりはからってくれ」

春蔵はもういちど娘を見た。よくわからないが、十七、八ではないかと思われる。娘はこの問答をひとごとみたいに――いや、何も聞えないように無表情に聞いていた。年がよくわからないというのは、蒼白く痩せていて、もっと幼い少女みたいにも見えるし、またどういうわけ

か二十歳をずっと過ぎた女のようにも見えたからだ。

「母親が、牢の中におるが、よいのか」

「だから、これはもう恐ろしい世間に出ようとはすまい」

源三郎は、ちょっと妙なことをいった。というのは、まるでこの娘を保護するように聞えたからだが、すぐに春蔵は、それはこの娘がこれまで非人の世界へ投げ込まれていたからだろうと了解した。

「ただし、むろん母親から改めて切支丹の説教など聞かないように注意してくれ。……母親はまだ転ばぬか？」

「ほかの切支丹と同様だ」

棄教しないという意味である。春蔵は聞いた。

「何という名かな」

「お鳥という」

「お鳥。……ともかく、まず入るがいい」

案内のために、漆間春蔵は先に立った。

大目付で宗門奉行であった井上筑後守の下屋敷が、小日向（こびなた）茗荷谷のこの切支丹屋敷――一名山屋敷ともいう――となったのは正保年間のことだから、それからもう三十年以上もたつ。そのために改造され、作られた牢獄、吟味所、番所、押収祭具などを入れた蔵などの建物は古び、

森に包まれた四千坪の屋敷には、むしろ荒廃の気さえ漂っている。

島原の乱のあった年から数えれば四十年にもなる。それなのに、まだ切支丹がいるのだ。

日本で切支丹がみな殺しになり、来朝すればその運命はまぬがれぬと承知しているはずなのに、島原の乱後もなお潜入して来た十数人の伴天連（バテレン）があった。いまの町奉行北条安房守（あわのかみ）の先代の安房守も、その宗門改（あらため）記録に驚異をこめて書き残している。「伴天連渡り候えば、或いは火あぶり、或いはつるし、或いは斬罪に仰せつけられ候ゆえ、伴天連たびたび日本へ渡り申し候」すなわち、彼らは殉教のために渡来したのである。それらは望み通りみな殺されたが、げんにまだ一人の伴天連がこの山屋敷に生存している。ジョゼフ・キアラというシシリア生れの伴天連で、寛永二十年潜入して捕えられてからすでに三十五年、もうたしか七十五歳を越えてなおここに幽閉されているのだ。そしてまた彼らに応えるがごとく、数年ごとに魔術のように、数人、十数人の日本人の邪教徒が湧き出し、発見されて幕府を驚かせた。それらの生残りがまだ二十何人かこの山屋敷の牢獄に呻吟している。

従って、ここには少数ながら与力もおり、同心もいた。そして彼らや囚人に食事を出したり掃除をしたりする下男や下女もいた。

同心漆間春蔵は、町同心近江源三郎の依頼通り、お鳥という娘を下女に斡旋した。

お鳥の母親は切支丹として牢にいる。同じとき捕えられた父親の乙見保之丞という浪人はこの春に病死した。ほんとうの原因は拷問による傷がもとであった。

お鳥を母親に近づけるな、という意味の注意を近江源三郎は与えたが、漆間春蔵はこだわりもなく二人を逢わせた。そして、その結果、意外な光景を見て彼はくびをかしげた。

「あっ、お鳥ではないかえ。お鳥……お鳥！」

ジュリアお路という切支丹名を持つ母親は、一目見るなり狂気のように牢格子にすがりついて声をしぼったが、お鳥は答えず、牢の中に食べ物と水を置いただけでスタスタと出て来た。白蠟でつくられた能面のような表情であった。

春蔵は、はじめこの娘を馬鹿ではないかと思った。少なくとも、精神異常を来しているのではないかと疑った。が、ふだんの下女としての炊事や掃除の勤めぶりを見ていると、決して馬鹿でも狂人でもない。それどころか、ほかの下女下男とはくらべものにならないほど利口であることがやがてわかった。

「はてな？」

彼はようやくこのお鳥に、改めて好奇心を持ち出した。が、何を聞こうにも、お鳥は「はい」「いいえ」以外の口はほとんどきかず、依然として無表情であった。

何にしても、彼女は美しい。一目見て、ぱっと眼に咲く美しさではなく、繰返してじっと眺めいれば眺めいるほど玻璃燈籠のように透明に描き出されて来る美しさだ。

さて、はじめに春蔵がお鳥の美しさを錯覚ではないかと思ったという意味だが、彼はその最初の一瞥からこの娘に、ただならぬ肉感美を感じたのである。それが、よく見ると、顔こそ彫

ふかく端麗だが、どこか寂しい翳があり、ましてやその衣服や髪に娘らしい色彩や飾りが何一つあるわけではない。よくいって、それは清浄美であった。にもかかわらず、彼はそこにむしろ淫美ともいうべき第一印象を受け、はてこれはこの山屋敷の荒涼さを背景として見たためかその日の陰鬱な天候のゆえか、あるいは自分がどうかしていたのか、と疑ったのだ。

やがて彼は、それが自分の錯覚ではなかったことを知った。——

二

翌年の春になって、或る雨の日、山屋敷にやって来た町同心近江源三郎に春蔵は話した。

「あのお鳥だがな、近江」

「うむ」

「妙なことをきくが、あれは処女か。処女ではあるまい」

「なぜそんなことをきく」

「処女でなければ、ひとつ験してみたいことがある」

「どんなことを」

「あれを一つ、切支丹どもを転ばせる道具に使ってはどうじゃろう、と思うてな」

「とは？」

「ここにいま捕えられておる切支丹は、男十七人、女五人おるが、一人として転ぼうとはせぬ。

されば北条安房守さまからは、いくどか、もはや見込みなし、処分をしてしまえという御下知のあったことはおぬしも知っておる通りだ。それをわしは、今しばらく、必ず棄教させてごらんにいれると、及ばずながら精一杯くいとめておる」

そのことについてはふだんから、「おぬしの気ごころが知れぬ。物好きなやつだ」と憮然としていっていた有能な捜査官たる近江源三郎であったが、この日はなぜか意見をのべず、ただ黙って春蔵の顔を見まもっているだけであった。

「それには、伴天連キアラの力がある。あれが生きておるかぎり、ここに追い込まれた切支丹はかえって鼓舞されるばかりだ。そのキアラも幾らなんでももう長くはあるまい、と思っていたが、わしもこのごろは実は途方にくれておった。さればとて、もう三十五年もここに暮しておるキアラを突如処刑するという特別のきっかけもないしなあ。——そこに、こんどあの娘が来た」

「ふむ」

「牢内の切支丹どもに——もっとも、男囚にかぎるが——変化が起こった」

「どんな？」

「一言では説明出来ないが……とにかくあれを使えばきゃつら転びはせぬか、と思われる徴候だ。ここにはほかに下働きの女が何人かいるのだが、こんな現象ははじめてだ」

「あれを使うとは、どう使うのだ？」

「結論をいうと、転びさえしたら、あの娘を抱かしてやろう、ということだがな」

「——ば、ばかっ」

近江源三郎はふいにこぶしをあげて、春蔵の横っつらをなぐった。大きな音がしたが、漆間春蔵は自若として、番所の上り框（がまち）に腰を下ろしている。番所にいるのは、そのとき二人だけであった。源三郎は、すぐには次の言葉が見つからないように荒い息をしていたが、

「やはり、おまえはそんなやつであったか。おまえの思いつきそうなことだ」

と、罵った。春蔵はうなずいた。この男は、ふだんからめったに怒ったことがない。

「そうかも知れぬ。わしでなくては出ぬ智慧かも知れぬなあ」

その笑った象のような眼が、自分の異常な昂奮の内側を見すかしているような気がして、源三郎はようやくそれに対応すべき言葉を見つけた。

「あの切支丹ども……そのようなことまでして棄教させる必要はない。みな斬ってしまえ」

「それでは、ほんとうの解決にはならぬ。公儀のほうの解決にはなるかも知れぬが、切支丹どもの魂の解決にはならぬ。——いや、殉教というきゃつらにとってのよろこばしい解決になるかも知れぬが、そうなるとこんどはこちらの解決にならぬ。そこで、わしのいま提案した法によると、双方ともにめでたく解決となる」

「女で転ぶことが……切支丹にとって解決となるのか」

「なる。きゃつらは、お鳥のゆくたびに、牢格子にしがみついて、名状すべからざる眼つき、

息づかいをしておる」

春蔵は笑った。

「だから、あれを抱かしてやれば、きゃつらのいう天国（パライソ）の法悦を味わい、さっぱり切支丹の憑きものが落ちるじゃろうと、こうわしは見込んだわけだ」

「では、お鳥はどうなるのだ？」

ふたたびこみあげて来た激情を禁じ得ないもののように源三郎はさけんだ。

「そんなたわけた道具に使おうとして、おれはあの娘をこの山屋敷へつれて来たわけではない――」

「ところがな」

漆間春蔵は源三郎の眼をのぞきこむようにして、しずかにいった。

「お鳥も、実はそれで救われるのではないか？」

「な、なに？」

「あの娘は、変だよ。冷たくて、無反応だ。……それをわしは、あれも憑きものがしておると見る。わしのカンだがね、それを、男を与えることで寛解（かんかい）させることが出来るような気がする――」

近江源三郎は真っ蒼な顔色をしていた。それも異常としか思われないが、こんなことを春蔵にいわれて、改めて驚く表情を見せなかったのはさらに異常であった。

「そうか」

数分たって、彼は肩を落としてつぶやいた。

「おぬしは、そう見たか。――それでは言おう。あの娘には、こういうことがあったのだ……」

そして、近江源三郎は語り出した。

二年前、彼は江戸にひそむ切支丹浪人乙見保之丞夫婦を検挙した。その手柄話は同種の事件における彼のほかの例と大同小異だからここでは略するとして、ただこのとき、それまでとは変わったことがあった。まだしかとした証拠がつかめないうちに、乙見夫婦が、娘をお許し下さるならば白状いたしましょうといい、そういう個人的約束の上で、隠していた十字架や邪宗門の経典をさし出したのだ。その結果、夫婦はこの山屋敷へ送り込まれ、そしてそのとき十七歳であった娘のお鳥は非人に下げられた。非人とは、この時代におかれた最下級の階級で乞食を職とする。大半は世襲だが、その中に犯罪の刑罰としてこの階級に落とされるものがある。お鳥はこの場合で、同心たる源三郎としては、彼女を救うためにはこれが精一杯の処置であった。

ただ、年少でもあり、破廉恥の罪を犯したわけでもないから、二、三年たってほとぼりがしずまればもとの良民の世界に戻してやると約束し、かつ預けた非人の小屋頭にもそういっておいたはずなのだが、事の性質上、切支丹の子であるということも秘し、従ってその口上があい

まいであったためよく徹底しなかったのか、去年の秋、はからずもその非人小屋をのぞいてみて、彼は何ともショッキングな光景を目撃する破目になった。

なんとこの美少女は、汚猥をきわめた非人小屋の中で、一糸まとわぬ裸体とされ、垢だらけの、毛むくじゃらの十数人の非人たちによって盛大に輪姦されつつあったのである。

彼は躍り込み、非人たちを蹴散らして少女を救った。そして、こういう行為が始まったのは、彼がこの娘を預けて間もなくのことで、しかもそれが連日連夜の行為であったことを知った。それを聞いていかに源三郎が憤激したかは、そのとき彼の十手に打ちすえられて、非人の大半が半死半生の目にあったことでもわかる。

「父母がつかまって曳かれてゆくとき、あれは泣いた。それはふつうの——いや、その様子はふつう以上に烈しい感情を持つ娘にまぎれもなかった。ところが、それをおれがここへつれて来たときは……あんなふうになっていた——」

びんの毛もそそけ立ったような源三郎の顔を見ながら、春蔵も、お鳥がここでその母親に再会したときは涙おろか一語すら投げなかった光景を頭によみがえらせていた。

「ともあれ、そういうわけで、おれはあの娘をここへつれて来たのだ。それなのに……おぬしは、さらに切支丹の男どもに犯させろという」

近江源三郎の眼に、涙さえ——おそらくそれは悲憤の涙とでも形容すべきものであったろう——浮かんでいるのを見て、ものに動ぜぬ風格のある漆間春蔵も殴られたように頭をかかえた。

「そうか。そういうわけであったか。参った。おれの善男善女済度の法は撤回することにしよう」

三

近江源三郎と漆間春蔵は親友といっていい間柄であった。少なくともウマが合う仲であった。実をいうと、もとは漆間も町奉行所同心であったのだ。それが或る事情で切支丹屋敷同心に左遷されたのだが、同じ町奉行所にいたころから、この二人が意気相投じているのを見て、周囲の人々はみなふしぎがった。

近江はスラリとした美男で、どこか憂愁の翳があった。そして、きまじめで、泣くほうも怒るほうも情熱的な性格だ。漆間はずんぐりむっくりと肥って、血色がよく、いつも冗談ばかりいって、げらげら笑っている。

源三郎はストイックであったが、春蔵はエピキュリアンであった。前者はよろしいとして、町奉行所に職を奉じ、しかも一介の同心で快楽家というのは問題だ。——果然、漆間春蔵が左遷されたのもそれが原因だ。もっとも、べつに好色のために直接何かをしたというのではない。彼は以前、隠し売女担当の同心であった。遊女という社会問題に関して、幕府ははじめから吉原という一画だけにかぎって許可していたのだが、時代を経るにつれて、江戸のあちこちに非公認の売春地区——いわゆる岡場所が発生しはじめた。これを取締る役人であるはずの漆間が、

数年前それまでの遊廓制限の慣習は何とも不合理と存ずる、と、のほほんと奉行に進言したのがもとであった。

姿かたちや性格がちがうのはまだしもとして、明らかに人生観まで正反対らしいのに二人が話の合うのを奇妙に思った或る男が、近江源三郎に、「おぬしのようにまじめな男が、どうして漆間みたいな野放図な男を認めるのか」と聞いたことがあった。それに対して源三郎は答えた。

「あれは大まじめな男だよ」

そして狐につままれたような顔をしている相手に、

「なるほど漆間は酒も好きだ、女も好きだ、遊ぶのも好きだ。だからといって、そのために自分の職を汚したというわけじゃない。もしそんな事実があったら、あのお厳しいお奉行さまがただですまされるはずはない。そもそも漆間が、誤解されそうなあんな意見を、平気でお奉行さまに具申したというのが、あいつの公明正大な証拠じゃ」

と、彼はむしろ敬意にみちたまなざしでいった。

「ああでくでくと肥って、いつもげらげら笑ってはおるが、あれは恐ろしい土性骨のある男だぞ」

そういわれて、聞いた者は、「なるほど、その点で二人は共鳴するものがあるのかも知れない」と思った。この近江源三郎も、思い込んだら何をやるかわからないような感じがあったからだ。何にしてもこの若い二人の同心は、一方は秀麗、一方は駘蕩の外観を持ちながら、たしかに一風変わった——同心らしからぬ同心にちがいなかった。

なんぞ知らん、二人を結びつけたこの「大まじめな土性骨」が、やがて二人を天国と地獄に相分つ鉄刀となろうとは。——

その風変わりな個性のせいではないが、二人のあいだに亀裂の徴候はすでにきざしていた。

町同心の近江源三郎が、しばしば山屋敷を訪れ出したのがそのはじまりだ。もっとも邪宗門をつかまえてここに送り込むのが彼の仕事で、そのうえ右に述べたように漆間とはよく気が合ったから、他人の眼にはそれほど異常には見えなかったのかも知れないが、それにしても彼はさしたる用件もないのによくやって来た。

彼としてはここへ自分の送り込んだお鳥のその後について責任を感じたのかもしれないが、しかしお鳥の惨劇について語ったのは翌年の春になってからのことであり、それまで彼が捕えたほかの四人についてはそんなことはなかったのである。それなのに、冬のあいだも、少なくとも十日にいちどは山屋敷を訪れた。

「まだ江戸に切支丹が潜伏していると思われるふしがある。むろん、乙見は——乙身の妻はそれを知っているはずだ」

と、彼は漆間にいった。

「この前は白状させるに至らなんだが、きっとここで吐かしてくれる」

しかし、春蔵の見るかぎりでは、べつに源三郎はその件について乙見の妻に手応えのある訊問をする気配でもなかった。

陰湿な牢獄――それは格子や壁に隔てられて幾つかならんでいる――の間の通路には、夜も昼も、ひくい合唱がながれていた。

「きょうまで栄華を極めようと、時来ってたちまち無常の風にさそわれれば何の益があるべきや……」

老人の声というより風音のような声であった。

「ひっきょう、デウスを大切に思い、御一体に仕えたてまつるよりほかは実もないことぞ。デウスを無二無三に思いたてまつる人は、死も苦患(くげん)をも恐れず、審判(ジュイソ)、地獄(インヘルノ)をも事ともせぬのじゃ……」

「アーメン！　アーメン！」

応える呪文も、人間の声というより冥府の波音のようであった。ここに三十有余年捕えられている伴天連キアラと奉教人たちの合唱であった。

七十六になるこのイタリアから来た伴天連は、しゃりこうべに銀の針をうえたように白髪に覆われて、この世のものならぬ魔神としか思われなかったが、切支丹たちは神々しさのかぎりと見えるのであろう。この合唱は、讃歌か悲歌か、いずれにせよ永劫につづくもののような恐ろしいひびきを帯びていた。

この神父ジョゼフ・キアラは、実はその昔いちどあまりの大拷問に棄教したことがあるのである。転んだのみならず、岡本三右衛門という日本名さえもらって、幕府の切支丹狩りの手先となったことさえあるのである。が、やがてまた立ち返って、以前に倍する確乎たる信仰者となった。それでもついに、このときからさらに八年後、八十四歳で病死するまで処刑されることなく生きることが出来たのは、何といっても時代の変化だ。ほかの切支丹たちと同様、もはやこの山屋敷に幽閉しておくだけで大丈夫だと幕府が認めたからだ。その通り、切支丹はこの後、或る奉教人によっていちど幕府は驚倒させられたのを最後の火花として、江戸に関するかぎりその根を絶つに至ったのである。

――いや、その最後の事件以後にもう一つ、これは外から潜入して来た伴天連にかかわる事件があったとつけ加えておこう。まるで、すべてが沈静に帰した宝永年間の日本に、ただ一つ落ちて来た星の小さな燃えかすのような伴天連であったが、やはりイタリア人のヨハン・シドウチといい、これを新井白石がこの山屋敷で審問した。その結果白石の著わした「采覧異言(さいらんいげん)」と「西洋紀聞」が幕末の黎明までをつなぐ日本におけるただ一つの西洋文明の星となるのである。その意味でこの山屋敷も史蹟として、ただ生ける屍の収容所のみの名をとどめるだけではなかったといえよう。

町同心近江源三郎はしばしばここを訪れて、伴天連の説教や奉教人の読経を聞いた。通路を歩きながら、しかし彼は制止もせず、黙々と腕組みをしていた。そして彼はいくどかその通路

の隅にうずくまって頭を垂れているお鳥の姿を見た。それを見ても彼は、案内の春蔵に叱咤の声をもらさなかった。

外見には明快俊敏で、仕事の上では「鬼同心」と呼んでもいいほどの源三郎だが、その実なかなか煩悶家であることを知っている漆間春蔵だが、これほど彼が悩ましい表情をしているのを見たことがなかった。そしてその顔は、日を経るにつれていよいよ翳のふかいものになっていった。——

源三郎は、夜でも山屋敷に泊って春蔵の長屋に枕をならべて寝ることがあった。春蔵は源三郎より五つも年上の三十歳で、もうとっくに妻帯していていいはずなのだが、どういうわけかまだ独り身であった。

そんなとき、源三郎は胸の底からの吐息とともにつぶやいた。

「ああ、この世に罪人は無限だなあ」

そして彼は、悠然と太鼓腹を天井に向けている春蔵を見た。

「おぬしは、何をいまさら同心が、というかも知れないが。——しかし、現場で狩りたてていると、それが無限なので、このごろこちらが無力感におちいるような気がする」

「そんなことをいわないで、せいぜい成績をあげてくれ。わしはだめだが、おぬしは出世の見込みのある旗がしらなんだから」

「人を罰して、出世がなんだ。考えてみると、おぬしはうまいことをした。ここは、たまにつ

かまって来る切支丹を閉じこめておくだけのことで、役人はひまだ。世間的に見れば左遷にちがいないが、しかし役人の桃源郷だよ。おぬしが実に太平楽な顔をしているのもさもあらんと羨ましい」

「なに、わしはここへ放り込まれる前からこんな顔をしてたよ」

そういわれてみれば、その通りだ。ともあれ、この切支丹屋敷詰めの役人となって落胆顔をする者が多い中に、漆間春蔵は実に安心立命の表情をして、ひげのない達磨みたいに安座している趣があった。

「悪い奴というやつはたしかにおる。そういうのをとっつかまえるのは何でもない。が、罪を犯すやつの五分の三か三分の二は、何かのまちがいで罪を犯したやつだなあ。こっちもその立場になると、ひょっとしたらやったんじゃないか、と思いたくなる例ばかりだよ」

こんな疑惑を持つ者は、ほかの同心には一人もあるまい。またそれを洩らす相手も一人もあるまい。近江源三郎と漆間春蔵なればこその話で、二人のあいだにこういうたちの問答が交されるのは珍しいことでもなかったが——以下はその年の夏のことだ。

四

「ふつうの罪人は、ほんとうをいうとぜんぶ許してやっていい気がする。また先天的に悪いやつはない、罰してみたところでいよいよ無益だろう。……おれは考えたんだがこういう連中を

救うのは、やはり信心しかないような気がする」

と、源三郎はいい出した。山屋敷が蟬しぐれにつつまれた夏の日のことであった。

「また信心しか、あらかじめ罪を防ぐものはないように思う」

「同感だ、といいたいが、近江、わしの考えでは間に合わないよ」

と、春蔵はいった。

「信心というのは、凡夫凡婦には実は大変厄介なものじゃ。なるほどいま寺々には坊主がおりそこへお寺詣りはしているが、坊主は大半凡俗よりもなまぐさないんちき野郎で、お寺詣りもほんとうの信心といえるかどうか甚だ疑わしい。——何にしても人生は甚だ短い」

そして、彼はニンマリと笑った。

「衆生済度は、やはり色道のほかはないな」

「なんだと？」

「おぬし、よくいうだろう、罪を犯すやつの多くは何かのまちがいからだと、そのまちがいの多くは金か色かで、その金のこともつきつめると色に因しておるようじゃ。むろん、すべての罪人がそうだというわけではないが、原因が獣的なものであるだけにいちばん衝動的で凶暴なものとなる。いわんや、はじめから悪いやつの肉欲に発する罪をや。……じゃから、色道をもって救えば、これらを救える。いや、予防ともなる。おぬしの信心よりも対象は限られるかも知れないが、しかし効験はるかにあらたかで、かつ即効性があるとわしは信じておる。わはは」

源三郎はあっけにとられたように春蔵を見やった。

「信心か。……おぬしのその信心もまた深いな」

そして彼は床の間の竹の花生に挿されている山百合を不安げにちらっと見た。

そのときは何もいわなかったが、その日帰るとき、源三郎はさりげなく聞いた。

「春蔵、あの百合の花は、この山屋敷でとれるのか」

「そうらしい。わしは気づかなんだがな」

漆間春蔵は愉しげに笑った。

「お鳥が採って来て生けてくれたものだ」

十日ばかりたって、近江源三郎はまたやって来た。春蔵は山屋敷からいわゆる切支丹坂を下った町の酒屋へいっていたのだが、いれちがいになったと見える。とにかく彼が一升徳利をぶら下げ、少し赤い顔をして長屋に帰って来ると、近江がきちんと坐って腕組みをしていたのである。

そして、しばらく何ということはない雑談をしたのち、卒然として源三郎はいい出した。

「あさっての夜、親戚へなりとどこへなりいって、ここは留守にしてくれぬか？」

なぜだ？　と春蔵は聞き返さなかった。じっと——しかし例のおだやかな眼で相手を眺めていたが、やおら、

「やるかね？」
と、いった。
愕然としたのは源三郎のほうであった。
「やるとは――おぬし、お鳥から何か聞いたのか」
「いや、何も。ずっと以前から――おぬしがお鳥をここへつれて来たときから、わしはおぬしを観察していた。その結果の想像じゃよ」
「な、何を想像したのだ」
「おぬし……切支丹になったのではないか」
ぱっと刀をひっつかんで、近江源三郎は立ちあがっていた。それに対して漆間春蔵は前に茶碗酒を置き、あぐらをかいたまま、泰然と見あげていった。
「ひょっとすると、それであさっての夜、この山屋敷におる切支丹たちを逃がすつもりで、わしの責任をまぬがれさせるために、わしを不在にしようとしたのではないか？――当ったか」
髪の毛も逆立つような顔色になったまま、まだ源三郎は口もきけなかった。図星であったのだ。彼はこの友人が八丁堀同心として、一見しまりがないようでいてなかなか有能な人物であったことを思い出す余裕もなかった。
「いかにも留守をしよう。まあ坐れ。……しかし、驚いたな、そうなりはせぬかと心配して見ておったが、切支丹取締りの同心が切支丹になってしまったとは」

春蔵はニタニタと笑った。
「じゃが、それだけに、とめてとまるおぬしの決心ではあるまい。またわしにとめる気はない――むしろ、おぬしらしいと思う。男、いちどの一生、やりたいことをやるがいい」
気圧されて、近江源三郎は幽霊みたいに坐った。
「キアラ伴天連もつれてゆくのか」
声をひそめて、春蔵が聞く。催眠術にかかったように、源三郎は答えた。
「いや、あのおかたは、自分が出ればかえって足手まといになる、自分はここで果てる、ほかの人々だけつれて逃げてくれと仰せられる。同様なことをいう老人や女がほかにもあり――あれの母親も出ぬという――逃げる気になったのは、七、八人じゃ」
「屈強の男たちばかりだろう？」
源三郎はうなずいた。
「先刻、お鳥から何か聞いたか、とおぬしがいったところを見ると、この件についてはむろんお鳥も承知の上だろうが、お鳥も逃げるつもりか」
と、春蔵は聞いた。源三郎はまたうなずいた。
「女は、お鳥一人じゃ」
「そうか」
春蔵は予期していたもののようにうなずいたが、すぐに首をふった。

「あれはやめたがよかろう」
「なに？　なぜだ！」
声をひそめるべき源三郎が、思わず大声をたてた。
「あれは、おぬしの悲壮なる望み――また聖なる人生をうち崩すもととなりはしないか」
「それは、どういう意味だ。漆間、おまえは――おれがあの娘に邪心でもあるというのか。ばかめ、そんな心があったら、はじめからあれをここへつれて来るものか。それこそ、おまえらしい下司のかんぐり――」
「下司か」
漆間春蔵はからだをゆさぶって、げらげらと笑った。
「下司にしても、とにかくいちどはおぬしから預けられた娘じゃ。責任上、あの娘の本心を聞いておかねば、わしはこんどのことで眼はつぶれぬ。もしおぬしに信じるところがあれば、あれをここへ呼んでくれ。わしがお鳥にいってきかせることがある。そのとき、話の途中でわしを斬ってくれてよい」
珍しく厳然としたようすで彼はいった。
「わしがつれて来ようか？　いや、おぬしがつれて来たほうがよかろう」
ほんのしばし源三郎はなお去就に迷う表情をしていたが、すぐに何やら決意した風で、肩を張り、出ていった。

やがてお鳥をつれて来た。
お鳥は小さい長屋の土間にひざまずいた。
山屋敷へ来てほぼ一年――彼女はいよいよ美しくなっている。背もややのびたようだし、肉もついたし――しかも、来たときのあの氷の花のような外貌に、あきらかに生命を吹き込まれて、そう、まだそこの床の間の花生に残っている山百合の花のように。
――もっとも、この変化はすでにとっくの昔に春蔵も承知している。何にしてもこの清純無比の美しさは、いつぞや春蔵が「あれに男を与えることで憑きものが落ちる」云々といったことが可笑しいようであった。
「近江から聞いた」
春蔵はいった。
「そこで、わしの意見がある。その意見について、最後にお鳥、おまえの考えを聞く。一語の返答でよいことじゃ。それまでは、どうぞ黙って聞いてくれ」
彼は、ゆっくりとしゃべり出した。
「近江はこれより切支丹に身を投ずるという。そしておまえをつれてゆくという。それに対してわしは、おまえをつれてゆくことはよすがいいといった。おまえという女が、近江の覚悟を崩壊させるもとになるだろうと見てのことじゃ。むろん、近江は怒った。自分の心は潔白正大そのものだといいたいらしい。わしに対して今さら嘘をいう必要のない近江だから、たしかに

本心であろうが、わしはその本心に嘘があると思っておる。近江は、実はおまえに惚れておる——まあ、しばらく黙って聞け。近江がおまえをここにつれて来たのも、それから何度もやって来たのも、おまえへの恋慕のせいだと見ておる。ありていにいえば、近江がこのたびのことの決行に踏み切ったのも、おまえがわしの身のまわりの世話などしているのを見て、わしに危険性をおぼえたからではないか？　つまり、それもおまえに惚れておるから、心配でたまらなくなったのじゃ。その通り、その点わしはまったくあぶない男だ。それどころか、わしも実はおまえに惚れておる。しかも、わしの場合ははっきりいって肉欲だ。ここへ来て、おまえが日とともに清らかになってゆくのを見ながら、しかしわしのまぶたには、近江の話した、おまえが非人どもに犯されている姿が粘りついて消えなんだ。おまえが切支丹の娘でなかったら、わしは手を出していたにちがいない。そういった具合で、わしもわしなりにおまえに惚れておるから近江のおまえを見る眼の変わり加減が、手にとるように刻々とわかったのだ。近江はしかとあるいは処置に窮しておまえをわしに預けたが、申しわけないが二人はいわば恋敵というやつになった。しかし、近江におまえをつれてゆくなというのは、そういう心から来たやきもちのせいばかりではない。近江のいのちをかけた人生——というのも可笑しいが、その通りだ——これからの人生にとって、おそらく害をなすだろうと思うからじゃ。近江はともあれ、げんにおまえといっしょにこの山屋敷を逃げ出すという切支丹どもの心をかんぐってもそのおそれがある。ここを逃げ出すのにも容易ならぬ勇気がいる。しかしそれは切支丹どもが悪いのでは

なく、おまえが悪い女だというのでもない。おまえはそういう女なのだ。いやでもおまえは、そういう影響を男に与える女なのだ。いやでも、——いや、そうではない。ほんとうのおまえは、切支丹のむれに入るより、むしろあの非人小屋で非人どもにもてあそばれていたほうが倖せなのではないか。——動くな、源三郎、あと一語でわしの長広舌は終る」

春蔵は、ふとい頸をかたむけて、やさしくお鳥にささやいた。

「お鳥、むろん承知の上だろうが、もういちど切支丹の道に入ることは恐ろしいことだぞ。寒風、惨雨ふきすさび、しかもこんどつかまったら、もはや山屋敷ではすまぬ。念をおして聞く、それでも近江についてゆくか？」

「はい！」

いっしんに彼の顔を見ていたお鳥は、ためらいなく澄み切った声で答えた。

「霊の助かりのためには、どんなことでも忍びまする」

「そうか」

春蔵はうなずいた。

それから立ちあがって、薄よごれた古箪笥の抽出から何かとり出して来た。

「おまえの母親はここを出ぬそうな。——いま思い出したが、これはそのおふくろから没収して、あまり美しいものだから、いかんことだがわしが預って、細工物としてときどき愉しんでおった。これを餞別としておまえにやろう」

それは細い鎖につけられた小さな銀の十字架であった。彼は土間に下りていって、それをお鳥の頸にかけてやった。

「しっかりやれ」

といい、それから小声で、

「しかし、もうだめだと思ったら、わしのところへ帰って来いよ」

と、つけ加え、さらに首をかたむけた。

「おお、そうだ、わしはそのころはもうこの山屋敷にはいまい。で、どこにおるか、いま自分でもわからぬが、その気になって探してくれれば、知れぬことはあるまい」

「漆間」

それまで顔を朱に染めたり、蒼白になったりしながら、歯をくいしばって坐っていた近江源三郎は愕然としてさけんだ。

「おぬし、どこへゆくのだ？　おれはただ、あさっての夜だけ――」

「おぬしの配慮はかたじけない。しかし、近江、実はまったくの偶然だが、わしも遠からずこの山屋敷も同心もおいとま頂戴して、別の人生を歩み出してみようと思案しておったのだ」

「えっ、別の人生？」

「ある意味では、おぬしの心境と似た心境でな。男一匹、たった一度の生涯、これはという仕事に打ち込んでみようと――」

「何をやるのだ」

「女郎屋」

啞然とした源三郎を見ながら、春蔵の厚い唇は笑っていた。

「むろん、わしに吉原で傾城屋が開けるわけもなく、わしのやりたいのは隠し売女屋の亭主だがね」彼はついに声をたてて、だぶだぶと笑った。

「実は、執念ぶかいようだが、そのためにもわが党の士として、お鳥が欲しかったのさ」

山屋敷に閉じこめてあった切支丹の男七人、と、下女のお鳥が官庫の祭具や経典を盗み出し脱走をして公儀の内部を驚かせたのは、それから二日目の風雨のはげしい夜――正しくいえば延宝六年八月末の一夜のことであった。同時に町奉行同心近江源三郎も失踪した。この二つの出来事は、おたがいに関係があるのかないのか、とみには判断も下せないほどの怪事であった。ただ、同夜、山屋敷同心の漆間春蔵には完全なアリバイがあったから、これだけは厳重な取調べの圏外に置かれた。

しかし、その年の秋に漆間も、同心の株を上司の次男坊に売って浪人をした。これもめったにないことではあったが、彼を知る者は、「なに、のんきに暮したいだけでござるよ」という彼の口上で、何となくわかったような気がした。それで、どうやってのんきな暮しをたてるのか、そこまで知ろうとする者もなかった。

五

その昔ローマでは切支丹は暴君に迫害され、奉教人は地下墳墓（カタコウム）にひそんで親から子へ聖なる教えを伝えること三百年にして、ようやく公許を得て白日の下に讃歌をうたうことが出来た——と日本に来た伴天連たちは説いた。

説かれた通りのことを、日本の切支丹たちもやってのけたのである。寛永十五年の禁教令以来、草の根までわけて邪宗門を狩ること二百三十余年、明治六年に禁制を解いてみれば、長崎天草一帯からウジャウジャと切支丹が出て来たのだから。

しかし、江戸は九州の果てではなかった。潜むべきカタコウムもなかった。公儀の網は完璧であり、市民の相互スパイ制ともいうべき五人組の制度さえあった。

その江戸で近江源三郎は新しい信仰の火だねとなろうとしたのである。山屋敷からこぼれ落ちたお鳥と七人の切支丹もそのまわりの埋み火となった。

失踪した彼は、大胆にも山屋敷にちかい御簞笥町に住んだ。もっとも燈台下暗しの意表をついたわけではない。そこに住む水野貢（みつぐ）という女・陰陽師（おんみょうじ）の家を適当として選んだのだ。それは一つには、彼が在職中、この陰陽師の過去について、或る秘密をつかんでいたためであり、かつその地下に大きな穴蔵のあるのを利用しようとしたのである。

あなぐらとは現代ではただ大きな穴の意味に解されているが、実は江戸期、地下に作った蔵

から発した言葉である。明暦の大火以後、あちこちで作られはじめたもので、切石を積んで壁とした地下室であった。

ここを彼は布教の根城とした。まさに江戸のカタコウムというべきか。

ほかの伴天連と同様、キアラも、日本から切支丹の火を絶やさぬようにといった。おそらく今日ただそれだけが彼の願いであったろう。源三郎はそれを遵奉（じゅんぽう）すべく誓った。しかし、それだけではない。

彼はこれをさらに拡めようと決心したのだ。それでなければ自分が切支丹になった甲斐がないと思った。彼は、ほんとうにキリストの教えを信心したのであった。

……一年で彼は、女・陰陽師をはじめ、そこに来る客を手がかりにして、奉教人を五十人近くにした。伴天連キアラすら思いもよらなかった江戸の隠れ切支丹の奇蹟である。しかしこのことにどれほどの超人的な努力が必要であったかは知る人ぞ知る。

その苦労のほどは、源三郎の蒼白くそげた頬にいかんなく現れていた。それはむしろ凄愴の感があった。

「デウスを無二無三に思いたてまつる人は、死をも苦患をも恐れず、審判（ジュイゾ）、地獄（インヘルノ）を事ともせぬ……」

地底の石室（いわむろ）に燃えしきる蠟燭を半身に受けて、近江源三郎は説く。彼はすでにシモン源三郎と呼ばれていた。

それにつづいて、彼の足もとにひざまずいたお鳥が誦する。彼女はフランチェスカお鳥という洗礼名の女であった。

「きょうまで栄華を極めようと、時来って無常の風にさそわれれば何の益かあるべき……」

「アーメン！　アーメン！」

石壁に黒い影をゆらめかしつつ、江戸の切支丹たちはひくく、しかも歓喜にみちて合唱した。

それにしても、なんとまあお鳥の美しくあぶらづいたことだろう。この女の美しさには限度がないのであろうか。——もし漆間春蔵がここにいるなら、源三郎の顔をのぞき、信者たちの眼をのぞき、例のぼやっとした微笑を浮かべたかも知れぬ。——たしかに、気のせいか、男たちの顔はフランチェスカお鳥の方に向けられ、女の切支丹たちの顔はシモン源三郎の方をふり仰いでいるようであった。

しかし、彼らの眼は、デウスも照覧あれ、シモン源三郎の彫刻的な顔には、憔悴はおろか凄愴の翳も見ず、ただ慈愛と潔白のひかりのみを見、フランチェスカお鳥の白蠟のような顔には豊艶の魅惑は見ず、ただ献身と清浄のかがやきだけを見ていたのだ。

同じ一年後の或る一夜、その漆間春蔵は、深川の永代寺門前の蛤町の一画に、八幡さまならぬ大仏さまみたいに安座していた。

赤い大鳥居のある大通りから裏に入り、細い掘割に面した雑然たる町で、ならんでいるのは茶店、居酒屋、一ぜん飯屋——それもことごとくいかがわしい店がまえばかりだ。いたるところに女が濃い化粧をした顔を出したりひっこめたりして、怪鳥のごとく妖蝶のごとく隠顕出没している。路地を奥に進むにつれて、いよいよ飲食とは縁がありそうになく、ただ脂粉と嬌声ばかりがながれているラピリンスの相を濃くしてゆく。

いうまでもなく、岡場所——非公認の売色街である。

深川の岡場所はすでに寛永年間にはじまるといわれるが、それも六カ所や七カ所ではなく、このほかにも品川、四谷、三田、根津、音羽、馬道、氷川、赤坂、湯島——と、江戸全体から見ても二十カ所や三十カ所ではなかった。——五、六年前までではだ。

それから、何度か大きな手入れがあった。いや、正確にいえば、それまでも何十回か取締りが行われた。

「傾城町の外、けいせい商売致すべからず」

という慶長十七年の幕府の命令のためだ。傾城町とは吉原のことであった。

不逞浪人の潜伏、放蕩による荒亡、女をかどわかす犯罪、これらを防止し、監視するためには、江戸の遊女町を一カ所にまとめるにしかず——という、吉原の開祖庄司甚右衛門の陳情を幕府がききとどけたのがそのもとだ。実際支配者としては、そのほうが好都合にきまっている。で、それ以来、江戸の傾城町は、吉原一カ所ときまっているはずなのだが。——

実際問題として、市民にとってはこれは大不都合であった。はじめの吉原は日本橋にあったからまだしもとして、その後浅草の北のほうへ移ってからは、馬か駕籠か大川を遡る舟以外に

交通機関のない時代、わざわざそこへ出かけるのは、労力、時間、金、いずれの点からも大ごとになる。そして、そこを必要とする欲望は変幻きわまりないものなのだ。

必要は発明の母であり、需要は供給の父である。かくて、江戸のあちこちに非公認の売笑の巣が簇生した。個人的にも夜鷹とか蹴ころとか提重とか呼ばれる私娼が湧き出した。

そこで吉原が柳眉を逆立てて、公儀に厳重な取締りを要望する。

「権現さまの御墨付により――」云々。

ほんとうは商売上の脅威なのだが、とにかくこれを持ち出されると、他の政治上の先例と同じく、公儀の役人は頭をかかえないわけにはゆかない。それにまた為政者には「道徳的にも人間の性的放埒はよろしくない」という高慢な観念がいつの世にもある。その心理の深層には老人の性的嫉妬がうごめいていることは、後世の――戦後の遊廓撤廃という社会的大事件におけると同様だ。

そこで、これに上から手入れをして、処罰して、一掃する。これに対して下からは、湯女、茶屋女、矢場女、踊子、巫女などの偽装をもって需要を満たす。私娼までが、舟にのる舟饅頭などという怪人魚に化身してレジスタンスを行う。

これは滑稽にして真剣な、この人間の世の永遠のいたちごっこであった。

とくにこの真剣味は、女と業者にあった。お上にさからうなどということはこの当時いのちがけであったからだ。

「それは、御定法のほうが無理と申すものでござりますよ。小便をするのに、いちいち一里も二里も駈けていって用を果たすやつがありますか」

ずばりとお奉行さまに進言したのは、隠し売女取締りの同心たる漆間春蔵であった。

「いや、これは小事に似て小事ではない。お上のほうが人道にそむかれておる」

そのわけを奉行にこんこんと説いた彼が左遷されたのは前にいった通りだ。

そして町奉行北条安房守は、五、六年前からたてつづけに江戸じゅうの密淫売に大弾圧を下した。かたっぱしから検挙して、業者はことごとく日本橋に晒し、売女はみんな吉原の最下級の切見世女郎としたのである。

それが――寄せては返す波のごとく、嵐にたゆとう柳のごとく、またもやぬけぬけと、まずこの深川の一画に怪しげな町が形づくられて――いまこの町の奥に、かつて同心であった漆間春蔵は悠然と鎮座している。

「はきだめや」

と、称する居酒屋の二階の三十帖ばかりの座敷だが、隅に何十枚もの屏風が重ねられているところを見ると、必要時にはそれで隔てて、何十かの小部屋となるのであろう。

彼一人ではない。――まわりに十数人の女がいる。それがほとんど腰巻一つ、あるいは羽織一枚をまとっただけで、まるはだかというのも五、六人いる。しかもその大半が、撩乱と敷かれた赤い夜具の上でおたがい組み合って、横たわっているのだ。

悠然と鎮座している？　――いや、いかにも脇息をひきつけてはいるが、よく見ると、この珍妙にして濃艶な白蛇の渦の中に坐った春蔵の象のような眼は異様なひかりをはなち、ひたいにはぬらぬらと汗が浮かんでいる。そして、絶えず四周を見まわしながら指揮している。

「そら、そこで腰をのの字にひねるのじゃ」

「お尻の穴をきゅっとしめて」

「そちら、声がよろしくない。それじゃまるであかん坊の泣き声のようじゃないか」

抱き合って横たわっている女たちのあいだには、数人の女が立っていて、これが駈けまわって、親方の指示通りフォームを直したり、コーチしたり、ときどき模範的発声を聞かせたりしている。

「いかにすれば男を悦ばせることが出来るか。――これは、考えかたにもよるが、わしの思うところでは、世のいかなる芸術芸道よりもやり甲斐のあることじゃぞ。むろん、女に対して男も同様じゃ。ただ男は、浮世にいろいろとほかに用事が多い――」

と、春蔵はいった。

「男にそれらの用をうまく果たさせるためにも、男を悦ばせることが何よりの力となる。実際、男というものはうれしいたわけ者で、女が悦ぶのがいちばんの悦びなのじゃ。悦ぶのが悦ばせることになるのじゃ。してみると、悦ぶことは芸でもある。道でもある。――仏の道といっていいかも知れん」

彼はげらげらと笑った。

「はきだめや、と名づけたのは、自分を塵あくたのように考えておる男どもに遠慮なく来てもらうためじゃが、おぬしたちにとっては悪かったかも知れん。ともあれ男の煩悩の捨て場所となって男どもを済度する菩薩となったと思え。つらいことがあっても、修行と思え。お釈迦さまの苦行にくらべたら何でもない。それどころか、こりゃ何も考えんでも極楽じゃろうが。いや、極楽極楽と思うておることが、いまいったように男どもにとっても極楽となるのじゃ」

彼は、はきだめや春蔵と名乗っている。しゃべっている言葉は、仏さまなど持ち出して説教くさいが、調子は駘蕩として、実は当人も酒ぶとりか色焼けか、弛緩した顔や肌のつやにも卑猥の色は覆えない。

とにかく赤い頭巾をかぶり、袖無羽織をつけたその姿は満足そのものであったが――それがふと別人みたいにまじめになると、

「よし、みんな下におりろ。おえな、おさろ、おたゆだけ残って。――おりたやつは、呑助にあの三人をつれて来いといってくれ」

と、命じた。

「おたゆ、おさろ、おえな、頼みますぜ、いまの呼吸を忘れないでな」

三人の女だけを残して、あとの女たちはおたがいに身を離し、汗をふき、衣服をつけて階段を下りていった。みんな授業の終った女学生みたいに――むろん、なまめかしさとしどけなさ

の極はつくしているが——表情だけは、安らかで愉しげであった。代って、一人の若い男が半裸の三人の男をつれて上って来た。半裸の三人の男はみな太い縄でうしろ手にくくられて、最初の男に縄の先を握られていた。

狐につままれたような顔をして、この座敷の猥雑なありさまとなお残る脂粉の香に眼と鼻をむけていた三人の男は、女と、それから赤い頭巾をかぶった男に視線を移してぎょっとした。

「野郎、どうしようってんだ？」

と、一人が牛みたいにうなった。三人とも顔は髯だらけ、からだは傷だらけで、人間というより獣めいた匂いを発散していた。

実はこの三人は、八丈からの島帰りで、その足で昨夜この近くの居酒屋に来て、そこで無銭飲食のあげく大あばれしているところへ、この赤頭巾の男が——彼らから見るとタガのゆるんだ布袋さまみたいな男がぶらりとやって来て、あっというまに三人とも縛りあげられてしまったのだ。そしてみなから袋叩きになりかかったのをこの男につれて来られて、一晩じゅう物置に放り込まれていたのであった。

「呑助、縄をといてあげろ」

春蔵は二重のあごをしゃくった。そうされたものの、いよいよあっけにとられている三人に、

「おまはんたち、女のほうにも餓えていたろ。好きなように食べな」

と、春蔵は笑顔で女のほうにもあごをしゃくった。

数分ののち、三人の島帰りは、三人の女に飛びついていた。まるで爪でひき裂き、牙でくいちぎるような物凄じさであった。——が、十分もたたないうちに肉塊のぼろきれみたいになって放り出されたのは、この三人のあらくれ男のほうであったのだ。

「もっと食えよ」

と、脇息に肘をつき、頬杖ついた春蔵は笑った。三人の男は、へたばった姿勢で、口もきけず、中の一人は両手を合わせて拝んだ。

「満足したか」

三人はたしかに満ち足りて、別の生物みたいにおだやかな人相になっていた。一人が、涎をたらしながら虫の息のような声でいった。

「親分——まだどんなおかたか知らねえが——おれたちゃ親方のためにゃ死んでもいい。どうぞ乾分にしてやっておくんなんせ！」

六

また一年たった。延宝八年五月、四代将軍家綱は五代将軍綱吉と代ったが、地底の世界に変りはなかった。——いや、新将軍と新老中堀田備中守が果断な性格だけに、治安風紀の面ではさらに厳しくなったといえよう。

それと前後して、シモン源三郎は御簞笥町の女・陰陽師から三田の天草屋という海産物問屋

の地下蔵に移っている。ここの主人は豊田軍記という元九州浪人だが、やはりひそかに水野貢の穴蔵にかよって来た切支丹だ。それも、また源三郎が在職中彼の死命を制する秘密をつかんでいたのがもとであった。

移動したのは、女・陰陽師自身に何かあったせいではなく、山屋敷からつれて来た切支丹のうちの三人が姿をくらましたからだ。その原因は、彼らとシモンとの論争に発した。彼らは、もうこれ以上切支丹をふやすのは危険である。われらだけでその命脈を伝えるのに努めればよいといい、シモンは、なおふやさずして自分が乗出した意味がどこにあるといった。で、深刻な論争のあげく、三人がそこの穴蔵からふっと姿を消し、彼ら自身のいのちにかかわることだからまさか密告するとも思われないが、それでも万一のことをおもんぱかって、三人の知らないはずの三田の切支丹の穴蔵に移ったのであった。

一年たって、シモン源三郎の頬はいよいよそげ、だれの眼にも凄愴の鬼気を帯びて見えた。切支丹独得の信者としての勤行——断食（ゼジン）とか懺悔（ジンシビサン）とか鞭打（ジンシビリナ）などの苦行をふくむ——には、ますます自他ともにきびしくなった。

シモンは、前夜に異性と交わった信者が、地底の聖なる集会に来ることを拒否した。驚くべきことには、信者が告白しなくても、彼にはそれがわかるらしかった。切支丹だって正当な交合であればそんなことは許されるはずだが、彼は許さなかった。シモンは憑かれた人のようであった。次第に切支丹たちの彼を見る眼には、畏敬を越えて薄いながら恐怖のひかりが漂うよ

うになった。

夏になって、天草屋に天草から海産物を乗せた船がやって来た。主人軍記——いまは軍兵衛という——の故郷である。源三郎は思いついて、「やって来た漁師の中に、天草騒動のときの子や孫はいないか」と聞き、「もしあったら、四、五人、おぬしの眼で選んで、しばらくここに残さないか」と相談した。

「……その件では、四十年以上もたって天草ではなお煙が残っておるほどでござる。危のうござるぞ」

と、天草屋軍兵衛は不安の色を浮かべた。彼はシモンの意図を読んだのである。

「だから、火だねをまいておくのだ。やってくれ」

と、シモンは厳然と命じた。

それで、四人の漁師が残って、天草屋の手伝いをすることになった。筋骨りゅうりゅうとして素朴な海の男ばかりであったが、いずれもその祖父とか母親とかが磔（ほりつけ）になったという履歴を持ち、そのうち三人は大兵（たいひょう）の若者であったが、一人、波七というのはまだ十六、七で、スラリとしてりりしい美少年であった。

シモン源三郎はこの波七の教化からはじめ、数カ月にして彼らのすべてを穴蔵のマリアの画像の前に礼拝させるまでになった。

その年の終りになって、もう三日ばかりで、また船が天草から来ることになっている或る一

日。——切支丹となった四人は、その船で帰す予定であった。——覆面をして外出し、帰って来て、ひとり穴蔵に下りていった源三郎は、そこに思いがけないものを見出したのである。

蠟燭の燃える祭壇の前にフランチェスカお鳥が上半身をあらわにして立ち、その下に四人の漁師がつっ伏していたのだ。つっ伏した姿勢ではあったが、四人とも首だけもたげて、飛び出すような眼で彼女をふり仰いでいた。お鳥の雪のような乳房のあいだには銀のクルスがかがやいていた。

「何をしておるのじゃ？」

ふいに呼びかけられて声も出ない漁師たちに代って、お鳥が答えた。

四人の男は数日のうちに天草へ帰る。シモンさまのお申しつけはよくわかったが、それゆえにやがて自分たちは磔にもなるであろう、せめてもの名残に——信仰をかためるため、誓いを刻むために、彼女のそんな姿をいちど見せてくれと彼らは哀願したというのだ。

そう説明するフランチェスカお鳥は、しかしこれもどきまぎと、頬に血をのぼしていた。彼女はますます豊艶になった。にもかかわらず、ここ一年のあいだに、どういうわけか苦悶の翳が漂い出して、その顔に名伏しがたい悩ましさが現れているようであった。

「誓いを刻むため？　そのためにフランチェスカの裸を見せてくれといったのか？」

シモン源三郎はそういったきり、しばらく黙って、そのまわりを歩いていた。ただ蠟の燃える音だけが地底にながれた。

「うぬら、フランチェスカに邪心を持ったな？」

やがて、彼はうめいた。

いまはじめてそれを看破したと思ったわけではない。実は彼は以前から——この漁師たちの来る前から、男の切支丹たちにその疑いを霧のように抱いていたのだ。そのくせ彼は、女の切支丹たちの自分を見る眼に同じ靄がかかっているのに気がつかなかった。

ただ、お鳥の自分を見る眼をのぞいては。

それは彼も意識していた。しかし彼は、いつぞやの漆間春蔵の「近江はおまえに惚れておる、それがすべてをうち崩す」といった言葉をそれ以上に意識していた。

その予言はおれには当らぬ、と、彼は歯をくいしばってつぶやいた。しかし、ほかの男の切支丹に対しては？　疑惑と恐怖は、ながいあいだ彼の胸を吹きゆらがせていたのだ。

しかも、お鳥そのものにおかしいところがある。彼女の自分を見る靄のかかったような苦しげな眼が、ここしばらく、波七にもそそがれているようであった。——源三郎は鋭くそれを読んでいた。

「そんな邪心があっては、われらの聖なる使命は果せぬぞ！」

ふいにシモン源三郎は腰の小刀を抜いた。

「その手本に——見ろ！」

そして、ぎょっとして眼をむいて凍りついた四人の男の眼の前で、彼は袴のひもを解き、お

のれの男根をつかみ出すと、異様な音をたててそれを切り落としてしまった。——心の中で、「漆間、これでも崩れるか？」と絶叫しながら。……

三日のちの夜、天草屋軍兵衛がただならぬ表情で源三郎にいった。

「あの四人、船には乗らなんだと申すことでござる」

「なに、天草へ帰らず、どこへ？」

「さあ、それがかいもく——あの天草と海しか知らぬやつらが江戸のどこへ消えたものか？」

天草屋の満面は怯えのためにくろずんでいた。

「無知なやつらだけに、どこで公儀の網の目にかかるかわからぬ。これは容易ならぬことになりました喃……あれらを切支丹にしようとしたのはやはり失敗でござった！」

同じころ、はきだめや春蔵は品川に移っていた。

新将軍の世になって、果せるかな、たちまち二度にわたって江戸じゅう隠し売女の大検挙が行われ、数年前の取締りからわずかに甦りかけていた深川の永代寺門前町一帯もまた掃蕩されてしまったが、彼はこれにひっかかったわけではない。

春蔵はもう何十人かの女をかかえているくせに、めったに客の男たちの前に姿を現さなかった。その正体を知る者は、たとえ近所の連中であっても、まずほかにはもらさない人々であった。彼は、自分が隠し売女屋の亭主をしているなど、二年以上たっても決して町奉行所には知

られない自信があったが、それはやはり、かつてその道の専門家——蛇の道は蛇というやつであったろう。ところがその夏、右の検挙騒ぎが吹き過ぎたあとになって、突然彼は昔の仲間に踏み込まれたのである。

が、このときの春蔵のあしらいこそ見ものであった。彼はその奉行所同心をはきだめやに泊めておき——それは何者かの密告であること、またこれを知っている者は今のところ与力同心あと一人ずつであることをつきとめると、その与力同心も呼んで十日ばかりのあいだに三人とも腑ぬけの肉塊に変えてしまったのである。女体のふつか酔いともいうべきありさまになり果てると、春蔵は彼らに大金を背負わせて帰した。

しかし、そのあとで彼はすぐに深川のはきだめやをたたんだ。恐慌を来してそれでやめたのかというと、飄然として品川に移って、またここで商売を再開した。

彼がまた居酒屋をひらいたのは、非人村のすぐそばの場所であった。その一帯は、江戸の非人頭の二人の大親分の一人——いわゆる品川の松右衛門の支配するところで、むろんはじめそのほうからいちゃもんがつけられて来たが、たちまち彼はそれを籠絡した。非人もよろこんで客にとるという条件でである。春蔵が深川からつれていったのは、呑助をはじめとする七、八人の男衆だけであったが、その中に例の島帰りの三人もいて、それらのつらがまえが示威となったのはむろんである。

驚いたことには——彼自身も驚いたのだが、深川でたっぷり金をやって解散させたはずの女

たちが、こちらの移転場所をわざとかくしたにもかかわらず、どこから聞いたか、二、三カ月のうちにぞろぞろと、みんな集まって来たことだ。

で、彼の商売はますます盛大に——女群につつまれて、依然として彼は赤い頭巾の下で春風駘蕩たる笑みをもらしていた。

七

さらに一年過ぎた。

はきだめや春蔵の太平楽は、さすがにいつまでもつづかなかった。彼はまた奉行所の役人に急襲されたのである。それもこんどは、とうてい買収など効きそうもない捕手の一隊であった。

「漆間春蔵、御用だ！」

「御用、御用」

これには彼も胆をつぶして逃げた。棒を持って、三人の島帰りの男たちが死物狂いに防いでくれなかったら、——彼らは一人殺され、二人つかまった——彼もあぶなかったほどである。

三日のちの夜、細い秋の新月のかかった柳原の土手にぼんやりと浮かんでいる編笠の影のところに、三人の男が近づいた。

「親分、にぎりめしをもらって来ましたぜ」

「酒もあります」

編笠は、ふとっちょで、べたんと尻をついて地べたに坐っていた。はきだめやの春蔵だ。ぐいぐいと酒を飲み、がつがつとむすびを食っている彼に、一人がまず報告した。

「女衆はみんな伝馬町の牢にしょっぴかれて、吉原へ送られるようで……」

「可哀そうにな。吉原は隠し売女ほど自由じゃねえ。しかし、まあそれですむだろう。いずれおれが金をためていって、片っぱしから請け出してやろう」

彼はげっぷを吐いて、それから三人を見あげた。

「波七はどうしたんだ」

「へい、お奉行所の近くで、急に駈け出していっちまったんで——」

「そんなところをまだウロウロしてると危ねえんだが、大丈夫かの？」

と、春蔵は大きな頭をかしげた。

三人の男たちは、彼が使っていた男衆であった。——一年ばかり前、彼の居酒屋はきだめやに迷い込んで来て、酒を飲みながら溜息をついている四人の男を彼がつかまえて聞いてみると、天草の漁師で江戸から帰る船に乗り遅れたのだといった。話があまり間がぬけすぎていて春蔵は大笑したが、そこでこのまま江戸にいたいというので彼が使ってやることにしたのである。

春蔵は、まず女を与えた。吉原では、いわゆる女郎屋者が遊女に手を出すのは禁制になっているが、春蔵はこだわらなかった。客も自分も使っている男たちも一視同仁であった。彼らは夢かとばかり——実際、彼らが江戸にいたいといった目的はこのためではなかったかと確信出

来たくらい狂喜して、女たちにかぶりついた。ただ、もう一人の少年を除いては。

それからも、その少年だけは一人女禁制を決め込んで、春蔵はべつに強いなかったが——少年といっても、背はふつうの江戸の男より高かったし、その様子にちょいとひっかかるところがあったので、「おめえ、天草に好きな娘でもあるのか」と聞いたこともあったが、彼は笑って首を横に振っただけであった。「何にしても、もういくら何でも当分店は開けねえ。なにしろ名ざしで踏み込まれたのだから、は、は、とうとう天下のお尋ね者だ。——さて、そうなると、おれはしかたがねえとして、おめえたちの身のふりかたに困ったの」

と、春蔵はつぶやいて、薄い月影をすかした。

南のほうから二つの影が近づいて来た。それがどうやら、一人が一人をひっくくって、その縄をつかんでいるらしい。

「や、波七だ」

と、天草の漁師がさけんだ。

やって来たのはまさにその波七であったが、彼が縛ってつれて来た男の顔を見て、みんな眼をまるくした。

「こいつが奉行所からこそこそ出て来やがったんで、追っかけていってつかまえて、十ほど拳固をくらわしてやったら、吐きました。親方のことを奉行所に投文したのはこの野郎ですぜ。何でも吉原の首代になって親方を売ったってんで」

と、波七は息をはずませていった。「吉原の首代」とは吉原おかかえの私娼の探索役のことだ。

「しかも、呆れたことに、ゆくゆくは親方と同じことをやるつもりだったてんで——」

三人の漁師は茫然として眺めたのち、やがて息まき出した。

「これァ呑助どん——」

「あにきじゃあねえか。——いや、とんでもねえ裏切り野郎だ」

「親分、絞めてしまいましょうか」

春蔵はふいにげたげた笑い出し、実に可笑しくってたまらない顔つきになっていた。

「わかった。いいさ、いいさ、縄を解いて逃してやれ」

「へ？」

「それならそうと早くいってくれりゃ、のれんは分けてやったのさ。おれはもう店を開かねえから、安心してやってみな。しかし、呑助、おめえも知っているように、これァいのちがけの商売だぜ。よく気をつけてやってくれ。——縄を解いてやれ」

「親分。——すまねえ！」

一声怪鳥みたいにさけんで、呑助は土手を這うように逃げていった。

さてそれから、このあとでどうするか、という話になり、ふと波七が、「それなら、当分隠れるのにいいところがある。あそこは、どうだ？」といい出した。それについての四人の可否

の問答をきいていた春蔵が口を出して、「あそことはどこだ？」と聞いた。

しばし、迷ったのち、波七が説明しはじめた。聞いて、春蔵は、「その連中ならわしは知っているよ」とうす笑いした。そして、びっくりしている四人に、首をふった。

「しかし、そこへゆくのはまあ遠慮するとしよう。というより、わしはまだいまの商売をつづけたいのじゃよ」

「えっ、しかし、親分はいまはもう店はひらけねえと――」

「だからさ、野天でやるのよ。それ、夜鷹、船饅頭の面倒を見てやって、左様さな、江戸じゅうを隠し売女屋にしてやるのよ」

はきだめや春蔵はまた呵々大笑した。どうやら彼は、こんどは私娼の大将になるつもりらしい。もうこの男の信念は承知しているが、しかし天草の漁師たちもあっけにとられるこの一道への執念であった。細い新月の下にずんぐりむっくりしたその影が、しかしみるみる巨大にふくれあがったように見えた。

「そしてどこまでも江戸の男どもの煩悩の面倒も見てやらねば、わしのこの世に生まれて来た甲斐がないわい。わはははは」

本人以外に知っている者もなかったが、天草の漁師波七が、茫然と三田の天草屋の地下蔵に帰って来たのはその数日後のことであった。

「どこにいっておった」

と、シモン源三郎は聞いた。穴蔵の景観は同じはずなのに、なぜか人の匂いのしない荒涼とした印象であった。

これに対し、波七は密淫売の親分のところにいたけれど、やはり自分はどうしてもここが忘れられないので帰って来たといい、またその親分がよろしくといったと告げた。

「なに、そやつが？　何というやつだ？」

それに対して波七が答え、その話がまだ終らぬうちに、身ぶるいしていた源三郎はいきなり波七の胸を刺し通した。

「あっ、何をなさるのです？」

悲鳴をあげるお鳥に、シモンは苛烈な眼をむけて、

「堕地獄の男はもはやここに入れるわけにはゆかぬのだ。その上、こやつ、ここのことをしゃべったと？　裏切者だ！　これは、こうしてはおられぬ」

と息を刻むようにいって、穴蔵を出ていった。

「……おいら、迷ったっけが……やっぱり帰って来るのじゃなかったなあ」

苦悶に白眼をふるわせながら、血の海の中に波七はつぶやいた。

「親分、すまねえ。おいらが裏切ったのは親分のほうかも知れねえ。あ、あ、親分ならゆるしてくれるけど……」

涙を凍りつかせて息絶えた波七のそばに、お鳥は眼を宙にあげて、いつまでも坐っていた。
その夜、フランチェスカお鳥の姿は天草屋の穴蔵から消えた。

八

チラリ、ホラリ——と宵月に蝙蝠が飛ぶ。
と見えたのは、手拭いや薦をかぶった女であった。それが一人や二人でなく、奇怪な鼠鳴きの音をたてながら出没している筋違橋から浅草橋にわたる柳原の土手であった。その妖鳥を無視して、黒い頭巾の武士が一人歩いていった。
十町もある長い堤のなかほどに、枯草の蓬々としげった小さな岡がすぐそばにある。そのかげにぽつんと灯影が見えた。
侍は立ちどまって、しばらくそれを眺めていた。それから跫音忍ばせて近づいた。まるで火に吸い寄せられるこれまた妖鳥のように。
彼はその建物が非人小屋であることを知っている。隙間だらけの板壁から中をのぞきこんであぶら火に照らし出されている光景を見た。
まわりには、垢だらけ、毛だらけの非人が何十人かあぐらをかいて二重、三重にならび、そのまんなかに白い人魚を抱いて笑っているのは、赤い頭巾に袖無羽織を着た——いや、その胸もはだけ、下半身はまるはだかにちかい肥満漢であった。彼は象のように眼を細め、涎をたら

し、膝の上の一糸まとわぬ娘の股間を愛撫しながら、うたうようにつぶやいていた。
「おお、おまえは帰って来たか。やっぱり、おまえは帰って来たか……」
そして、この世のものとは思われぬほど清純で豊艶なその女は、からだをくねらせ、しかしそれは決して逃れるためではなく、悦楽の極致に達してふとっちょにしがみつき、忘我の痙攣を見せながらひっきりなしに、男の大きな耳たぶや頬っぺたや厚い唇に吸いついているのであった。
「ああ、パライソ……わたしのパライソはやっぱり、ここ、ここ、ここ……おお、デウスさま！」
と、甘美なむせび泣きをもらしながら。……
三年前、謎の失踪をした同心近江源三郎が南町奉行所に出頭して、北条安房守に面会を申し込んだのはその翌日のことであった。彼は、いつぞや山屋敷から七人の切支丹をつれ出したのは自分であり、自分も実は邪宗門を奉じたが、その後七人の切支丹はすべて病死し、自分も悪夢より醒めるところがあって、お裁きを受けるべくまかり出たと述べて、町奉行所を驚倒させた。
それから彼は、御公儀にあくまでさからい、婦女誘拐、強姦、密淫売の罪にふけりつつ、闇にひそんでげらげら笑っている不敵の痴者漆間春蔵のいどころを教えた。
「むろん、拙者、それで自分の罪を免れるつもりはござりませぬ」

氷のような歯ぎしりの音を微かにひびかせながら、源三郎はいった。
「ただ両人、同じ日、同じ場所で磔刑を仰せつけられとう存じまする」
その夜のうちに、柳原の非人小屋が捕吏の大群に急襲された。非人は蜘蛛の子をちらすように逃げ去り、一人いた女は恐ろしく強い三人のあらくれ男にかつがれて逃げたが、めざす漆間春蔵はたしかに捕えた。
それというのも。——
「やめろ、やめろ、無茶な抵抗はやめろ」
と、その主犯が笑いながら、最後まで匕首をふるってあばれている一人の男を止めるためにのこのことひき返して来たからである。
そのくせ、そのとき捕手の乱刃を浴びて地に倒れたその男をのぞきこんで、彼はわっと驚いた胴間声を張りあげた。
「なんだ、こりゃ……変なところに出て来やがった……呑助じゃないか！」

江戸切支丹史における最後の火花として幕府を驚かせた奉教人、近江源三郎が品川鈴ヶ森で磔刑になったのは、十日後のことである。同時に、江戸における隠し売女の主犯として、これはあとにも先にもただ一人、漆間春蔵も磔にかかった。
その日、——ならんで磔にかかった二人のうち、漆間のほうがすでに人間のぼろきれのようになっていた。それまでの拷問のためであった。それが、血に黒ずんだ顔から、にやっと白い歯を見せて源三郎に笑いかけた。
「近江——これがキリストの殉教というやつかな。山屋敷でキアラ伴天連から聞いたわやい。切支丹の開祖は、泥棒といっしょに磔になったというが、おぬし、望み通りであろう喃。いや、おめでとう、あはははは」
シモン源三郎は、キリストのこともユダのことも考えていなかった。ただ、これが自分の大殉教だと考えて、空に流れている血のような夕焼雲を眺めていた。
潜伏の最後の一年前、自分は男根を切り煩悩を断った。あれが自分の小殉教であった。にもかかわらず、あれ以来、切支丹の男たちはみな自分を逃げるようになった。女たちに至ってはは たと近づかなくなった。……殉教の尊さ、厳しさがあれではまだわからぬ愚かなる羊ども、きょうこそしっかりと眼をあげてシモン源三郎の死を見るがいい。——彼は眼を下界の、磔柱をめぐる大群衆に落とした。
「あちらへいったらな、近江、ちょいちょい話しに来てくれ」
高い空をわたる秋風が、山屋敷のころと同じ調子の声を吹き送って来る。
「おぬしとはもっと話してみたい気がする。やっぱり、話が合うのじゃないか？」
「うるさい、黙って死ね！」
たまりかねて、源三郎はさけんだ。

「おれとおまえは、ゆくさきがちがう！」

聖なる死の覚悟にもかかわらず、その形相は憎悪の化身のようであった。彼はこの日、審判（ジュイ）の神の前に、このけがらわしい肥満漢をいっしょにひきずってゆこうとしたのは、大きなまちがいではなかったか、とはじめて悔いた。

こいつ、げらげら笑いながら、天国（パライソ）までくっついて来るかも知れぬ。——

「ありゃ、りゃりゃ、りゃあ！」

槍が落日に真っ赤にひらめいて、まず春蔵が刺されはじめた。同時に遠い地平線から、近い周囲から、泣く声が渡って来た。波濤のごとく。——それは主として女声であった。

あ？　あれはだれのための声だ。おれか、おれにきまっている、いや、ひょっとすると？

刺されない前から、夕焼けの中に奇妙に白っぽく顔色の変わったシモン源三郎の耳に、また天上の鐘のような漆間春蔵の笑い声がどよもして来た。

解説

細谷正充（ほそやまさみつ）（文芸評論家）

〝「開化物と切支丹物は大衆小説の鬼門だ」といわれたのはたしか吉川英治氏だったと思うが、もうそろそろこのあたりでこの鬼門を解いてもらいたい、というのが作者の祈りである〟

これは山田風太郎のエッセー『「警視庁草紙」について』の結びの一文である。いまさら書くまでもないが、この『警視庁草紙』を皮切りに『幻燈迷馬車』『明治断頭台』等、明治時代を伝奇的手法で描く長篇を次々と発表し、ついに作者は明治物というジャンルを打ち立ててしまった。その後、明治を舞台にした物語を書く作家が続出し、現在では明治を時代小説の範疇に収めることに違和感を感じる人もほとんどいないだろう。しかし、作者の先駆者としての活躍がなければ、現状がどうなっていたかはわからない。そうした意味で、鬼門をたったひとりで押し開いた作者の功績には計り知れないものがある。だが、吉川英治をして鬼門といわしめたという、もうひとつの切支丹物の方はどうだろうか。

作者が切支丹物に手を染めた時期は非常に早い。デビューから二年後の昭和二十四年には、

本書に収められた「スピロヘータ氏来朝記」「邪宗門仏」「奇蹟屋」が発表されていることからも、それは明らかであろう。たしかにこの当時、作者は自己のスタイルを模索中であり、その作品群は驚くほどバラエティに富んでいる。この切支丹物も、そうした模索の一環として捉えることも可能だろう。しかし、いわゆる風太郎忍法帖から明治物へと続く一連の作品の中に、縷々、切支丹が登場することを考えれば、そこに作者の深い関心と思い入れがあることは明白である。

たとえば短篇「忍法天草灘」「忍法ガラシャの棺」「甲賀南蛮寺領」等、忍法帖の衣装をまといながら、切支丹物といってよい作品は多い。また、明治物でもキリスト教は何度も登場しているが、中でも「明治十手架」は、その題名からわかるように明治物であると同時に、元八丁堀同心原胤昭が、いかにして日本最初のキリスト教教誨師になったかを綴った切支丹物ともいえる大長篇である。

もちろん山田風太郎以前に、切支丹を作品で扱った作家は多々存在する。そして近年では、切支丹やキリスト教を作品のテーマとした作品も増えつつある。日本の切支丹受難史を知るならば、それが作家にとっていかに魅力的な題材であるか、いうまでもないだろう。では、なぜ永年にわたりタブー視されてきたのか。その答えを得るために、再び作者の言葉を引用させていただこう。古今東西の有名人の臨終場面を集めた『人間臨終図巻』のイエス・キリストの項で、作者はキリストの臨終場面を『マタイ伝』より引用した後、

〝この人物の「臨終」については、「異教徒」にとってまことに書くことが難しい〟

と述べている。あれだけ切支丹物を書き続けた山田風太郎をして〝難しい〟と嘆かせる点に、切支丹物がタブー視されてきた原因があるといえるのではないか。

そのキリスト教だが、この宗教については、いまさら改めてここで述べる必要もないだろう。世界五大宗教のひとつであり、欧米を中心にその教えは世界中に広まっている。神の子イエス・キリストの教えにより、自由と博愛の精神に基づく敬虔な信仰生活を送っているのだ。ただ注意したいのは、その一方で異教徒から聖地エルサレムを奪回するとの名目で、イスラム教圏に戦争を仕掛けた十字軍、あるいは中世ヨーロッパにおける魔女狩りなど、狂信としか呼びようのない行動を引き起こした事実だ。昨年、日本全土を恐怖に陥れた、某宗教団体の事件を見てもわかるように、極端な信仰心は一般常識と乖離した視野狭窄に陥りがちである。

さまざまな事件や逸話に彩られたキリスト教の歴史だが、その中でも日本における布教と信仰活動は特殊なものであった。なぜならば、徳川幕府によってキリスト教を禁じた日本では、世界的に例を見ない大弾圧が行われたからである。踏絵といった信者識別方法や様々な拷問。切支丹として捕らえられた者は棄教することでしか、助かることはできなかった。この命と信仰のどちらを選ぶかという究極の選択を突き付けられたとき、人はどのような道を選ぶのか。

不謹慎なようだが、こうした時の人間心理には、興味深いものがある。人間の美と醜、善と悪を対比させて描くことを好む作者にとって、切支丹という存在は、まさに絶好の素材といえる。さらに付け加えるならば、一瞬にして価値観を一転させてしまうころび切支丹の姿に、昭和二十年八月十五日の敗戦を境に、やはり価値観の一変した日本人の姿を重ねることが可能であろう。こうしたことを踏まえた上で、本書に収められた六篇を眺めてみたい。

「姫君何処におらすか」(「講談倶楽部別冊」昭和三十一年六月号)

本文中に〝浦上の「三番崩れ」〟という言葉が出てくるが、後に「四番崩れ」と呼ばれる最大の悲劇が、浦上の隠れ切支丹を襲うことになるのだ。本作は、その「四番崩れ」を背景に、奇怪な切支丹秘史が展開する。

隠れ切支丹の発見と善導へ奔走する宣教師のプティジャン。彼は、部漣島という新たな切支丹宗徒の島を見付ける。しかし、島で目撃した宗教儀式は、プティジャンの想像を絶したものだった。やがて「四番崩れ」で捕らえられた部漣島の切支丹の中から、マリア様に擬されていた女性が消えてしまう。そこには戦慄すべき真実が隠されていた。

部漣島の隠れ切支丹を嫌悪しながら、彼らと同類であることを暴露してしまうラストのプティジャンの姿から、宗教の独善性を鋭く抉った傑作である。

「スピロヘータ氏来朝記」(「宝石」昭和二十四年七月号)

物語はフランシスコ・ザビエルが、日本に上陸した八月十五日から幕を開ける。この八月十五日という日付は作者の創作ではない。恐るべき偶然の一致だが、間違いのない事実である。

ザビエル一行に加わっていたパウロ弥次郎は、無頼の生活でかかった病から救われたことから信仰に目覚めた若者である。だが、教えを広めようとする市来の城で出会った城主の側室は、かつて自分が犯し、その兄を斬り殺した相手であった。苦悩し贖罪を求める弥次郎に、彼女は残酷な復讐をする。しかし、その結果は彼らの予想することもできないものだった。

キリスト教の伝来が、そのまま性病の伝来になってしまう強烈な皮肉に、人間の聖と俗の永遠の相克を感得することができる一篇である。

「邪宗門仏」(「オール讀物」昭和二十四年七月号)

弾圧の恐怖から一度は棄教したお千絵。だが、肥前平戸にやってきたイギリス船クローグ号の中で聖母子像の絵画を見たことから、切支丹に立ち戻り処刑される。船長のセーリスは、彼女が見た絵は聖母子像ではないと否定するのだが……。

何事に対しても客観的な立場から皮肉な視線を投げる作者にしては、神の奇蹟をストレートに描いているのが珍しい。

なお、蛇足になるが、当時のヨーロッパの為政者による植民地政策の先兵として、好むと好

まざるとにかかわらず宣教師が利用されていたことにも、注意を喚起したい。

「奇蹟屋」（「富士」昭和二十四年十二月号「恋の奇蹟屋」改題）

芋虫のような風体の太兵衛は、伴天連のズニカに逢ったことから、熱心な切支丹となる。偶然の一致から奇蹟を起こせると思われた太兵衛は、天草の城の不知火姫に惚れ、水上歩行や星を降らせるなどの奇蹟を見せ、彼女の心を摑もうとした。もちろん、奇蹟はいかさま。この衆人環視の中での奇蹟トリックが奇術趣味横溢で、なかなか楽しい。だが太兵衛の努力の甲斐もなく、トリックがばれた上、禁宗令により捕らえられ処刑されることになるのだが……。

いかさまの奇蹟屋が最期に見せた奇蹟が、清らかな信仰ではなく、恋の妄執によるものだというところが、いかにもこの作者らしい。

「山屋敷秘図」（「面白倶楽部」昭和二十五年十一月号）

切支丹宗徒を捕らえておく井上筑後守の屋敷は、通称〝山屋敷〟と呼ばれていた。その山屋敷に捕らえられている伴天連キアラの元を訪れたのは、ころび伴天連の沢野忠庵ことクリストファ・フェレイラだった（余談ながら、この沢野忠庵は長篇『外道忍法帖』にも、その奇怪な姿を見せている）。彼はキアラに向かい、己が背教した理由を得々と説明する。それは「悪、醜、苦痛に愛と快感を、名誉や平和や富や美食に、憎しみと不快を感じ」る、感情倒錯症によるものだというのだ。キアラは忠庵の言葉を詭弁と受けとめる。しかし忠庵の仕掛けた罠に嵌まったとき、彼もまた奇怪な感情に身を任せていくのだった。

背教をテーマに、不可解な人間心理を描ききった本作は「姫君何処におらすか」と双璧を成す風太郎切支丹物の傑作である。

「売色使徒行伝」（「オール讀物」昭和四十八年一月号）

巻末に控えた本作には対象的なふたりの同心が登場する。ストイックな町同心近江源三郎は、いつの間にか切支丹の教えに教化され、山屋敷から破牢させた切支丹を率いて江戸に潜伏。密かに厳格峻烈な布教活動を続ける。一方、時を同じくして切支丹同心を辞めた、エピキュリアンの漆間春蔵は隠し売女の元締めとして、人生を謳歌する。やがて、それぞれの人生に破綻をきたしたふたりは、仲良く処刑されることになるのだった。

あたかもキリストの処刑を再現しながら、源三郎と春蔵の対比により、作者は宗教の持つ無謬性に、きつい一撃を加えているのだ。

最後に意外な事実をひとつ。作者の切支丹物が一冊に纏まるのは、不思議なことに本書が初めてである。これもまた、切支丹を扱うことの難しさの現れであろうか。ともあれ、この一冊が鬼門を打ち破る新たな力となることを期待したい。

●底　本

「姫君何処におらすか」（『山屋敷秘図』所収　旺文社文庫　昭和五十九年十二月刊）
「スピロヘータ氏来朝記」（『山屋敷秘図』所収　旺文社文庫　昭和五十九年十二月刊）
「邪宗門仏」（『幽霊船棺桶丸』所収　桃源社・ポピュラー・ブックス　昭和四十二年四月刊）
「奇蹟屋」（『山屋敷秘図』所収　旺文社文庫　昭和五十九年十二月刊）
「山屋敷秘図」（『山屋敷秘図』所収　旺文社文庫　昭和五十九年十二月刊）
「売色使徒行伝」（『踏絵の軍師』所収　旺文社文庫　昭和六十一年二月刊）

〔お断り〕

本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。（編集部）

売色使徒行伝

著　者　山田風太郎
発行者　櫻井道弘
発行所　廣済堂出版
〒105 東京都港区芝3-4-12
電話　03(5445)1202(営業)
03(5445)1204(編集)
振替　00180-0-164137
印刷所　廣済堂印刷株式会社
〈編集担当〉伊藤秋夫

©1996　山田風太郎　Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-60537-X C0193